曠
叢
野
書
靜思

曠野
叢書
倉田百三著
靜思
曠野社出版

序文

我々は靜思しなければならない。殊に今日の如き喧噪と動亂との時代に於いて、自己の本當の姿を見失はない爲には、先づ努めて外界の騷音と刺激に耳目を塞ぎ、思ひを潜めて、内に聽き、かくて後、靜かに外界の事象を觀察しなければならない。今の世に自分は何よりも靜思に堪へ得る人を求める。靜かに思はざる心に神は宿らない。靜かに眺めざる眼に眞景は映らない。我々はその餘裕が無いといふことを口實にしてはいけない。我々が旣に「價値」の問題に就いて、何事かを反省し得る限りは、そして反省せざるを得ない限りは、我々の前に思想の世界が嚴存する。而して思想の世界に於いては我々は何處迄も眞理そのものを求めなければならない。他の如何なる功利的目的をも求めてはならない。假令それが、人類の安危にかゝはる如き重大なるものであつても、その關心の爲に眞理討究の態度を不純にしてはならない。その冷靜さは一般に眞理を愛するものに、特に思想家と呼ばるゝ程のものに缺ぐべからざる第一の格資である。その冷靜さを缺ぐ時我々は、社會的功利の爲に道德を、道德的功利の爲に藝術と宗敎との獨立を侵害するやうになる。かくの如き

思想家は眞理の使にあらずして、功利の奴である。例へば社會制度の改造がいかに人類の幸福にとつて重大であつても、(自分もそれを確信するものであるが、)その事が直ちに——他のより深き根據の上に立たずして——「殺すべからず」との道德律を犯すことは出來ない。「殺すべからず」との道德律がいかに人類の平和にとつて重大であつても、殺人者を對境とする藝術の觀照を犯す事は出來ない。更に「殺人者も亦赦されてあり」との宗教意識を犯す事は出來ない。我々は何處迄も價値を、眞理をと追求しなければならない。而して現實の實際的問題は現に追求し得たる眞理、價値を理想として、現實の事情に於いて、最高可能の處に於いて解決すべきである。最高可能の實行的意識の尺度を以て、眞理、價値を測つてはならない。此の意味に於いて、價値は功利を超越する。抑も藝術家にとつて制作が正業であつて、宗教教化は副業であり、宗教家にとつて、神との交契が正業であつて、教化濟度が副業であるが如く、思想家にとつては、價値の探究が正業であつて、實際問題の方法的研究は副業である事を忘れてはならない。況して經濟革命の實行運動の直接の指導

の如きは思想家にとつて餘業である、或る人々が此れを一つの事業として專門に從事することは素より差支なく、又必要である。たゞ此れに從事せざる思想家を、只それ故に輕蔑するのは非理である。自己の正業に專らなる藝術家を非難するのは顚倒である。殊に此の頃の新聞雜誌の社會主義的批評家には、暴力を認める唯物的、直接行動的、改造論者に非されば、唯それのみの故に――根據を示さずして――非難するものが多い。かくの如きは既に理非を離れた狂逆である。思想上の暴力である。暴力の支配する所眞理と價値との世界は消滅する。思想家は時代を超越しなければならない。我々は既に過ぎた革命の世紀に於いて、時代の潮流を超越して、自己を守り、永遠の眞理の使徒たるの本分を盡した先人を持つてゐる。今日の世紀に於いて、時代を超越して、純粹に價値と眞理に即し得る思想家がないならば、それは世紀の恥辱であり、後世の物笑ひとなるであらう。素より革命は眞理なき所には起らない。それは眞理の一つの勝利である。結果より觀察すれば世界は革命によつて、一段の、若しくは飛躍的の成長を遂げる。然し乍ら、永遠の眞理を對象とする思

想家が、それをもつて滿足すべきではない。革命はまた一方暴力の、暗黑の勝利である。結果として後より觀察すること、動機として豫め選ぶのとは別事である。我々は罪を犯す事によつて、結果として一層高まる事が出來るからと云つて、罪を犯すべきであらうか。要するに革命は思想家にとつて靜觀さるべき流轉の相である。若し思想家が、時代の潮流の中に立つて、只押し流され、民衆の趨勢と共に終始して、永遠の眞理の上に立つ自己の足場を失ふならば、思想家としての第一の本分を失ふものである。思想家の本分は何處迄も、只眞理と、價値とを追求する處にあり、一面の眞理或は、或る階段の價値と云ふが如きものは、思想家にとつては、見渡さるべき展望の只一部、或は把握し、やがて超越さるべき內容の只一境に過ぎない。偉大なる思想家は、人間性のあらゆる相を通觀して、當にあるべき相を暗示し、宇宙の意志を洞察して、世界の當に到るべき理想鄉を彷彿せねばならない。思想家の本分は、從つて正業は、實に此處に存する。思想家は時代の趨勢や、民衆の意向の如何

に關はらず、道德に於いては常に善其のものを、藝術に於いては美其のものを、宗教に於いては信其のものを究明しなければならない。然し乍ら思想家と雖も、一個の人間であつて、時代と民衆との中に生きる以上は、これらに無關心で生きるべきではなく、又生きる事は出來ない。時代と民衆に課せられたる問題を自己の上に背負ひ、自分が最も正しく其の問題を解決することによつて、時代と民衆とを導くべきである。これ思想家の副業である。併し乍ら、此の場合に於いても思想家の適當な役目は、民衆の理想を設定する事である。その理想を遂げる手段を吟味する事である。實際運動の直接の指導の如きは、他にその人があるであらう。自分は一個の思想家として立つ者である以上、上述の如き意味に於ける思想家の本分を盡さん事を心懸けたい。此の書に收むる諸論文は宗教や、勞働問題や、藝術や、戀愛等の諸問題に亘つて貧弱ながらも、いづれも眞理と、價値とに直接に屬したる討究のみである。一見私事に渉るもののも公な、本質的な問題と、密に連なつてゐる事を信ずる。視野の擴がりと、考へ方の複雜さと、意識の深さとに於いては、「愛と認識との出

後」より一段の成長を遂げた事を自分は感ずる。讀者は此の書に依つて、思想家としての自分を見てくれる事が出來るであらう。理想を設定する事を思想家の、特に自分の如き素質の思想家の第一の役目と自分は信ずる。而して又注意すべきは、此の論文集に於いて、一方自分が從來の往相の世界より一轉して、還相の世界に下らんとする傾向が暗示されてゐる事である。自分は無相の世界に安住する事が、益々確かになつて來た爲に、却つて愈々往相の世界に深入りすると共に、次第に安じんで還相の世界に於いての自由と、融通とを獲得し得るに到り、今や、暗示に滿ちたる將來を自分の前に豫感する。

（一九二二・六・一〇）

目次

曠野叢書6
清宮彬装幀

静思

倉田百三著

曠野社出版

勞働運動の道德的根據に就いて

歐洲大戰の終結以來文化のあらゆる方面に渡つて改造の要求とその實行的運動とが澎湃として起つて來た事は云ふまでもなく、この世紀の著るしい現象であるが、中に就きても勞働者と資本家との間に横はる不合理を改革せんとする運動は最も重要な根本的なものとして、かつ最も實行的情熱を帶びて眼立つて見える。勞働運動に從ふものは今やたゞに、自己の階級の權利を伸張せんとする戰ひの戰士としてのみならず、一つの正しき理想を宣傳せんとする使徒の如き意氣を持つて世に臨んでゐるやうに見える。その運動がかくの如き情熱を帶びることが出來るのは、彼等が自分等が正しき立場に立つてゐることを自ら恃むことが出來ると信じるからであり、そして社會の識者や學者や一般の智識階級の同情がこれに集まるのもその主張が正しいものであることを認めるからであらう。しからば何故に勞働運動は正しいのであらうか。この倫理的根據を吟味することは今日實に大切なことである。今日多少でも愛と公平との眼を有する人は何人といへども勞働運動に熱い同情を感ずることを禁ずることは出來ないであらう。もとより私もその一人である、しかしなが

ら私達は勞働運動をその正しき限りに於てのみ認めなければならない。勞働者に對する同情の爲めに眞理を曲げてはならない。今日に於ては思想上に於て勞働者の味方であり得ることよりもある場合にはその敵であり得る事の方に思想家的勇氣を要する。思想家はいかなる場合にも永遠の眞理の上に立ち、時代を超越してゐなければならない。決して民衆に媚びてはならない。今日多少にても勞働運動の權利を制限せんとするが如き言說をなすものは直ちに妥協的な、いはゆる溫情主義者と見なされる傾向がある。おそらく、私がこれから僞さんとするが如き純粹に理想的な論議を見れば私を私が一人の、勞働者ミ利害を共にせざる、而して衣食住に就いて不安を感ぜざるブルジョアである故に、かゝる空想的なる提言をなすものミして退けるものが多いであらう。しかし一槪にかく云ひ棄てる如き人は共に眞理を研究する資格なき人々である。

かつ、私はボルセヴィキ治下に於てすら、勞働を免ぜらるゝ程度の病身を以て猶且つ自分の勞働で衣食住の資を得てゐる一個の勞働者であり、自分がペンを持つことは健康なる

農夫が鍬を持つよりも筋肉的にも困難であることを云つて置きたい。

抑も勞働者が自己の運動を正しとなす根據は何處にあるであらうか。恐らくそれは勞働を以て人間が衣食住の資を得る權利を獲得する資格となすところにあるのであらう。そこから『勞働せざるものは食ふべからず』の法則が生ずるのであらう。しかしこの法則は人類を實際に平和にして公平ならしむる經濟組織の制度上の約束の上に立つてのみその効力を持つてゐるものである事を忘れてはならない。即ち人類を平和ならしめ、その衣食住に關して平等ならしむるにはかくかくの方法が最も適當であるとしてその方法に即してはじめて効力あるものである。元來天地の間に於て、それ自ら効力あるものではない。この點をはつきり區別して置かなくてはならないと思ふ。そこの錯誤から勞働者は自己の運動を條件を附せずして正しきものと主張し、その法則がそこより發したる際、即ち愛と正義に悖るが如き方法を取るが如き場合に於ても尙且つ、自己を正しきものとして、押し貫ぬかうとするやうになる。その場合彼等がたゞ權利の爭奪の觀念或はやむを得ずして取る苦肉の

手段としてのみ自己の立場を認めるならばそれで良い。しかしその場合にも世の勞働運動指導者の多くがなすが如く自己を正しき改革者或は愛と平和の使徒の如く思ふのは思ひ上りである。此の思ひ上りは公平にして勞働者に熱き同情を捧げてゐる識者の心を閉じしめ、離れしめ、結局彼等自身の運動の成功にとつて、不利益な結果を來さずにはおかぬと思ふ。私がこの貧しき感想を書く目的は人間の正しきパンの得方に就いて考へ、勞働運動をしてその正當なる立場に立たしめ、その運行を正しくかつ滑らかにしたいためである。

如何なるパンの得方が最も正しいであらうか。この問題の解決は深くして、むづかしく、素より今の私に解決する絶對的確信はないが、今の所では、私はやはり、我等に生を與ふるもの——我等を創つたものから養はれて生きるといふ心持が一番正しく合理的な氣がする。神本主義とでもいふべき立場、西田氏の所謂『佛飯をいたゞいて生きる』と云ふ立場である。聖書の言葉を大切だから念のために引用する——馬太傳の第六章に『あゝ信仰薄きものよ。さらば何を食ひ何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふ勿れ、これみな異邦人の切に

求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらのものゝ汝等に必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求めよ、然らばすべてこれらのものは汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふ勿れ、明日は明日、みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」とある。これによれば自分等は神の前に正しく生きれば衣食住は神が保證してゐて下さることになつてゐる。これより深い立場があらうとは思はれない。考へてみても、自分らを創つたもの――自分らに生を與へた者は そのものゝ意に適ふやうに 創られたものが生きる限りは、生きるものに缺くべからざる衣食住は保證してくれるのが自然であり、當然であるやうに思はれる。神のみ心に適ふやうに生きるものは神が養つて下さる筈である。こゝの信仰に はつきりと立ち得る人が 最も正しきパンの得方を體得した人ではあるまいか。自分らは權利としてパンを要求することは出來ない。たゞ許されて與へられるのである。自分はその意味で勞働とパンとを直接に結びつけて考へるのは一番深い立場ではないと思ふ。

勞働したからパンを得る權利があるのではない。それだつたら病人や不具者や子供はパンを得ることは出來ない。パンを得るためには誰かゞその方法としては働かなくてはならないけれども、いくら働いてもそのことがパンを得る權利の源となることは出來ない勞働は報酬を求めずして一つの奉仕としてなされ、パンはその勞働の報ひではなく神が我々の生存を許してその生存に必要なものとして與へて下さるといふ風に考へたい。勞働したからその勞働の量に相當したゞけの報酬例へば賃銀を權利として要求するといふのは道德的には根據はないと思ふ。たゞ社會經濟組織の或る便宜上の約束の上に立つて、權利があるだけである。若し勞働運動といふものが此の權利を最後の根據として居るものならば自分は非常に不完全なものと思ふ。それだつたら弊害が百出する。決して深い生活法とは云へない。勞働はパンを得る權利を獲得する資格としてなされてはならない。神と人類に對する奉仕として報酬の要求なしになされねばならない。從つて若し或人にとつて或時勞働するよりももつと大切な事があれば勞働しなくとも許されねばならない。病人は勞働にたへ

るほど恢復するまでは勞働は免じられなくてはならない。子供や不具者や總て勞働に堪へ得ざるものは勞働は免じられなくてはならない。過激派政府の治下に於てもこのことは認められてゐるのであるが、否むしろ、これらの勞働に堪へ得ざる者にも勞働を餘儀なくせしむるが如き現在の經濟組織を改革することがその理想のかなり大きな一つであるのだらうが、この一事はとりもなほさずその制度を與へる根據が勞働そのものゝ上になくして他の觀念例へば『人類的愛』の上にあることを證據だてゝゐる。從つてその改革運動がその愛の原理に背反するが如き方法を認めるならばそれは矛盾であつて、その限りに於て自己の理想を裏切るものと云はなければならない。道徳的原理としては勞働する人もまた病人と同じくパンを『儲ける』のではなく與へられるのであるといふ心持ちで生きなくてはならない。パンをGainするのではなくBegするのである。『強いて生きる』のではなく『許されて生きる』といふ氣持になることである。たとひ一日十時間以上も働く人でも、我等の日用の糧を今日も與へたまへといふ心持で、パンを神に乞ふ氣でなければならない。徹

底的に云へば働いて食ふのではなく、乞ふて食はねばならぬ。『所謂人天の供養』を受けて生きるといふ眞の意味の乞食の氣持でなければならない。然しながら私がかく云ふのは決して勞働を尊ばないのではない。勞働は神と人類とに對する實に大切なる愛の奉仕である。然かも勞働はそれ自身に尊いのみならず、又愛を實にするものとして尊い。私は愛と勞働とを結びつけて考へずには居られない。愛は勞働することによつてその果を結ぶと云つていゝ。働かすに愛するといふことは空しい氣がする。勞働は人間の心から怠惰と、奢侈と、總て隣人に重荷となるが如き慾望を驅逐して、忍耐と勤勉と相互扶助の觀念に導く。勞働する者は尊ばれなくてはならない。少ししか働けなくても許されねばならないが、多く働く者は多く尊敬されなくてはならない。最もよく働いて、然かもそれを功とせずに、最も謙遜に神に糧をこふ人が最も祝福されたる人である。かゝる人こそ眞の勞働者である。此の意味に於て私は過激派政府の制度よりも、武者小路實篤氏の『新しき村』や、西田天香氏の『一燈園』の制度を以て一層眞理に適ふ社會制度であると信ずるものである。

上述の如き根據より考へるならば、勞働問題は人類の集團若しくは階級間の問題ではなくて、個人對人類の關係、若しくは被造物と造物主との間の問題である。故に人類初まつて以來、此の問題は常に人間の前に置かれてあり、實際に數千年の昔より聖人と言はるゝ程の人は、皆自己の一身に於て此の問題を解決してゐなかつた者はない。此の問題を解決しないならば、聖人の域に入つたとは云へない。釋迦、キリスト、その使徒達、フランシス、又支那や日本の高僧達は皆此の問題を解決して居た。彼等は盡く上述の如き廣義の神本主義の立場に立つて、パンを人天の供養に仰いでゐる。これに依つて見ても、如何に此の生活法が最も深きものであるかゞ窺はれるのである。自分等はその本質的な意味に於ては、自分以外の同胞の狀態如何にかゝはらず、即ち彼等が盡く富み榮へてゐやうとも、此のパンの問題は、自分一個の問題として飽く迄も考へなければならないのである。然し乍ら又勞働運動は、かくの如き精神的精進の念より生じたるものでなくとも、又他の原因より自分達の重大なる關心となり得る。それは即ち同胞への愛からである。即ち愛を以て同胞

の狀態を關心する時に、彼等がパンの問題について、調和ある狀態に置かれずして、その大多數の者が苦痛の中に生を送り、且つそのパンに乏しきことが他の多くの精神的の苦痛かも誘起してゐるのを見る時に、誰か彼等をその苦痛より免れしめんことを希はないで居られやう。然かも其處にその原因が明らかに見へ、道が見出されてゐる時に於て猶更らである。然かも又一方にはかゝる愛はかく大多數の同胞の不幸を看過して顧みず、然かもその原因を自ら作れるところの少數の同胞が何故に同じ愛を起さないのであらうかと云ふ必然の疑問とならないでは置かないであらう。その時自分達は如何にもして、彼等同胞がその持てるところのパンを公平に頒ち、かゝる苦痛より免れんことを希ふのは當然である。然らば、その願ひを滿たす道は如何の問題が生じて來る。その時自分達はそこに二つの道を見出すであらう。一つは彼等の愛に訴へ、彼等をして自發的にその問題を正しく解決せしめんとする教化の道である。他の一つは一つの權力を以て、彼等にその正しき解決を强制する道である。昔より聖人は前者をとつてゐるが、今の過激派等は後者を選んでゐる。

こゝに自分等の前に一つの精神的課題、試みが置かれるのである。然り、それは實に、彼の荒野に於けるキリストの前に二千年の昔、悪魔が置いたところの恐るべき試みである。自分等は今彼の試みを、も一度生き生きと思ひ起さねばならない。悪魔は云つた。『汝若し跪きて吾を拜せば、世界の國々とその權力(ちから)を汝に與へやう』と。その時若しキリストがレーニンであつたならば、悪魔の誘ひを受け入れたであらう。何となれば、若しキリストがその權力を得たならば、それを以て、强制的に神の國を地上に建設することが出來たであらうから。然しながらその時キリストはその誘惑に打ち克ち、遂に教化の道を選んだ。即ち愛と犧牲との道を同胞に教へ、彼等をして自ら選んで、自由意志を以つて、神の國を建設せしめんとしたのである。即ち彼等を、先づ神の子とならしむることに依つて、神の國を建設せんと欲したのである。その荒野に於けるキリストが、悪魔の試みに負けたのが即ちレーニンである。而して世の勞働運動の指導者達は、彼等が何等かの强制力を認むる限り、結局、試みに負けたるキリストである。今嚴正なる道德の原理の上に立つて、かゝる

強制力を認むる勞働運動は、その限りに於ては正しき根據を要求することは出來ないであらう。何となればかゝる方法はかゝる方法を用ひしむる動因、即ち愛と矛盾するからである。神の國は神の心に適ふ方法のみに依つて建てられなければならない。然らざればそは惡魔の手の關與せる國であつて神の國ではない。然し乍ら我等がその試みに破れるには實に同情すべき、無理からぬ、人間らしき事情があることは認めなければならない。その事情あればこそ、その試みは我等にとつて恐るべきものとなるのである。蓋し是の如き教化の道が、最も理想的であることは何人も認めるであらうが、是の如き道に依つてその理想の遂せらるゝ事は果して可能であらうか。よし可能であるとするもその實現の日はいつであらうか。現にキリストより二千年の後同胞のかゝる物質的の不調和は益々甚だしくなつてゐるのではないか。而してその間、我等は眼前に同胞の苦痛を見、又將來に於てかゝる苦痛の永續すべきことを想像せらるゝのである。その時同胞への愛が強ければ強いだけ、且つ同胞の苦痛が切迫すれば切迫するだけ、かゝる理想國を一日も早く建設せんと希ふの

は自然である。その時何等かの權力を以て、かゝる國を强制的に建設せんとする願望の起るのは實に無理からぬ心理的過程と云はなければならない。而して遂に蹶然としてその方法をとるに到りし者が今の露西亞の過激派を初め、勞働運動の指導者達であらう。自分はその過程に無限の同情を感じないでは居られない。(此の外に猶愛の觀念の上に立たずして、たゞ自己の權利を伸張せんとする欲望のみより勞働運動に從事する者もあるであらう。がかゝる運動と雖も勞働者の側にては、自己の生存權の支持としての同情すべき辯解はあるが、併し何等道德的根據を有せざることは無論である。何となればかゝる欲望は彼等の敵、即ち資本家の自己の權利を維持せんとする欲望と同質のものだからである。かゝる場合の勞働運動の根據はたゞ權利の爭奪の觀念であつて假令勞働者の側に同情すべき事情はあつても、そのために自己を正しとする恃みを持つことは許されない。)然し乍らその同感の故に眞理を枉げてはならない。道德の原理を立てんとする時、飽く迄も嚴正でなくてはならない。今暫く實際に目前の同胞の苦痛を救濟する効果如何の問題を離れる時、何

人と雖もキリストの道が最も道徳的であることを認めない譯にはゆかないであらう。が、強制の道を既に選んだとした場合、我等はせめて如何なる心持ちに於てかゝる方法をとることが道徳的であるであらうか。勞働運動の道徳的根據とは畢竟かゝる意味での根據でなくてはならない。かゝる根據であるに過ぎない。それに甘んじる時初めて勞働運動は神と人類との同情を招き得るのである。初めて人間らしく、殊勝にして、神の憐みと恕しとを享くるに足るものとなるのである。自分は此の分に甘んずる謙遜を彼等に希望せずには居られない。それは實に彼等の當然の負擔(おひめ)であり、その負擔を忍ぶ時に、彼等は初めて人の反感をなだめ、同情を集め、その運行を滑らかならしむることが出來るのである。自分は若し彼等が、如何にしても教化の道に堪へ得ないならば、せめてかゝる謙遜を希望しないでは居られない。自分は若し彼等がかゝる態度を承認するならば、自分の感情に於ては毫末も彼等を非難するの氣にはなれない。(それを正しいとは思はないが)それはあだかも敵が劍を以つて己れ若くは己れの子を刺さんとする時に、我等がその敵と戰はない事が(た

とひそれが正しくないことは認めて居ても）可能であるか否かの問題である。その時甘んじて自ら殺され或は子供を見殺しにしても、猶且つ戰ひを避け得る人のみ初めて勞働運動を非難することが出來るのである。今自分はかゝる德を備へてゐるとの自信を持たない。故に彼等を非難する氣にはなれない。然し乍らかゝる場合自分は自分の不正を承認して神に謝する事は出來る自信がある。故にかゝる場合自己を正當であるとして主張する人を思ひ上りとして非難することは出來る（言ふ迄もなく、法律上の正當防衛の如きは道德上、正當であることは出來ない）勞働運動に對して自分が非難の感情を持つてゐるならば、それは實に是の如き意味に於てのみである。然し乍らこのことたる決して小さなことではない。それは實に彼等が神の憐みを享け得るか否かの資格の問題である。人間として愛すべき者であり得るか否かの資格の問題である。自分が此の一文を草した目的は實に此處に存する。自分はレーニンの如き人が若しも自ら神の前に自己を罪ある者と認めてこれを標榜し「神よ吾は吾が罪を爾に謝す、然れ共ゆるし給へ、吾はかくなさずには居られないので

ある」と祈りつゝなすならば彼が取れるが如き方法をも責める氣にはなれない。自分はレーニンの如き人が恐らく愛深く、正義の念強き人であることを想像しないでは居られない、自分は彼の英國や佛國の僞善的なる政治家を憎む時に、自分の愛が如何にレーニンの如き人に傾くかを感ずる。戰爭の度毎に自分の感情は常に過激派の勝利を祈つてゐることを感じる。然し乍ら彼等を正しと認めることはどうしても出來ない。それはあたかも彼の義賊を如何に愛し得ても正しと認めることが出來ない如きものである。自分はむしろ彼等に對する自分の本能的愛を心置きなくはたらかしめんために、彼等が自らの不正を承認せんことを希望するのである。かくの如き承認は彼等が彼等の心より無益にして過度なる憎惡を斥け、その作るところの犧牲と過失とを眞に必要なる限度に止めしむるに役立つであらう。斯くの如き承認は道德の神聖を保つために缺く可からざるものであり、承認する者の心事を一層奧床しく見せ、其人格の高さを示すものである。何となれば其人が心の中に祀つて居るところの理想が如何なるものであるかと云ふ事こそ人格の高さを決定する最も本

質的なる標準だからである。自分は八十の理想を抱いて七十の善行を爲し得る人よりは、たとひ三十の善行しか爲し得ざるも、百の理想を抱いてゐる人をより高き人格者となすものである。若しも勞働運動の指導者等が此の承認を拒むならば彼等は道德をなみし、神を瀆す者である。其の人類の思想上に及ぼす永遠の禍は、彼等が彼等の企圖が成功したる曉、人類に與へ得る福によつてつぐなふ事は出來ない程深重である。自分は若しレーニンの如き立場に立つならば、神に許しを乞ひつゝなしたい。その事を標榜したい。彼等の多くは人類の大多數のものを幸福ならしむるために少數のものを敵となすことは當然であると考へて居る如く見えるけれども、それはどこまでも經濟的見方であつて道德ではない。かゝる方法は神の國を建設するに用ふべからざる方法である。若しその方法を用ひることが許されたのであつたならば、二千年の昔キリストはあの十字架を負ふ必要はなかつたのである 即ち惡魔の提言を受け容れゝばよかつたのである。而して地上の國の權力者となり、其の權力をもつて敵を壓服して自己の信ずるところを強制すればよかつたのである。自

分はキリストがレーニンよりも偉大であり、純粋であり、眞により深く人類の運命を氣にかけて居た者であるを思はずに居られない。自分はレーニンの如き人の心事を思ふ時に涙を禁じ得ない程同情を感じはするが、それだからと云つてその立場を道徳的に承認する事は出來ない。たゞ願はくば彼等が神とその律法を瀆さないで、自己の立場を守るだけの謙遜を希望せずには居られない。神の律法の神聖だけは不可侵のものとして保つて貰いたい、若しレーニンがそれを認めないならば、彼は結局神の座をねらふところのルチフェルである。その傲慢は罰を蒙らずには置かないであらう。結局レーニンの如き人の立場は佛教に所謂天輪聖王の立場である。武力を以て法の尊嚴を保ち、其普及をはかることを名譽ある使命となす王である。天輪聖王は衆生の尊敬を受くるに足るであらう。然かし彼れが佛の前に謙遜であり、其の劍をたゞ破邪のためのみに用ひ、且つたとひ破邪の爲とは云へ劍を用ひることを自ら罪惡と認めて、其の罪惡の故に己の王冠が菩薩の瓔珞よりも光なきものである事を認め、且つそれを認むることを反つて自己の心の内の最貴最重の理想のた

めに願はしきことであると思ふときに於てのみ、天輪聖王の位置は祝福されたるものとなり、初めて法界に於ける或る重要なる役目を果したるものとの譽れをうけることが出來るのである。自分はレーニンが神の前に謙遜であれば、天輪聖王として認めることは敢へて辭さないつもりである。しかしながらその位置は云ふまでもなくキリストや道元の如き聖人の下位に屬するものである。自分は眞摯にして愛に富み、且つ有爲なる青年がその興味と情熱とを勞働運動に傾注するものゝ如何に多きかを知つてゐる。而して又尊敬すべき經濟學者がかゝる青年を子弟として鼓吹するに勞働運動の事業を以てすること、就も明治維新の時學者が勤王攘夷を以てその子弟に望みたるが如き觀あるを知つてゐる。勞働運動に熱心なるを以て有名なる京都大學の或る經濟學者の如きは今の時代に於て唯一の愛は勞働運動に從ふことであると教へてゐると聞いてゐる。自分はその學者の心事に同情を持ち、且つその學者が無神論者なるが故に宗教を認めざることについても敢へて非難しやうとは思はないが、少なくともその學者の據つて以つて自己の運動を是認するところの人類的愛

の觀念の上に於て、自己の言說が果して充分に嚴密であり、矛盾なく徹底してゐるか否かについては今一層論理的ならんことを學者的良心にかけて、希望しないでは居られないのである。彼等が若し眞理の前に眞にハンブルでないならばそれは青年をつまずかすこと實に大であらうと思ふ。止むを得ないことゝ、正しきことゝは決して同一視されてはならない。若し勞働運動がその方法の中に罪惡を含んでゐるならば、それは必ず一度承認されなければならない。自分は有爲なる青年が勞働運動の志士となることを今の時代に於て喜ぶことを禁じ得ない者ではあるが、然しただそれのみに止まつて、なほより高き精神の世界に參入することを怠るならば、それを憂ふべき現象であると思ふ。自分は彼等がキリストや道元の道の使徒であることを以つて尚一層喜ばしきことゝなすものである。

以上は勞働運動の道德的根據についてのみ論じたのであるが、暫く其の視點より離れて、その運動の効果について考へる時に果してかゝる方法が地上の理想國を建設し得るであらうか。即ち斯の如くにして建てられたる國が果して理想國としての性質をそなへて居るで

あらうか。強制を以て富める者より奪はんとする心は自らが富みたる時には貧しき者に拒まんとする動向を含んではゐないであらうか。此二つの心は其本質に於て全然同質のものである。只自己が置かれたる境遇の差異によつて表面上異れる面目を呈してゐるにすぎない。自らがやがて富みたる時に貧しき者に悦んで分つ徳ある者のみ正義の名によつて、勞働運動に從ふことが出來るのである。一度持ち來たされたる富の平均は權利の要求の觀念のみによつては支持し能はざる事は云ふまでもないことである。勞働運動は必ずその基礎を愛の上にのみ置かなければならない。我が國の勞働運動の指導者は殆んど盡く唯物論者である。然しながら徹底せる唯物論より愛の觀念を導き出すことは論理上不可能である。從つて唯物論より發する社會主義及その運動はその本來の立場を守るならば人道的であることは出來ない。其處に許されたるは權利の爭奪の觀念の上に立てる勞働運動のみである。即ち個人と個人との間が本來敵と敵との關係であるが如くに利害を同じくせる個人の集合なる一つの階級が他の利害を異にせる階級に對して敵として鬪爭をなすことを以つてかく

の如き勞働運動の唯一の根據としなくてはならない。從つてかくの如き勞働運動は正義の名に依つて立つこと能はざるは勿論、その敵を道徳的に非難する根據は持たないのである。自分はかゝる種類の勞働運動に對してはその出來事を人生の不調和として深く痛みはするが、同情することは出來ない。勞働運動は必ず別の根據即ちキリスト教的愛の思想が止むを得ずして執る處の――從つてその中に自己の罪惡に對する承認を含んでゐるところの――苦肉の手段としてでなくてはならない。自分はかゝる意味の勞働運動に對しては滿腔の同情と義侠心と涙をさへ感じないではゐられない。しかしながら自分はそれを讃美することは出來ない。又他人に薦めることも出來ない。自分の立場としては人々がその最も貧しきものと雖も宗教の道に立つて、キリストや道元やその他の聖者達、若くはその謙遜にして尋常なる信者達の選びたる如き道に依つて、此の問題を解決することを最も正しくして深き態度と思はずにはゐられない。自分は先年故人となつた小田頼造氏のことを思ひ出さずにはゐられない。氏は初め熱烈なる社會主義者であつた。勞働運動が今日の如く一般の

時代的情熱とならざる以前に於て、芙蓉道人の名を以て社會主義を鼓吹した。しかし次第にその內省が深まるにつれて、又同胞への愛が根本的となるに從つて、氏は社會主義者として止まることが出來なかつた。そして遂に佛敎の門に入つた。自分は氏の晚年のあの信仰と精進（衣食の問題に關する）とを思ふ時に畏敬の念を感ずる。氏はパンの問題を最も合理的に解決せんと欲して、遂に道元の道に到達した。即ち各個人が無所有の生活法をとり、衣食を法界の供養に仰ぐことを以つて最も合理的なるものとなした。氏は道元の所謂三種の淨罪（乞食、信施、及び自然の木の實）を以て生活を立てんと欲し高野の山奧や十和田湖のほとりに自然の木の實を求めて尋ね入る程の精進であつた。人は自己の貧しさを持つて自己の罪惡の口實となしてはならない。今日の勞働者の中には小田氏より富んでゐるものはいくらもあるのである。たとへ富める者と雖も釋迦は遂に乞食となつたのである。パンの問題に於ける淨さは貧富の問題ではなく心情の問題である。富める者も貧しき者も只心の淨き者のみが淨いのである。自分がかく云へばきつと自分が富んでゐるから

だと誰かゞ云ふであらう。（自分は自分の勞働で衣食してゐる者であるが）しかし一概にかく云ふ人は精神の世界に堪へざる人である。たとへば武者小路實篤氏は今日富んでゐると云ふことは出來まい。しかしその選ぶ處の道は普通の勞働運動ではなくて宗教の道である。氏が富んでゐた時人は氏の言説を富める者の言説なるが故をもつて斥けた。しかし、今は同じ理由を使用することは出來ないのである。世の勞働運動の指導者達が純粹に權利の爭奪の觀念の上に立たざる以上その態度は不徹底であると云はなければならない。從つて彼等が自己の立場を道徳的に肯定せんとすることは矛盾であると云はなければならない。最後に自分が勞働運動の指導者達に希望したきことは彼等が必ず文化を尊重せんことである。殊に學術と藝術との價値は如何なる種類の勞働運動と雖も尊重しなければならない。それは實に人間の價値を決定するものである。彼等が富の不公平を改革せんと欲するのも畢竟その曉に於て萬人が文化を享樂する機會を平等に與へんが爲めに外ならない。文化を認めざる勞働運動は遂に賤民政治とならざるを得ない。たとひ文化の價値を認むるも、勞

働問題の解決せられざる迄はこれを斷念しなければならないといふが如き思想も亦自分は與みすることが出來ない。勞働運働に從事しつゝ、文化は文化として尊重しなければならない。人類の進步はそれだけの餘裕を許すに違ひない。人はパンのみにて生きるものではない。その人民の精神力如何によつては、いかに貧しくともなほ人間をして價値あらしむる處の精神的文化に就いて慮るだけの餘裕はあるに相違ない。若し全然文化を認めず、或はパンの問題の解決さるゝ迄は文化を放擲して顧みないが如き勞働運動の指導者は必ず人類の禍となるであらう。かくの如き運動は一面に於て、人間にとつて貧富に關はらず必要缺くべからざる――若しそれらを缺くならば生存することは意義と興味を失ふが如き――多くの高貴なるもの、誠實なるもの、奥床しきもの、デリケートなるもの等を滅却せしめるであらう。それらの慮りなき指導者に依つて導かれたる勞働運動が成功したる曉に於ては世界は沙漠となるであらう。自分は心から其等の指導者達の人格が人間としての眞善美に對する謙遜なる感覺と趣味（ゲシュマツク）とを具へてゐることを人類と時代との爲に望まないではゐら

れない。すくなくとも有爲なる經濟學者は、時代及び靑年を導く際に深く此處に思ひを致さんことを希望せずにはゐられない。彼等の硏究の對象はあくまでも永遠の眞理そのものでなくてはならない。その眞理に耐へざる人間的愛は反つて人類を害ふものである。又一般人民の眞に求むべきものも眞理であつてパンであつてはならない。キリストが「神の道によりて生く」と云つたのは永遠の眞理である。その眞理に堪へ得る貧民こそ眞に名譽ある貧民である。來たるべき理想國の民は必らずかくの如き貧民でなくてはならない。自分は自分の心の裡に勞働運動に對する充分なる味方としての感情を意識しつゝ、尚且つこの一文を草しないではゐられなかつたのである。否彼等を愛するが故にこそこの言説を敢へてしたのである。

（一九二二年二月八日）

附記

（一）荒野に於ける基督に惡魔が提出した第一の試みは國々の榮華を與へやうといつて誘

惑したやうに福音書に書かれてあるのは武者小路氏がその著耶蘇に於て云つてゐるやうに誤りであつて國々の權力を與へやうと云つたのであると解釋すべきであらう。然らざれば惡魔の試みとしては餘りに平凡であつて、基督の如き人にとつては餘りに拙な試みと云はなければならない。

（二）レーニンは王冠よりも寧ろ一介の背廣服を尊しとなすであらう。自分が天輪聖王と云つたのは無論政體としての王國の元首を指したのではない。法界に於ける使命をさしたのである。王冠と云つたのも無論有形の王冠ではなくその使命の名譽に適はしき無形の冠をさしたのである。

（三）自分がこの文中に用ひた神なる文字は道德的理想といふ文字を人格化したものとして解釋して差支へない。宗教的信仰の對象となる神はそれだけでは不足であつてそれ以上の或るものでなくてはならないのは無論であるが、無神論者に對してもこの文中の神なる概念は効力あるものとしての廣義の意味に解釋さるべきである。

（四）　この文中「新しき村に就いて」の中の一部分と重複してゐる部分のあるのは、別所で發表した爲め、且つ全文の基礎となる主要の部分なる爲め、省略することが出來なかつたのである。

新しき村に就いて

合掌三月號に、Ｓ・Ｆ氏の、「慶ばしき我が世界」と云ふ文章の中に、氏と私とが京都の一燈園で、一燈園と新しき村とについて談話した記事が載せられたが、氏はその中に私の談話を引證して居られる。然しその談話は餘りに簡單で充分に私の意を盡してないのみならず、（これはＳ・Ｆ氏の責任ではない。私の談話が短かかつたのである。）ところどころ、或る處は意味のまゝ間違ひ、或る處は同じやうな意味でも、私の言つたのとはその心持ちがかなり違つてゐるところがある　これはＳ・Ｆ氏が筆記でなく記憶を頼りに書かれたのに一人稱で書いてあるので、私としては不滿足に思ふ。そのうち西川天香氏についての方も間違ひがあり、氣にかゝるが、天香氏については新聞へ書いたこともあり、作品のなかでもモデルに使つたりしてあるから、その談話を讀んでも天香氏に對する私の敬愛の念を疑ふ者はあるまいと思ふ。然し、新しき村については あの談話には 村に對する私の愛が充分に出て居ない。私は現に新しき村の第一種會員であり、福岡に居る時には、「新しき村福岡支部」は私の宅に置いてあり、武者小路氏のあゝいふ事業を興したについては、

起す前からも既に特殊な關係があり、起してから今日に至るまで、村に對しては無限の愛と同情とを持ち、村の多くの人達には非常に愛を感じてゐる人々が多く、村に對する私の感じは、云はゞ内輪の感じである。だから私は今度の讀者があの談話を讀んで、私の村に對して持つてゐる感じを誤解することを非常に恐れる。それよりも、村に好意を持たない人間が、倉田でも、あゝ云つて居ると云ふ風にあの談話を利用することを一層恐れる。だから私は今こゝで新しき村に對する私の無限の愛を明かにし、どういふつもりであの談話のやうなことを言つたかを委しくはつきりと書いて置きたいと思ふ。西田氏については他の機會に書きたいと思ふが、新しき村のことについて語る時には自然と西田氏のことに觸れることもあるだらう。私がこれから語ることゝ、三月號に出た談話と違ふところは三月號の方が間違つてゐるものと思つて貰ひたい。無論私は三月號の談話で觸れた點にはことごとく觸れるのである。武者小路氏も西田氏も、人間の衣食住に關する義務について、私よりも一層高い暮らし方をして居る人である。故に自分はそれについて少しでも批評がま

しいことは云いたくない。殊に公の場所では云ひたくない。一燈園では場所が道場であり、聞き手が只一人で且つ信づるに足る人だつたから問はれるまゝに自分の心にあることを正直に謙遜に話したのだ。自分は、自分が愛の乏しい者についてかれこれ云ふのは氣がひけるから差し扣へるが、自分が充分に愛してゐる者については割りにすら〳〵と言へる性質だ。ちやうどその直ぐ前に「出家とその弟子の上演について」と云ふ文章の中でも、一燈園と新しき村についての私の敬愛の念を書いたばかりのところだつたし、聞き手が一燈園や村に對する私の愛を充分に知つて居る人であると思つたから割にすら〳〵と私の心持ちを話すことが出來た。そしてさう云ふ時の私の癖として、私の感心して居る方を云はないで、(それは聞き手には充分わかつてゐると思つたから。)私の氣になるところ、个一息と思はれるこゝろについて話した。それも熱が出て居たので一寸しか話せなかつた。そのために私の氣持が充分に盡されなかつたのだ。例へば自分は自分の妹の作について人から問はれゝば聞き手が妹に愛を持つて居ることが解つて居る時には「まだ下手で喰ひ込み方が

足りません。」と云ふ風に話すだらう。然し、聞き手が愛を感じて居ないことがわかれば、さうは云はない。自分は、あの時聞き手が天香氏と武者小路氏とに對して充分愛を持つて居ることを信じたから、自分が氣になるところばかりを言つたのだ。その談話を見て、(それは方々間違へられて載せられてあるのだが。)私の一燈園と新しき村に對する愛を少しでも疑ふ者があるならば、それは間違ひだ。前にも言つたやうに自分は公の場所や、躓く懼れのある聞き手に對しては、一燈園や「新しき村」について少しでも批評めいたことを言ふ氣は少しもないのだが、既にあのやうに合掌に載せられた以上は、誤解を防ぐために、もつとはつきりと私の思つてゐることを說明して置く義務と必要とがあると思ふ。でこれから私の思つてゐることをありのまゝに出來るだけくはしく書いて見たいと思ふ。それは一般の人からは空想、或は閑事として一笑に附せられるやうなことばかりだが、本當は大切な本質的な問題ばかりである。これ等の問題について殆んど一つも私は解決することは出來ないのではあるが、吾々が人間として考へねばならない問題を提出し、そして種々な

大切な考へ方を示すことが出來ると思ふ。そして他の人々について語る時には兎も角も、武者小路氏や天香氏について語る時には、これ等の問題は實に大切な本質的な人間として最も重大に、關心せねばならぬことばかりなのである。私は何より先きに武者小路氏が我孫子の生活を捨てゝ日向の今の生活を決心した事をほめてもほめ切れない氣がする。氏が若しあの儘でじつとしてゐたら今より比較にならない程安逸な生活が出來たのだ。次第に名聲と收入とを增して來て身體も健康で種々の享樂に耐へる事が出來た氏が今の缺乏した生活を選んだのはなかなかの事ではない。氏は我孫子にゐて所謂ギリシヤ風の美的生活即ち衣食住を出來る丈け快適に且つ洗練された趣味で豐かにたのしくし、あらゆる文化の與へる限りの貴族的な歡樂を享受する生活（これは今の日本の眞面目なすぐれた部分の人々が送りつゝある又送らんことを願つてゐる生活である。）を營みながらでも尙其の天賦の性格から廉潔純潔任俠等の名譽を贏ち得る事が出來たのだ。そのまゝでも仕事に熱心な、愛の深い、心情の淸い人として立派に通つたのだ。そしてさういふ人として他から許される

のみならず、自らも、教養ある尊敬すべき周圍の友人達が持つてゐる程度の反省ではさう云ふ人として自分を許す事が出來るのだつたのだ。それは氏の周圍の尊敬すべき友人達が氏のやうな動き方をしなくても人々から愛敬され己れも亦あまり不安を感じてゐない樣に見えるのを見ても解る事だ。ギリシャ風の教養ある、趣味の高い生活までゆける人は今の日本にでも少くとも十數人は私の知つてゐる人の中にでも見あたる。けれど其處をつき拔けた生活に入る事が實に困難なのだ。しかも其處をつき拔けた時に初めて聖人の域に迄進まうと志したと云ふ事が出來るのだ。釋迦やキリストや其他私達が聖なる人の列に加へて考へる人々は皆ギリシャ風の生活からつき拔けた生活をした人だ。しかし其のギリシャ風の生活（此の生活で洗練されてゐる人は人々から尊敬されるに價する處迄は進んでゐるのだが）からつき拔ける事は實に非常な事なのだ。現に尊敬すべき少數の人々さへもそれを敢へてなし得ないのを見ても解る。其時に氏がさう云ふ生活を送る充分な生活條件が許されてゐるにも關はらず、一人敢然として其の生活を捨てゝ今の生活法を選んだのは本當に

何と云つてほめていゝか解らない氣がする程だ。教養のある人程ギリシャ風の生活を捨てゝ十字架道の生活に入る事は困難なのだ。私は此事を特にくどくいふのは今の日本の尊敬すべき少數の選ばれたる人々にとつて實に此事が重大な事だからだ。それらの選ばれた人々が今現に辿りつゝある若しくは憧れつゝあるギリシャ風の生活に不安を感ずる事が益々其の濃度を增し遂に其の生活からつきぬける處まで進んでゆくならば、日本はどんなにたのもしい國となるであらうかと思ふからだ。ギリシャ風の生活にあつても聖人を崇拜する事は出來る。聖人をほめ聖人の像に禮拜し其の生活を本にかき詩に歌ひ、それを、自分の生活に清淨なる氣分を釀さしむる重要な要素として取り入れる事は出來る。それが出來る爲に益々其の生活をつき拔けて聖人の生活法に入る事は困難なのだ。此處は本當に重要な點だ。人がロダンやゲーテでとゞまるかキリストや釋迦までゆくかは其處できまると云つてもいゝ。それ故に私は武者小路氏が我孫子の生活を捨てゝ今の生活を選んだ事を心からほめずにはゐられないのだ。氏は少くとも今や聖人の列に入らん事を志ざす道に發足した。

完

即ち氏は大願を立てた。エルサレムに志してローマを立つた許りの人はコンスタンチノープルにゆかうとして其の郊外に迄すでに達してゐる人よりもそいすでに歩むだ旅程はまだ短くとも遙かに偉いと想ふ。其の志す處は神の都だからだ。氏は日本の尊敬すべき少(カルチュアド)賢(フユー)諸氏の中で一番大きく賭けた。氏が前よりもずつと祈り深くなつたのは當然な事だ。何となれば氏は他の人々が安逸にくらしてゐる時に、自分は運命をためすやうな事をしてゐるのだから。自分はそこを思ふ時に涙をさへ感ずる。氏は此點についてアンビシャスだと云ふ人もあるが私は一度靈魂の道に志した者は自分が地上に於てどれだけの者として造られてゐるかと云ふ事について自分の運命をためさうとする樣な氣のあるのは當然な事だと思ふ。そこの氣持は微妙な處から出る。キリストと競爭しやうと云ふやうな心持は非常に深い純な被造物として起す事を許されてもいゝ氣持に於ても生じ得るものだ。さう云ふ心持はキリストを冒瀆せず、愛と德についての精進の動機を不純にせずに起し得る一つのデヴアイン、アンビシヨンと云つてもいゝものだ。(此心持は藝術的表現を借りなくては一

寸現はしにくいが）自分は氏が人間として何處まで偉くなれるか、もつと適當に言へば偉くなる事を造り主からグラントされてゐるかと云ふ事に非常な興味を持つてゐる者だ。そして氏の爲に祈つてゐる者だ。氏は私がこれまで會つた人の中で一番淸い（一番豐だと云ふのは恐らくあたらないであらう）一番正直な、そして一番威力を備へた人だ。殊にその動機と行爲との間に他のもの丶混じらない純粹さに於ては、他に較べる人がない程な淸い感じを受ける。氏はまたものを生かす天賦の不思議な智慧を持つて居る點で不世出と云つてもい丶程だ。「惡魔が自分の家には入つて來ても、出る時には幸福を落して出て行く」と云ふやうな氣持ちが本當にする人だ。氏は本當の最も正しき意味の樂天家だ。世間には「氏を色々な不幸に打たせ慢性の永い病氣にでも罹らせて、その上で氏の云ふ言葉を聞きたい。」なぞ丶云ふ人が多いが、それは氏を知らない人々だ。私はきつと氏はその時でも生きる道を見出して神と世界とを呪はないで生れた者の幸福を讃美する、今の通りの態度を變へはしないと思ふ。氏は光りの子である。本當のオプチミストだ。その運命を信じる力の

強さは氏の最も惠まれた特色だ。自分は其の氣禀に於て氏と異るものであるが、氏のその態度を讃美せずには居られない。自分は氏の事業には氣分に於て絶體的な殉情的な愛を感じて居るものだ。それはちやうど南洲の企てることには、その周圍の人々がそのことの善惡にかゝはらず、賛成せずには居られなかつたやうな、意氣に感じると云ふやうな風の、盲目的なと云つてもいゝ感情だ、自分はそれ程氏を信じ且つ好んでゐるのだ。然し、人生觀や性格や、又理想境に對する想像的雰圍氣等は自ら違つて居る色合がある。それは當然のことである。で自分の氣のついたことや、不安に思ふこと等を(賛成の點は書かないで)順序を立てずに書いて見やうと思ふのだが、氏ほどの人に向つて氏が少しも氣がつかないやうなことを云ふことが出來るものではない。だから私の云ふことはみな既に氏が氣がついてゐることには違ひないが、たゞそれを違つた方面から注意を喚起し、かう云ふ風な考へ方もあるとか、或はかう云ふ風なことを氣にせねばならぬとか云ふ風に氏を刺撃することしか出來ない。それも私は實に實地に暗いのだから、理想についてだけしか話は出來な

い。方法について云ふ時でも、ごう云ふ方法が正しいのか、と云ふ問題についてしか話しは出來ない。ごう云ふ方法をとるのが賢いか、村を成長させるのに効果が多いか、と云ふことについては自分はまるで駄目だ。で結局實際的には殆んご助けにならないと云つてゐ。然し氏が一番大切に思ふのは理想境の構圖であるに違いないことを私は信じる。その下圖を造る時の相談相手としてなら、私は氏が私をそのうちの一人として選んで呉れるだらうと思ふ位に氏の私に對する信任を信じて居る。言はゞ純粹の立法的な相談にしか乘れない。そのことは赦して貰つて自分の氣のついたことを言はして貰はうと思ふ。

第一に大切な事はパンを得る方法とその根據についてゞある。この點を正しく合理的にしやうと云ふのが、氏が村を起した、最も重大な直接な動機だからだ。この問題の解決は深くて、難しく今の私に解決する絶對的確信はないが、今のところではやはり吾等に生を與へたもの、吾等を創つたものから養はれて生きるさいふ心持が一番正しくて合理的な氣がする。神本主義とでも云ふべき立場、西田氏の所謂「佛飯をいたゞいて生きる」といふ立場で

ある。聖書の言葉を、大切だから念の爲に引用する。馬太傳の第六章に「あゝ信仰薄き者よ、さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふ勿れ。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡て此等のもの〻汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求めよ。然らば總てこれらのものは汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふ勿れ。明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」とある。これによれば自分等は神の前に正しく生きれば、衣食住は神が保證してゐて下さることになつてゐる。これより深い立場があらうとは思はれない。考へて見ても自分等を創つたもの、自分等に生を與へたものは、そのもの〻意に叶ふやうに創られたものが生きる限りは生きるのに缺くべからざる衣食住は保證してくれるのが自然であり、當然であるやうに思はれる。神のみ心に叶ふやうに生きるものは神が養つて下さる筈であること〻の信仰にはつきりと立ち得る人が最も正しきパンの得方を體得した人ではあるまいか。自分等は權利としてパンを要求することは出來ない。たゞ許されて與へられるのだ。自分はその意味

で勞働とパンとを直ぐに結びつけて考へるのは、一番深い立場ではないと思ふ。勞働したからパンを得る權利があるのではない。それだつたら病人や不具者や子供はパンを得ることは出來ない。パンを得るためには、誰かゞその方法として働かなくてはならないけれども、いくら働いてもそのことがパンを得る權利の源となることは出來ない。勞働は報酬を求めずして一つの奉仕として爲され、パンはその勞働の酬ひではなく、神が各々の生存を許して與へて下さるといふ風に考へたい。村が世の所謂勞働運動を超越してゐるのは同感だ。勞働したから、その勞働の量に相當しただけの報酬、例へば賃銀を權利として要求するといふのは道德的には根據はないと思ふ。ただ社會經濟組織の或る便宜上の約束の上に立つて、權利があるだけだ。若し勞働運動といふものが、この權利を最後の根據としてゐるものならば、自分は非常に不完全なものと思ふ。それだつたら弊害が百出する。決して深い生活法とは云へない。村の勞働は無論パンを得る權利を獲得する資格としてなされてはならない。神と人類に對する奉仕として報酬の要求なしになされねばならない。これは村で

も無論そのつもりだ。それをはつきりと意識的にさせておかねばならぬと思ふ。若し或る人にとつてその時勞働するよりも、もつと大切なことがあつたれば勞働しなくとも許されねばならない。しかし此點では氏は充分に自由な考へを持つてゐられることは明らかだ。氏が村を建てた一つの大きな原因は病人が勞働に耐へるまで恢復するまではただで養生出來るやうな制度でなくてはならないと思つたからだ。氏は現に私に少しも勞働しないでいゝから村に來て住むやうに云つて下さつた。又特別な天才には皆の同意を得た上で勞働を免じるといふ考へも持つてゐられる位だ。只私が云ひたいのは勞働する人も亦病人と同じくパンを「儲ける」のではなく與へられるのだと云ふ心持で生きることだ。パンをgainするのではなく「begするのだ。「強いて生きる」のでなく「許されて生きる」と云ふ氣持になることだ。たとひ一日十時間以上も働く人でも「我等の日用の糧を今日も與へたまへ」といふ心持でパンを神に乞ふ氣でなければならない。徹底的にいへば働いて食ふのでなく乞ふて食はねばならぬ。いはゆる「人天の供養を受け」て生きるといふ眞の意味の乞食の氣持

でなければならない。此パンの得方では西田氏はより專門的な意識的な且つ實地の訓練を經た考へを持つてゐられる。參考にするに足ると思ふ。無論武者小路氏でも日用の糧を神に求めるといふ氣持ちはすでに醱酵し氏の感想の隨處にその味がしみ出てゐるがその心持は村の民全体によく行きわたり且つ意識的にならねばならぬと思ふ。私がかう云ふのは云ふまでもなく勞働を貧ばないのではない。勞働は神と人とに對する實に大切な愛の奉仕だ。しかも勞働はそれ自身に尊いのみならず又愛を「實」にするものとして尊い。勞働する者は尊ばれなくてはならない。少ししか働けなくても許されねばならないが、多く働く者は多く尊敬されなくてはならない。最もよく働いてしかもそれを功とせずに、最も謙遜に神に糧をこふのが最も祝福されてゐると思ふ。

第二に理想境を立てる方法は理想的でなければならない。これは實に困難なことで絶對的には不可能ではないかと思はれるほどだがしかし原則としてはこの事を認めねばならぬと思ふ。すでに間違つてゐる組織の中から理想的な組織を作り出すのに、理想的な組織が

まだ出來上らない間は理想的でない方法をも許さねばならぬといふことは實に悲しむべきことだ。しかしそれならばどうすればいゝか。私は解らない。現在に於て能ふ限りの理想に近い方法を用ひるより他仕方があるまいと思はれる。それを嫌ふならば仕方のないことゝして手をつかねて待つより仕方がない。しかし乍らいかに止むを得なくても理想的でない方法は、何處までも理想的ではない。それを自分に許してはいけない。まして神の前に許してはいけない。が、私はそれを人々に對しても許さぬ方がよくはないかと思ふ。仕方のないことは正しいことゝは違ふ。しかし他に方法がない。このことは實に地上が樂園と違ふ一つの大きな大きなイーブルだ。間違つた制度の下に作られた金や器具を使つて理想郷を作るより他に方法がないのだ。このことを同情なくよりよき方法を示さずに非難するのは無理と云はなければならない。自分はさういふ人を憎む者だ。野菜許り食つて生きてゐる人に向つて、自分で鷄を屠つて食つてゐる奴がおまへも亦生物を食つてゐるではないかと云つて非難するのは惡むべきことだ。私は野菜ばかり食べてゐる人には淸い人に對

する尊敬を感ずるが自分で鷄を屠して食ふやうな人には慘酷な人としての憎みを感ずる。その間に絶對的の區別がないからと云つて兩者に對して同じ感じを持つことは出來ない。村を立てるのに使用される金や機具が資本制度の支配を拔け切ることが出來ないでゐても、それを使用する目的と又それをどの位の程度に迄吟味して用ひるかといふことで誠實とごまかしとを區別しなければならない。その點では私は武者小路氏の神經を信じてゐる。この淨財と不淨財との問題は實に困難な問題だ、これをはつきりと區別する客觀的標準はどうもはつきりとは立てられないらしい。だから村が淨財で建てられなければならないといふ事は原則として立て、出來る限り淨財と不淨財との吟味を嚴確にしなくてはならないと思ふ。其以上要求するのは無理である。只併しこの場合大切な事は理想鄕を立てるのに理想的でない分子もその方法の中に用ひねばならなかつたといふ事は建設者の胸の中に決して忘れてはならないといふことだ。其處らの感じ方から此世界の視方が違つて來る。樂園といふものゝ想像的空氣が違つて來る。其處らが天と地とを區別して考へなければなら

なくなる思想と、地上も天國だといふ思想とが別れてくる大きな原因にもなる。そしてそれは實に大きな大きな問題だ。生物を食はねば生きられないといふことはそれを何處迄も神經質に考へねば此世界を樂園だと考へる事はとても出來ないことになる。しかし若し植物だけを食べて動物だけは食べない位になればこの世界はまるで今とは違つた樂園のやうな感じになる事は確かだ。清い〳〵感じが出て來るだらう。だがやはり植物を食つてゐる限りは樂園とは考へられない。植物を食つても樂園だといふ考へ方があるかも知れないがそれならば自分等の愛の觀念はよほど違つたものにならなければならない。さういふ超越的な考へ方は今の私には解らない。惡いけれども止むを得ないといふ事は樂園に於ては、許されまじき事である。私はどうしてもさういふ限りがある以上は天(ヒンメル)といふ氣はしないで地(エルデ)といふ氣がする。そう云ふ風に考へると村でもそれが少しでも理想的でない方法を含むで建てられた限りはたとへ今とは較べ物にならない天上の樂園の複製かと思はれる程清くても建設者は或限りを心の中に感じてゐなくてはならない。そこで地に地としての或限

り、人は被造物としての或るさだめをうけ入れるか否かゞきまつてくる。自分は其處の所が少し氣にかゝる者だ。自分は氏が人の前には高くとまつてゐる時はあつても、神の前には一度の例外もなく常にハンブルであることを知つてゐる。だからこれ等の事も無論氏が氣のつかない事ではない。只私としては其處の氣持の持方が聖なる者でも被造物であると云ふさだめをうけとるのと人間も神となる事が出來ると云ふ風に考へるのと違ふと思ふ。しかしこれらは人生觀や氣稟、性格、使命等に依つて異なる微妙な色合であつて一概に云ふ事は出來ない。日蓮と法然との違ふ樣なものだ。只自分の希望から言へば自分は氏が被造物としての最高なる者と成つてくれ、しかし乍ら常に被造物としての限りをうけ入れてくれる事を希望する者だ。從つて自分の好みからいへば氏の村は地上に樂園の俤をうつす鏡であつても樂園そのものではない事を認めてゐてもらひたいのだ。それは決して諦めや妥協ではなく人間の被造物としての一つの美しき德であり、智慧であると私には思はれる。

第三に村の民は村以外の人に對してどう云ふ態度でゐればいゝであらうか。村の民は他の人々よりも人間の衣食住に關する義務について遙に高い生活をしてゐることは確だ。その點について村の民は他の人々よりも自分を高く見積るのは當然である。他の人々もそれは當然認めねばならないことだ。然しそれだけで人間の總べての德が成就されたのでは無論ない。その他の總べての德は、村の民は村でこれから修業しなければならない。自ら勞働して衣食住の資を造り出し、それを自分で分け持つことは非常に根本的な愛の生活に缺くべからざる尊いことではあるが、それが萬事ではない。その他の點については村の民以外の人にも種々の點について貴い德を備えてゐる人があることは認めねばならない。だから村の民が他の世界の人々を輕蔑するやうな態度になつてはいけない。まして他の世界に住んでゐる人で、自分が村に入ることの出來ないことを自ら恥ぢて居り、村を尊敬し好意を持つてゐる人々の心を閉ぢさせるやうな態度に出てはいけない。さう云ふ風に思ひ上る人は村を損ふ人だ。村と他の世界とをつなぐ鎖を切る人だ。さう云ふ風な態度に若し村の人

が出る人があれば、他の世界の人々は村のまだ理想的になつてゐない方面に特別に眼をつけるやうになる。そして絶對的な立場からそれで本當に正しいか？、さう云ふ問を眞正面から發するやうになる。そして謙遜なる者の此の問に對して神の前に自信を以て答へることは眞に恐ろしいことだ。無論世間にはさう云ふ恐ろしい問を平氣でルーズに振り廻す者がゐる。彼等は最も憎むべき者だ。ゲツセマネのキリストにでも「神の名を呼ぶことを恐れよ！」と云ふことは出來る。さう云つた口の下で鼻歌を歌ふことも出來るのだ。然し言はれた方では、その言葉自身の持つ重味で何とも言ふことは出來ない譯だ。ゲツセマネのキリストでもさう云はれゝばその言葉の前には跪かずにはゐられない。それだけさう云ふ大きな言葉を以つて他人の生活を裁かうとすることは愼まなければならないことだ。然し裁かれる方ではさう云ふ高い標準の前に常に自分を置かねばならない。自分は正しいか。正しくないかと反省する時には出來ても出來なくても一番高い標準を目安としなければならない。このことは第一のことだ　自分はそのことを村の人々が忘れて吳れないことを望

む。然しさうは云つても村の精神を認めず、村を無視しやうとし、甚だしきは妨害しやうとする者に對して村の人々が怒り或は輕蔑し、鬪はうとするのは自然で又當然なことだ。殊に世間が中に就いても教養ある人々が村を餘りに理解してゐないのだから、猶更のことだ。自分はその感情に共鳴はしてもその感情に對して反感を持つことは出來ないものだ、むかうの出かたでこちらがハンブルにもなれば、威丈高にもなるのは人間の自然だ。キリストでもエルサレムの宮では鞭で商人を追ひ出された。然し他の世界の人々にもハンブルな人がゐることを常に忘れず、その人達の心を閉ぢさせないやうに心使ひすることゝいかなる時にも一番高い標準を目安にして自分を評價し反省することを村の民は忘れてはならないと思ふ。

猶一つ村の人々が村以外の人々の生活に對する時に持つて欲しく私が思ふのは人生の種々なる生活の相に對する愛の眼である。自分は高い生活をしてゐても、その生活に未だ達し得ない人々の事情低い生活を見棄て得ない心持、汚れたことにも執着を斷ち得ない迷ひ、

地上的な色や香に惹かれる煩悶等に對して、其れを輕蔑し去つて仕舞はないで、自分は超越的な立場からしばらくそれらの人々の心持になつて、考へて見てやる寛容である。佛教の「寂」の心持である。此の心持は實に偉大なるものに缺くべからざるものと思ふ。此の相に對する愛の眼で人生を眺める時、先きには輕蔑と憎惡とを感じたものに對しても、愛と憐憫とを感じ得る場合は多い。否愛とか憐憫とかいふやうな感情的な氣持よりも、觀照の靜かな心境である。一種の靜かな認識の世界である。キングが居り、ジヤツクが居り、賭博者や髮結ひや遊蕩兒や遊女や、正直ではあるが頑迷な老人や、善良であるがシヤレ者の若旦那や頑固な律義な軍人や、賣場を盜んで活動を見に行く小僧や、あらゆる階級の、あらゆる階段の生活の相――それらを凝つと眺めてゐる時に私は何とも云へない愛と、靜かな涙を感ずる。彼等の生活は確かに罪と誤りを含んでゐる。その生活は改革されなければならない。彼等を高い生活に導く工夫を凝らし乍ら、自分は拔け出た清い立場にゐながら、彼等の生活を眺め、守り、觀ずるこゝろ――私はさういふ心を村の人々は一面に持つ

でゐてほしい。己れは「水月道場に座して」居ながら「空華の萬行を觀ずる」心である。その心持が解らない時に世の日蓮の末徒等は親鸞や法然の如き淨土門の聖人が弱々しいやうに誤解するのだ。一方に其の心境さへあれば、隨分劇しく村以外の人々の生活を非難し、鞭撻しても許されていゝと思ふ。自分は正しいから、不正なものを輕蔑するといふだけでは私は不滿足を感ずる。其の點は基督や日蓮の如き聖道門的な聖人の道を學ぶものが、親鸞や法然の如き淨土門の聖人の心境に思ひを致さねばならぬ處と思はれる。私は自分としては村の人々に、人生の相に對する愛のこゝろが、一面に於て、もつと浸潤することが希ましいのである。

第四に、村はこれから萬事を修業して行くのだ。その理想も、その理想を生かす方法も村の民の精神が成長してゆくに從つて、進んで行くのだと云ふことを忘れてはならない。今一番いゝと思つてゐることも村の民が成長すれば、もつと高い理想が立てられるやうになるかも知れないし、方法も、今は自ら許してゐることも、先ではゆるせなくなるかも知

れない。萬事他の世界に住む人と同じやうにこれから修業してゆくのだと云ふことを忘れてはならない。此の點については武者小路氏の毎月書かれる感想には殆んどいつも書いてあることで私が云ふまでもないことであるが念のために村の外に住む者の希望としてこゝにも一度言つて置きたい。例へば今村の經濟は寄附金と、武者小路氏の印税及び原稿料と村の土地から上る穀物と野菜とである。がこれ等も一般には無論何處に出しても立派に通過する正しき財ではあるが、そして今の村の困難な經濟狀態を知りながら、私がかう云ふ理想的なことを言ふのは迂濶でもあり、嚴し過ぎるが、自分は村がそれに堪へ得るものとして尊重して言ふのであるが、猶ほ吟味する餘地があるかもしれない。自分は寄附金は一番清い金と思ふ。これも穿鑿すれば寄附者の氣持とその寄附者がその金を得た方法とを吟味せねばならぬかも知れないが、今村に寄附してゐる人達は本當に村に愛を感ずるほかに他意のない人と思はれる。その金も多くは小額な金で不正な手段によつて得られた金とは思へないものばかりだ。また私はどんな不正な手段で得た金でも、それを寄附する時の心

が請かつたら、そして寄附する爲に不正な手段を用ひたのではなく、既に金を得て後に純粋な寄附の心が生じたのなら、それを受けても構はないと思ふ。(こゝは研究を要するが。)殊に氏が此の點に神經質なことは「土地のための會」の廣告に「村に愛を持たない者が壹圓でも寄附して貰つては困る」と書いてあるのを見ても分る。自分はさう云ふ神經については絶體に氏を信じて居る。印税と原稿料については吟味する餘地があると思ふ。道元禪師は三種の淨財を擧げて、一、自然の木の果。二、乞食。三、信施となしてゐると聞いてゐる。村の場合では田畑より生ずる收穫は道元の自然の木の實に、相當し寄附を募る(「土地のための會」の如くに)場合は道元の乞食に相當し、募らざるに集る寄附は信施に相當してゐると見てよからうと思ふ。が印税と原稿料とは果して淨財であらうか。若し淨財と云ひ得るならば如何なる根據に於てゞあらうか。印税と原稿料との場合に於て、最も淨いと考へらるゝ授受の手續は著作者が共存者に與へんと欲する自分の作品の發表を出版者に委托し、出版者はその著作を受けたる共存者の代表として若くは個人としての感謝から、

その著作に對する報酬としてゞなく著作者に寄謝するといふ形式であらう。この形式ならば信施と見做して差支へないと思ふ。此の外の手續きを許すならば商賣によつて得たる財も淨財として許さねばならなくなる。故に村は印税と原稿料とを一つの資源となす時には上述の如き手續か否かを吟味しなくてはならない。そして此の場合では事實として出版業者と著作者との關係は上述の如き手續きであることは殆ど無いと云つてゐる。故に印税と原稿料とを村の資源となすことは考へものと思ふ。尤も商賣によつて得たる財をも淨財として許すならば構はないのは云ふまでもない。しかしさうするには色々の懐疑が生じると思ふ。少くとも研究を要する問題である。これは他日村の土地から生じた收穫を村以外の人々に頒つ場合が生じた時にも起る問題である。例へば村は村の生産物を賣つてその金で暮らしてもいゝであらうかといふ問題である。それを是認するならば村以外の社會で行はれる商賣も是認せねばならぬことになるだらう。そしてその場合には村と村以外の社會とを區別する特色は財の共有といふ點に在ることになるであらうが、その共産といふことも

人類全體の共有（もつと適當に云へば何人も所有せぬ凡て神の所有）でなく或る限られたる（村以外の人々を除外せる）人々によつての共有ならば一種の私有になりはしないであらうか。（例へば村以外の社會での財團法人の如きものと同じく）村の財は假令村に住む人は限られたる數であつても、人類全體と共に所有するのでなくてはならない。從つて村以外の人々から求められゝば拒んではならない。その意味の共有でなくては村の精神と一致せぬことはないであらうか。しかし私が今云つたのは非常に理想的な立場のみであつて、その立場までには無數の階段がある。故に此の通り實行出來なくても充分に淨いと云へる。たゞ村を建設し村の憲法を定める時には立法の原則として上述の如き考へを理想として反省しなければならない。そしてそれが種々の事情のために實行出來ない場合には、村が實際これだけの處まで神と人類の前に自己を評價していゝかといふことを反省する時に、そのことを常に考慮の中に入れてゐなくてはならない。そして村が成長するといふ意味の内で最も本質的な重要な部分はこれらの理想に向つて近づくといふことでなければならな

い。(村の設備の整頓するのも無論成長であるが)かうは云つても私は今の村が印税や原稿料を資源の一つとすることを非難するやうな感情は毫厘もないのだ。現に私も印税と原稿料で生計を立てゝゐる。しかもそれを私有し、村とは比較にならないほど豊かな衣食住を享樂してゐる。しかしそれを一番正しい資源とは思つてゐない。故に私自身が信じない生活法で暮してゐるのだ。私はこれを恥ぢずにはゐられない。私が病氣で無かつたらと思ふ。しかし何と云つても私がまだ「道よりも生命を愛する」境涯から脱してゐないことは爭はれない。私は武者小路氏から入村を勸められた時にも應ずることが出來なかつた。滋養や安靜や醫師や藥や、私の病體の保健に必要なものゝまだ缺けてゐる村に入る勇氣が出なかつた。殊に喀血と神經痛の發作の時に醫師のないことは堪えられない氣がした。私はその十字架を負ふ力がまだない。私はまだその位な程度の處で暮らしてゐるのだ。どうして大きなことが云はれやう。たゞ理想は理想として想像出來る限りの最高の處に立てなければならないと思ふのだ。私の氣持は解つて貰へることゝ思ふ。

第五に村民の家族は家族關係から一度離れて、神に（或は村の理想に）直屬しなくてはならない。例へば夫が村の理想に信順して入村したからと云つてその妻をたゞ妻である故を以て入村を許すのはいけないと思ふ。妻も亦村の理想に信順する時にのみ、一個の獨立した村民としての責任を以て入村せしめなくてはならない。（その上で家族關係をつくつてゐることは差支へないが）從つて若し村の理想を信順しない妻があればそれは村から出さなくてはならない。村は道場である。道場に入るものはその道場の理想に對しては家族も亦隣人としての獨立を保たなくてはならない。基督の「子を父に背かしめ嫁を姑に背かしめ」る處がなくてはならない。村の理想よりも家族を愛するものは村民たるに耐へないものでなくてはならない。妻が村にゐることを好まないためにたゞ亦共に村を去るといふやうな村民があつてはならない。これは勿論入村を許す時に吟味しなくてはならないと思ふ。「道」と家族制度との間には矛盾が在る。私は家族も亦隣人であつて、たゞ隣人の特殊なるものと解釋したい。基督の「我よりもその父母（子女）を愛するものはわが心に適は

ざるものなり」といふ心は道場に於ては缺くべからざるものであると思ふ。
以上私は付について氣になる事、氣のついた事を書いた。私は理想的なことばかり書いた。讀者が若し私が自ら揣らすして大きなことばかり云ふと思ふならば、それは私の氣持を理解しないものだ。私は高い[illegible]、理想を立てはするが一つの理想についてはそれが現實に於て生かされる程度、それを生かすのにどれだけの十字架が要るか、また自分が何處までその十字架に耐え得るかに就いては實にリアリスチックな、微細な點までも同情が行き亘るつもりである。それだからこそ私は武者小路氏の事業に無限の敬愛を捧げるのだ。武者小路氏が現に負ふてゐる十字架がどの位な重さであるかを知つてゐる點では私は誰れにも劣らないと思つてゐる。私はあのモーゼのことを思はずにはゐられない。偉大なるものに向つて石を投ずるものが周圍に充ちてゐるのみならず、エヂプトから導き出した自分の率ゐる民さへも呟くことを止めない。私は色々な細かい點まで想像して同情（ヒロイックな）に耐えないが、茲に書く氣にはなれない。私は氏が何處までも樂天家として運命を信じ、

困難を征服して、偉い事業を成就することを信じてゐる。氏の十字架をいたましくは思ふが、少しでも悲觀的な想像は描いたことはない。氏の最後の勝利を信じてゐる。氏が若し運命を信ずる力强さを失つたならば、氏は私にとつて最大の魅力を失ふことになる。何となれば私が氏に一番感服してゐる、それあるがために氏を天才と信じてゐるのは氏の飽くまでも運命を信ずる天來の樂天家である點だからである。私は飽くまでもそれを信じる。今村は非常に經濟上の困難に陷つてゐる。それについて色々悲觀的な想像を描く人もあるやうだが私は少しも悲觀してゐない。氏も心配してゐるだらうし、時には心細くも感ずるだらうが、それは或程度までゞ、根本的には氏は樂觀してゐるに相違ない、村が決して潰れないことゝ、そして最後の勝利を贏ち得ることを信じてゐるに違いない。自分は氏がすべての財産、總べての收入をあげて村に投じ、その上に借金までして缺乏した生活の中に盲者や唖者までも收容して物質的にも精神的にも苦痛に堪えて努力してゐるのに感服せずにはゐられない。その姿は私を涙ぐませ私を額く。自分の負ふてゐる十字架も決して輕いと

は思はないが、氏の生活を思ふ時に、私にはまだ〳〵多くの振り捨てなければならない惡しき慾望が殘つてゐる氣がする。自分は心から氏の事業の立派に成就することを祈り、若し私にでもその事業に寄與する何等かの力があるならば、村のために奉仕させて貰ひたいと願つてゐる。若し氏及び村民を飢えしむるならば、それは氏の友人及び同時代人の恥辱であると思ふ。

（一九二〇、八、於明石無量光寺）

『眞心がなくてもいゝ』

と云ふ意味に就いて

無我の愛の十月號に伊藤朝子氏が私の宅を訪れて下さつた訪問記が載せられたが、その中に私が「眞心がなくてもいゝ」と話したと書いてある。が、あれば私の云つた言葉通りでなくて、朝子氏が意味をとつて書かれたので隨分誤解されさうな言葉であり、誤解されないまでも說明を要する言葉と思ふ。私の云つた言葉通りは「結局はどうでもいゝと云ふところに落つかなくてはならないと思ひます」であつたと思ふ。それはどういふ心持であるか、書いておきたいと思ふ。この心持は私にとつては實に大切なものである。私の落つき場所、私の枕である。私が夜眠ることが出來、食事をすることが出來るのもその心持に支へられる爲であると云つてもいゝ。種々な問題が深く考へれば考へるだけ、私にははつきりとは解らない。私の心には絕えず氣使ひと痛みがある。他人に對して不義理と氣拙さと、濟まなさと――罪の自覺がある。いや。私が惡いのか、無理がないのか、はつきりと決められない事で、氣にかゝる、不調和な事に充ちてゐる。他人に惡く思はれないやうに暮らすことはとても出來ない。然し惡く思はれて、自分に無理がないと思はぬでなくても、

自分が全然胸に痛みを感じないで濟む程玲瓏とした氣持ちでゐることは中々出來るものではない。私はさういふ鬱積した、晦澁な、こだはつた後悔と自責と氣拙さの中に住んでゐるのが日々の心の實相である。かゝる氣持の中で、どうして神經を痛めずに居られるであらうか。仕事に集注することが出來るであらうか。安眠することが出來るであらうか。私は只一つこの「どうでもいゝのだといふ氣持」に支へられて安住することが出來るのである。私は善いか惡いかよく解らない、然し、ともかくもかういふものとして何者かが私の存在を許してゐてくれるのだ。許されて存在してゐるのだ、といふ氣持でゐる。私はかう思はなくては生きてゆけない。良心の鋭いと云はれる人でも、食事もすれば眠りもする。然し、若し、良心に疚しさがない時にだけ寢食が出來るのであつたら、私達はほんたうに氣になつて、氣になつて寢食が出來ず、悶死する他はない。或は絶えず自分が傷つけた者にあやまる爲に その者を探し求めてゐなければならない。然し、實際はさうはしてゐない。この事たる、如何にして可能であらうか。私は矢張り「どうでもいゝのだ、許して貰

つてゐるのだ」と思はなくては落ちつくことが出來ない。私はさう思ふ時に、私の心がずゝぼらになつてゐないで、却つて締まつて、引締つてゐるのを感じる。傷つけた者に對しても一番償ひの氣持に富んでゐるのを感じる。結局自分の心がその瞬間に一番純で、素直で感謝に滿ち、且つ清淨な氣がする。らくな氣がする。その時始めて泌々と、鳥の聲を聽くことも出來、食物の味を味しめる氣持にもなり、すや〳〵と眠る氣にもなれる。(勿論種々な出來事の紛糾の中に於いてである。)この心持に安住して始めて善惡の細微な問題の隅々迄考へ巡らし、人間の教養の最後の仕上げ迄慮ることが出來る。殊に藝術の如き、總て理想的に完成を期した、それ自身を目的とする――即ちその仕事に從事してゐる間は他の一切の關心、道德的關心さへも離れなければならない――仕事にも從事することが出來るのである。朝子氏と話したのもその點に就いてであつた。「私は赤裸々であるといふだけでは、僞善よりは遙かによくても、人格として仕上げが出來てゐるとは云へない。正直である以上に人格の香、床しさ、愼み深さ、上品さ等がほしい。それらを正直と矛盾せずに、

人柄の中に備へたい」といふやうな意味のことを話した。「然しそれは、素質や、境遇や今歩んでゐる道程の、そして又經て來た閲歴の如何によつて、中々困難である」と云ふ朝子氏の話が出て、私が結局一番深いところではどうでもいゝのだと思ふ、その上での修養であると云つたのである。如何なる人格が最も理想的であるかといふ問題を考へる時には、私は一番高い、圓滿な例へば佛像の如き、一つの假相を心に描かずにはゐられない。その點では微に亘り、細を穿つて吟味したい。一分一厘でもまだ奥があるならば、其處で止りたくない。然しさういふ穿鑿が出來るのはどうでもいゝといふところに立つてゐられるからである。私はどうでもいゝといふところに立つて安心し、これ以上考へられないといふところを理想にし、且つ、その間に無數の段階を認めて、一億よりは一億プラス一の方が大きいと云ふ位にまで吟味してゆくのが一番正しいのではないかと思ふ。どんな人でも赦されなければならないその存在を法界に容れられなければならない、然し、人間が實際に贏ち得た德の段階は嚴かに記錄されねばならない。屹度記錄されるだらうと思はずにはゐ

られない。十の石を積んだ賽の河原の童子は九つの石を積んだ童子よりも祝福されなければならない。然し、それが鬼に崩されるのは同じことであつて、一つの石をも積まなかつた童子と同じく、その功で救はれることは出來ない。救ひは積んでも積まなくても、法界の豫定計畫として、豫定調和として成就してゐなくてはならない。かくかくの善の段階まで達すれば救はれるといふが如きことが、救ひの自覺と矛盾するのは云ふ迄もない。といつて良心の疾ましくない時に救はれるのだつたら救ひはないのも同じことである。良心に全然疚しくないといふが如きことは人間にはあり得ない。何が善何が惡といふこと自身がはつきりと分別しかねるのである。或る人は自力を盡して他力を待つこゝろに救ひがある。即ち現實の自分は不完全であつても、自分としては全力を盡した。これ以上やりかたはなかつた、といふところまでゆけば救はれるといふであらう。然し、自力を盡し切つた、といふ自覺に立ち得る場合は、日々自分の心の内を省みる時に、事實は殆んどないといつてもいゝ程稀である。むしろどうすべきであつたかはつきり解らなかつたけれども、自分の心

自分はその内で一番勝を占めてゐた力に從つて、且つ自分の力とは全然別な外部の力――自分はそれを攝理の一部と考へてゐる――に從つてある行動をしてしまつたのを後になつて反省するのが普通の形である。しかも救ひの自覺は、反省したその瞬間、瞬間になくてはならないものである。自分の存在は果してこの法界に許されてゐるだらうか、自分の如きものでも生きてゐていゝのであらうか、と、省る時その時、直ぐに自分でも存在を許されてゐるのだと云ふ心持になれなくては救ひの自覺ではない。私はどうしてもさう思はれる。救ひの自覺はその瞬間、瞬間になくてはならない。省みて自力を盡してゐる自覺がなくては救はれないのでは私達は安心立命することは出來ない。寢食に就き、物を眺め、味ひ、仕事に從事する心のゆとりを得ることが出來ない。其の意味では私は救ひは純粹に他力的でなくてはならないと思ふ。それならば救ひには自力は必要でないかと問はれるならば私は救ひの原理としては自力は必要でないと答へたい。然し自力を少しも盡さない人が、私が前に述べたやうな、これでも赦されてゐるのだと云ふ氣持になれるかと云へば、私はどうもな

れさうには思へない。事實としては自力を盡し切つたといふ自覺にはなれなくても、自力で努力してゐるから何物かに訴へすがり、任せたやうな、許して貰へさうな氣持になれるのだと思ふ。全く罪の自覺のないもの、良心のないものが事實として救ひの自覺を持つことが出來るとは思へない。自分は救はれてゐるといふ自覺が宿る瞬間には、その人の心は罪の自覺——眞心を持つてゐる。これは事實である。この意味では客觀的には眞心はなくてもいゝとは云へない。何となれば救ひの自覺が宿つてゐる時のその人の心の中には眞心が必ず存在してゐるのだから。然しこゝにはつきりさせておかなくてはならないことは、この事實は眞心がなくては救はれない、即ち、救ひの條件として眞心が必要であると云ふのとは別である。自分に眞心があるかないか解らない。眞心を盡し切つてゐるこもはつきり思へない。然しこれでも、ともかくもこの儘で、私の存在は許されてゐるのだと思へなくてはならない。即ち眞心がなくては赦して貰へないと思ふのではないが、事實として眞心があるのである。こゝの心持は微妙な相違である。この意味では眞心はなくてもいゝこ

私は云ひたい。私が朝子氏に云つたのはこの意味である。

私は道徳的意識と、宗教的意識とは、密接な關係はあるけれども、その本來の特色は、はつきりと區別したい、如何に眞心を盡して精進しても、それだけではごこ迄も道徳の世界である。又道徳さしてはそれだけでいゝ。宗教的意識は別の世界で、別の法則の支配を受ける、その世界では道徳は功にならない。通用しない。救ひを信じる信心のみが通用する。功となる。極重惡人で救ひを信じ切つてゐる者は、道徳堅固で、信心が少しでも薄いものよりは、高く値踏みされる。道徳の世界では信心はなくても、實際に惡を造らない人ほご高く値踏みされる。然しこの二つの世界は無關係だと云ふのでは勿論ない、密接な關係がある。この二つの面の交つたところに私達は立つてゐる。一番眞心が多く、一番救ひを信じる人が、一番祝福された人である。若し私が前に云つたやうに、記錄と云ふものがあるならば、この二つの功の段階はそれ〴〵記錄されるであらう。「某は九の信心をもつてるたが、一だけの精進をなした」「某は九だけの精進をなしたが、一までの信心しかもた

なかつた。」と、云ふ風にである。悪人も、善人も同じやうに記錄される筈は決してないと思ふ。その意味で私は嚴格に精進と云ふもの丶價値を認めたい。スウエデンボルグが云つてゐるやうに天國にも段階はあるであらう。然し、救はれてゐるといふ自覺は精進の自覺とは違ふ。精進の自覺がなくては事實として救ひの自覺に達しられなくても、かくかくの精進をしてゐるから救はれると思ふのではない。これでも、兎も角も、この儘で許されてゐると思ふ心境である。その心境に立たなくては自分は安心することが出來ない。又救はれてゐるといふ事實と、救ひの自覺とは別事である。救はれてゐるのは、眞心の全然ないものでも(若しさういふものが實際あるとして)救はれてゐるのである。救ひの自覺は只それに氣が付くのである。氣が付いても、付かなくても、救はれてゐるのであるが、救ひの自覺をもつ人は、それに氣がついたのである。その點から考へて見ても眞心がなくては救はれないと云ふよりも、眞心がなくてもいゝと云ふ方が、私の心持には、より近く、よりしつくりしてゐる氣がする。以上で大凡ではあるが、私が「眞心がなくてもいゝ」と云

つた意味は說明したと思ふ。以上の私の言說で解つてゐるとは思ふが、云ふ迄もなく私は眞心の價値を認めないのではない。むしろ極度までそれを認める。私は私よりも、少しでも多く眞心をもつてゐる人には喜んで頭を下げたい。神の座の前でその人には喜んで席を讓りたい。又私も出來得るだけ眞心をもつて精進したいとは念じてゐる。然し私の安住所はどこ迄も、他力の中に置きたい。

兎も角も、これでも、この儘で、この瞬間許されてゐるのだと信じたい。そして、その感謝から却つて精進の原動力を得て、道德に勵み、道德の最後の段階までも上りたいと念ずる。然し、その念力が如何程强固であるかに就いては自ら反省なきを得ない。私が救ひの自覺をその念力の强さの程度から、獨立させないではゐられないのも、その爲めである。私は、私にとつてなくてならぬ、安心立命を、この恐ろしき反省からも安全にして置かなくてはゐられないのである。かゝる問題は實に深奥であつて、私がとてもはつきりと書ける筈がない。私は必要な限りに於て、遠慮がちに書いたのであることを讀者に知つて戴き

たい。他日また詳しく書きたいと思つてゐる。私の一生涯の一番大切な問題なのであるから。

一九二一、一一、三〇

「出家と其の弟子」の上演に就いて

「出家と其の弟子」の上演に就いては、自分の感想集「愛と認識との出發」の中の「出家と其の弟子の上演に就いて」と云ふ文章の中に詳しく書いてをいたから、今別に附加する必要はない氣がする。が只一つ自分が平常一般に觀客に對して希望したいと思つてゐることをこの機會に書いてをきたいと思ふ。この希望は特に「出家と其の弟子」の如き劇に於て、尤も切實に感じられるからである。今の日本の觀客は何よりも第一に、白を聽く耳を訓練しなければならない。劇は自分の考へでは、その表現の手段として白を最も重要なものとしなければならない。(勿論動きや、間や、白以外の音響や、色彩、光線其他の舞臺裝置も重要な表現の手段ではあるが。)故に觀客は注意して白に耳を傾け、その白のの含む意味、心持を理解しやうと努力するだけの用意をしなければならない。白を理解すると云ふ意味の中には、勿論その白の思想内容も——嚴密に云へば、勿論概念としての思想をも——理解することを含めなければならない。此の用意を觀客に期待しないでは深い精神内容のある戲曲を書くことは出來ない。無論思想の爲に思想を白中に述べしめるのが觀客にと

つて迷惑であり、劇的に避けなければならないのは云ふまでもない。然し精神生活と云ふものが、既に多量の思想的要素を含まなくては成立しないものである以上、精神的な戯曲を書かうとすればする丈け、思想的要素を多く含むやうになるのは當然である。その思想を如何に登場人物の性格の中に溶してあるかゞ戯曲家の觀客に對して負ふ義務である。然しこの義務を作者が果してゐる限りに於ては、觀客も亦其の思想内容に耳を傾ける義務を作者に對して負ふてもらはなければならない。又其の劇の性質、人物の境遇に依つては思想のある程度までの概念的な表出をも白の中にとり入れるのが、自然であり、當然である場合もある。たとへば「出家と其の弟子」の場合では親鸞と云ふ宗教家の弟子や、同行衆か宗教上の意見を問ふた時親鸞がこれに答へる爲に宗教上の意見を述べる事は必要であり、當然である。かゝる種類の問答を用ひずして、あの作を書く事は作其の物の厚味を減ずる事なしには不可能である。かくの如き場合に於ても觀客は其の思想内容に耳を傾ける義務を負ふて戴かなければならない。

事實吾々の日常生活に於ても精神生活を營んでゐる以上は、純粹に思想的な會話を交へその會話から直接に可成り烈しき喜怒哀樂等の感動及び其の表現に移る事は珍らしい事ではないのである。思想的要素を如何に白の中に取り容れるかゞ戯曲家に與へられた、課題であつて、これを排除する事は不可能である。たとへばレッシングの「賢者ナータン」の如き傑作も觀客にこの用意を期待する事なくしては、効果ある演出は至難であらうと思ふ。出家とその弟子」に就いて云へば、例へばあの第二幕はあの戯曲中作者の最も自信のある幕であつて阿部氏などがあの幕に最も愛を感じられたのは作者の心に適ふたのであるが、あの場は最も動きが少く目立つ處がなく、觀客に前述の如き用意がないならばきつと退屈を感じるに相違ないと思ふ。

自分の作は、殊にあの作は何よりも白を聞いてもらはなければならない。自分の作は主として觀客のこゝろに訴へる。戯曲は感覺的要素を多量に用ゐるだけ、觀客の注意を緊張さすのに便宜である事は云ふ迄もない。然しそれ丈け、ごまかしも利く。觀客の精神を働

かしめずして、感覺を刺激して、精神的感動及び美感以外の感覺的刺激を以て、觀客を惹く事は藝術上無意味であり、戯曲の墮落である。自分は必要以上に感覺的刺激を用ひることを避けたいばかりでなく、自分の趣味としてあまり感覺をライチエンするものは好まない。それは何よりも大事な凝つと物を觀照する心の靜けさを亂すからである。自分がオペラを好まないのもその爲めである。もし觀客がオペラを觀にゆく如き態度を以て「出家と其の弟子」に臨まるゝならば堪へ難く窮屈であらうと思ふ。心を靜かにし凝つと、物を考へ、しみじみと白を聞く丈けの用意を以て觀に行つて戴きたい。

云ふまでもなく芝居は民衆に感覺的快樂を與へる爲ではない。ビルドの形をとり、感覺の手段を借りて、結局は觀客に精神的感興を（自分は教養とは云はない）與ふる爲めである。生活に疲れて居る民衆が劇場に行く時までかゝる義務を負ふには堪へないと云ふ人があるかも知れない。しかし自分は生活が苦しく、忙がしく、せち辛いだけに劇場にはいつた時にはせめて心を靜かにして、凝つと落ち着いて、考へ、眺める數時間を過ごしたいと

思ふ。劇場は民衆の娯樂場ではなく、寧ろ寺院の如く、結局は民衆の心を靜める働らきを爲すべきものであると思ふ。自分の如き白に重きを置く作者にとつては觀客が動きや、色彩等にばかり氣をとられて、白を聞き流すのは堪へ難い氣がする。甚しきは開幕後數分間は白をまるで聞かない如き有樣では自分の書く戯曲の味は到底現はれないと思ふ。

「俊寛」の上演の時にも自分が苦心慘膽して作つた白が何の効果もなく無意味に聞き落されてしまうので作者として堪へ難い氣持であつた。無論自分は自分の未熟を以つてしてあの作に於て作者が觀客に對して負ふてゐる義務を完全に果して居るとは云はない。觀客が退屈を感じられるならば、全然自分に責任がないとは云ひ切れない。しかし觀客に於ても其の責任が少くないであらうといふ事を想像しない譯にゆかないので豫め、御願ひして置きたいのである。若しそれ初めより或る成心を以て觀る者、或は人間の當に感ずべきものに感ずる事の出來ない、いがむだ若しくは刺激の爲に痲痺した眼を以つて臨む者が退屈を感じるのに對して責任を負ふことは自分の堪へ得ざる處である。

念の爲に一般の人に對して作者としてお願ひしたのである。

（一九二一・一一・二五・帝國劇場に於て、
舞台協會に依つて上演されるに際して。）

小さな集りに就いて

私は親しい氣心の解つた、少し許りの者が集つて、一緒につましい夕飯でも食べ、催し事をして半日を過すと云ふやうな小さな集りが好きだ。さう云ふ小さな催しは人間が此の世で持つことの出來る一番樂しい、清いものゝ一つではないかと思ふ。人間が自分達の缺けた事の多い生活を少しでも樂しくする爲、寂しい心が相寄つて互ひに溫く慰めを感じ合ふ爲、忙しい中から幾らかの時間を割き、つましい中から費用を省き、その數時間だけは暫らく此の世の心勞を離れて、幾らか意識的にでも、此の世を樂しいものと思つて、過すと云ふやうな催し事は人間味のある美しいものだと思ふ。さう云ふ集りが平和に、滯りなく、また、ざわ〳〵した喧噪或は下品に陷らないで、樂しく、しめやかに營まれると云ふのには、矢張り人間のカルチュアが要る。對人關係の德と智慧とが要る。そこでは人と人とは傲慢に振舞はないで互に讓らなければならない。他人の心にオフエンシブに立入らないで謹み深くなくてはならない。と云つて眞面目(シリアス)にならないで、裁き易い心を出さず、樂しいことに感じ易い幾らかユーモラスな氣持を保たなくてはならない。又互に冷たく心

を閉ぢないで素直に人に求めなくてはならない。と云つて人の心を打ち、或は餘り眞面目に緊張させ過ぎる如き言動をなす事を避けなければならないと同時に、だらけた醜さに近づく如き種類の冗談（無邪氣な且つ機智のある冗談はかゝる集りに於いて最もふさはしく、また歡迎さるべきものであるが）を云ひ過ぎてはならない。さう云ふ集りに於て人間としてのカルチユアは、最も訓練される。そしてさう云ふ訓練は實に偉い敎養の一つであると思ふ。此の世が樂しく住み心地よくなることは、人間のかゝる種類のカルチユアがなくては望まれないと思ふ。そこに人と人との接觸の微妙な味がある。若し地上に天國と云ふものが出來るならば、人間にさう云ふカルチユアが出來てからでなくてはならない。今度私の家族や友人や知人達が集つて小さい催しをするについても、私はさう云ふ事を考へ度い氣がする。只浮々した心で、お祭り騷ぎをしたい爲ではない。また、一方それごころではない、苦しい餘裕のない心で暮してる多くの人々の心を考へないのでもない。（其の意味でなら自分は境遇上自分をさういふ人の一人として感ずる。）「此の世が火宅である限り

は、我々は絶えず消防夫の如き氣持で暮してゐなくてはならない」。と云ふ西田氏の氣持も充分に解かり、さう云ふ氣持を絶えず持つてゐなければならないと思ふが、亦、一方純粋の遊戯三昧――何の功利的（道徳的目的をも含めて）な目的、或は意志にも仕へない、無關心な、自由な心境もこれと對立して實に尊い。人間が片時も忘れてはならない氣持であると思ふ。この二つを容れ得るこころに、この人生の悠々とした調和がある。駘蕩とした海のやうな趣きがある。（此の事に就いては、他日詳述したい。）昔から高僧たちには一方衆生の苦患に對する血の出るやうな同情と憐愍の爲に遑々として忙がしい中にも、子供のやうに無邪氣な無關心な遊戯三昧の味がその人柄にしみ出てゐるのは懷かしき心境と思はれる。勿論私達が今度する集りは、さう云ふ大袈裟なつもりではなく、只樂しく親しく半日を過ごすことが出來れば足りるのである。只々腹の底の底にさう云ふ修養めいた氣持ちも持つてゐたい。（それが外に現はれては勿論さう云ふ集りに相應しくないのは云ふ迄もないが。）

序で乍ら「出家と其の弟子」が「大當りなので景氣にのつて、浮いたお祭り騷ぎをする」やうにとれさうに、新聞に出たりしてゐるのは私の神經に響く。「出家と其の弟子」の今度の上演に就いては作者も舞臺監督も當事者も決して成功とは思つてゐない。皆藝術的良心に不滿足を感じて、むしろ觀客に濟まなく思つてゐる。いつかもつと立派に再演することを作者も、舞臺監督も當事者も心から希望し、また世間に對して負ふてゐる義務とさへ感じてゐる。

餘り私事には亘るが、ある大事な公な問題を含んでゐると思ふので、一寸書いて置くのである。

（一九二一、一二、九）

或るプロテスト

自分はゲーテの「親和力」を讀んで非常に感心した。種々な點で感心したが、特にこの作の中に取り容れられてゐる敎養的要素の豐富なのに感心した。出て來る人物の性格の隅々まで、ものごし、つまはづれの端々迄、人間のカルチユアの美しさが泌み渡つてゐる。交はされる會話は何と云ふ優雅さであらう。そのスタイルは實に美しい。そして、或る智的な美しさが作全體を貫いてゐて、それが作に一種の冷い美を與へてゐる。自分はこの作に於て科學、經濟、建築、音樂等に關する智識や、敎育、園藝、育兒等の家政的興味より、禮儀、作法等の心得に到る迄、全て人事百般に關する思想及び敎養が、如何に美しく、巧に取容れられてゐるかを見て感嘆しないわけにゆかなかつた。そして是等が藝術の中に取容れられ得るのみならず、取容れらる可きものであることを感じた。それらの敎養的要素が作全體に與へてゐる效果、投げてゐる陰影は實に驚く可きものである。そしてゲーテの豐富さと、大きさ、また、賢さを示して餘りがあると云つていゝ。これに類する事は、イフイゲニーや、タツソーや、ファウストや、總てゲーテの戲曲の中に於ても亦見出される。

その會話の中に含まれてゐる敎養的要素の豐富さはゲーテの戯曲に於ても、實に重要な特色である。ゲーテの戯曲を讀んで、扨て、今の日本の多くの戯曲家の戯曲を讀む時に、何と云ふ、狭さ、卑近さ、荒さであらう。その醸し出すアトモスフェアは、乾からびて、平淺で、せゝこましく、慌しい。これは何故であらうか。その原因は種々あるであらうが、その重要な一つは、彼等が敎養的要素を戯曲から斥けるからである。思想を舞臺から追ふからである。勿論さうなつたのには理由はある。思想の爲の思想が戯曲の最も戯曲的たる特質ダス、ドラマチッセと相容れないのは云ふ迄もない。この要求から、戯曲的ならぬ限りに於て、思想を排斥することは正當である。併し今の日本の文壇に於て思想の排斥せられるのは、この正しき藝術的要求からのみではない。自分のこゝに云ひたいのは只その點に就いてのみである。その點から思想を正當に辯護したい爲である。戯曲家の興味は今や現代劇、殊に社會劇に集注しやうとしてゐる。この傾向はそれ自身に少しも惡くはない。只その傾向の原動力となるものが、或る現實的な功利主義や（社會運動の如きものはそれ

が如何に正しくとも、その實感が、藝術的作意を直接に動かす時には、藝術上功利主義であるのは勿論である。因みに、勞働運動が如何なる意味に於て、ごれだけの限界に於て正しきかと云ふ問題に就いては自分は「勞働運動の道德的根據に就いて」と云ふ論文で自分の意見を發表した。又藝術と勞働運動との關係に就いては、他日詳しく書きたいと思つてゐる。靈魂の乾燥や、趣味の卑近や、總て「現實的なるもの」のみに、刺激されて「本體的なるもの」を思慕する靈魂的念願の薄弱に由來してゐる時には邪道である。現代の文化が一般に墮ちてゐるやうに見える平淺、卑俗、乾燥、刺激的、功利的等の缺點を反映するが如きものであることは藝術の墮落である。この傾向は殊に戲曲の如き、その藝術的處緣の約束上特に井ルクリヒカイトの必要な形式の藝術に於て殊に甚だしい。自分は今の日本の現代劇作家の戲曲を概して好むことが出來ないものである。その作風は餘りに平淺で、卑近である。最も鋭いと云はれてゐる人のものでも、その鋭さは、怜悧なるものが民衆の中に住んで、自分の周圍に起る現象を、一寸觀察しさへすれば得られるが如き鋭さである。

必ずしも藝術的な眼を以て觀察するを要しない一種の偉大のシャルフジンである。深い、高い、イデアの世界を思慕するに堪える念力に備えた眼を持つて觀察した鋭さではない。否、寧ろかくの如き鋭さは、念願の低い、遠い世界の見えない、限られた局部を、限られた視點から見さへすれば滿足できる、細巧者の方が、却つて得易きものである。恰も一つの人格に於て、君子は圓相を帶びてゐるが、心さかしき才人は鋭さと、手取早さと、氣の利いたところを備へてゐるが如きものである。自分が今の日本の多くの現代劇作家の作にあきたりないのは、斯くの如き平淡なリアリズムの爲に、觀念性が缺乏してゐるからである。自分などの考へでは藝術的と云ふ事は極端に云へば觀念的と云ふ事と同意義である位に思つてゐる。凡そ觀念性の缺乏した偉大な作と云ふ槪念は自分には矛盾の感を與へる。自分はクラシックの作家と評されてゐるが、それを決して不名譽に思はないのみならず、寧ろ今の現代劇作家の間に於て、そのことを名譽な位に思つてゐる。その氣稟に於て、ムードに於て、趣味に於て、スタイルに於て、自分はたしかにクラシカルな戯曲家である。

併し乍ら、クラシカルと云ふことゝ、現代的と云ふことゝは必ずしも矛盾する概念ではない。自分は古典の「心」を現代に於て生かしたく念じてゐる者である。現代劇を古典的に書かんことを志してゐる者である。この事は決して不可能な試みではない。現代劇と云ふことゝ、現實的な劇と云ふことゝは同一の概念ではない。現代劇をリアリズム以外の態度を以て、クラシカルなムードを以て、アイデアリズムのスタイルを以て書くことも出來る。自分が若し近代劇作家として、自分のフイールドを拓くことが出來るとすれば、恐らく斯くの如き作風に於てゞあらう。この自分の特色を見出して、自分の當に進む可き方向に、自分を押し進めるやうに、示唆と皷舞とを與へてくれる批評家こそ賢くして親切なる批評家であらう。田中總一郎氏の如く、クラシカルな作家であると云ふ故を以て、それ自身に貶黜の意味を含め、その故に將來なき作家であるとなすが如きは、愚なる批評家であるのみならず、古典的なる作家の故に現代劇を書くことが出來ないとなすが如きも淺薄と云はなければならない。自分は寧ろ今の日本の現代劇作家に、クラシカルなムードの缺乏して

者である。もつとアイデアリズムの空氣が近代劇の中に濃厚に醸されなければならない。自分は今後、現代劇を書かうとする試みを決して止める氣はないのは勿論、それをアイデアリスチックに、クラシカルに書かうとする試みをも斷念するつもりはない。又自分は現代劇に思想的、教養的要素を取容れんとする試みをも止めないであらう。その試みを不可能であると思はず、又藝術的に邪道であるとも思はないからである。むしろこれらの要素を藝術的に取容れることに成功し、「古典的なるもの」の心を現代劇に生かす道を成就したる曉にこそ、自分の戯曲家としての一家の作風を建て得たる時であると思ふ。自分の作に古風な處があるのは自分が「新らしきもの」に對する感覺を缺くからではなく、現代にあきたらざる心が自ら選ぶ趣味である。併し乍ら自分は現代の意義を認めないのではない。時代には其の文化史的意義がある。自分にとつて現代は、自分の藝術的視界に並存する幾多の時代の唯一つではあるが、自分がその中に呼吸する、自分に最も直接なる時代であり、

且つ文化史的に最後に出現した時代としての或る「新らしさ」を持つてゐる。その「新」も亦藝術上取容れらるべき一の要素であることを認めるが故に自分はその「新」を取り容れるこゝに決して吝ではない。たゞ、古きものと新なるものとを問はず、そのよきものゝみを取り容れるのである。尊敬し、愛惜すべき古典の「こゝろ」を現代のよき意味の「新」の中に生かさんと欲するのである。素よりこの藝術的念願が容易く達せられると云ふのではない。今後多くの試作を重ねなければならないであらう。自分の「父の心配」や「處女の死」はかくの如き道程の試作である。自分の先に立つて、既にその一代の偉業を成し遂げた天才に比べる時、自分は素より未熟である。自分のかけてゐる無限の藝術的慾望に比べる時、自分の是迄なした仕事の如きは云ふに足りない。自分は未だ自分の内に持つてゐる最も優れたものを生かし切る技巧を會得してゐない未成の藝術家である。自分が恃むことが出來るのは、自分の内にある素質、その素質を生かし切らんとする欲望、その欲望を實現せんとする藝術的精進の念力、及び、その念力を以て進みつゝある自分の藝道の方向

の確かさの自覺である。後は自分の文運と絶え間なき研究に依る會得とに待つ他はない。批評家の批評も自分の參考になるものは取容れるのに吝ではないつもりである。只自分の作の藝術的價値は某々の批評に依つて定まるのではない。只自分が祀る詩神の裁きに依つてのみ定まるのである。凡そ現代的と云ふ感じの中には如何に多くの缺點が含まれて居るであらう。其點ではターベル氏などの現代に對する鋭くして智慧ある批評の中に如何に多くの重要な眞理が含まれてゐるか知れない。自分の裡にも現代的と云ふ感じに對する可成り強い反感が存在する。一方中世に對する抑へ難き思慕が存在する。田中氏は自分の「父の心配」の中に「一つとして近代作家の味を見出すことが出來ない」と云つて居る。が、自分は文字通りには此の斷定に服することは出來ない。「父の心配」には確かにあるモデルニテートは出てゐる。殊に自分があの作に附與した、而して自分が親ら一青年學生としてその中に生き、體驗した時代即ち明治四十年頃の時代思潮の或る特質は充分に出てゐると信じる。併し乍ら自分の近代と云ふものに對する考へが上述の如きものである以上氏の意味す

るが如く見ゆるいはゆる近代作家の味が見出されないのは當然である。自分が自ら撰んで拒斥した味が出ないのは自分の滿足するところである。田中氏の云つてゐることは總てリアリズムの立場からである。自分は恐らくリアリズムに最も遠き作家であらう。リアリズムの感じが薄いのは自然である。併し何故にリアリズムのみでなくてはならないのであるか。クラシカルなムードを持つて、アイデアリスチックなスタイルを以て現代劇を意圖して居る自分に對して、只リアリズムの立場からのみ批評するのは獨斷であり、淺薄である。氏はありきたりの所謂近代劇のドラマツルギーの尺度を以て自分の作に當て嵌め、それが當てはまらないと云つて、非難してゐるのは見當違ひと云はなければならない。「第一幕及第二幕は全然不用である。」と云つて居るが驚くの外はない。第一幕及第二幕は決して單なる説明ではない。それぞれ獨立した必要と美とを持つてゐる。その中には自分の愛してやまないシーンがある。抑も〱作者にとつて必要なのは筋のみではない。實にシーンである。個々のシーンの美と味とが無限の魅力を以て作者を惹くのである。全然不用である

愛してゐる戯曲の一つであるが、あの第一幕及第二幕の味がどうして解らないのであらう。なごゝは以ての外である。田中氏が例證してゐるヘッベルのユーディットも自分が非常に愛してゐる戯曲の一つであるが、あの第一幕及第二幕の味がどうして解らないのであらう。決して第三幕以下の說明の爲のみではない。獨立した、充分な、美と必要とを具へてゐる。氏は「冒頭こ結末に順作と道子の會話をおき其の會話の內容までシンメトリカルにしたのはあまりに見え透いた技巧である。」と云つて居るが、自分はそんな技巧は用ひない。偶然にあゝ成つたのであつて、しかも決して不自然とは思はない。まして「讀んでゐて不愉快になる技巧」なごとは得手勝手な推測である。次に自分が最も服し難いのは氏が「戀愛の取り扱ひ方に就いては評することを倉田百三氏の名聲に對して恥じたい位ゐである。」と評してゐる事である。自分はあの成吉といふ青年に暖かい愛を感じてゐることをはつきり云つて置く。もし成吉の如き青年が實在してゐるならば、自分はごんなに愛を持つだらう。松子に對する成吉の戀愛にも涙ぐむ程の愛を感ずる。自分の名譽に對して恥じたいなごとは思ひも寄らない。告白すれば成吉の戀愛のモデルは自分の青年時代の戀愛である。あの

戀愛に對して「まるで異邦人のやうに見える。」と云ふ田中氏は自分には實に不思議と云ふ他はない。氏は成吉を「衒學な厚顏た露骨な、田舍文學青年的な戀愛をする人間」であると云つてゐるが、これなども自分から見れば如何に氏の精神生活が狹くして、硬く、物を見る眼が淺いかと云ふことが思ひやられる。氏は恐らく自分の「愛と認識との出發」を讀んでゐないのであらう。（讀んでゐるやうに書いてはあるが）自分は成吉に於て純な、眞面目な、殊に戀愛に關して眞面目な且つ氣を負へる好青年を書いた、成吉が厚顏にして露骨に見えるのは眞理に對する公な正直さと情熱とが青年らしき稚氣のために生まのまゝに表はれる爲である。衒學的に見えるのは半ば作者が殊更に意圖して書いたのである。現に第二幕の初め頃の成吉の白に（衒ふやうに）といふ「ト書」を附してあるではないか。自分は「愛と認識との出發」の序文の中にも書いて置いたやうに、青年の稚氣と衒氣とは眞面目な氣性に裏付けられてゐる時には却つて青年の愛すべき特色を作るものであると思ふ。これらを全然缺いた青年を、青年として愛することは困難を感ずる。故に自分は成吉の性格に稚

が最も服し難き點である。成吉の如き青年であつた自分は自分の名譽にかけても、この點には絶對に不服であることをはつきりさせて置く。純な、眞面目な、生命に目醒めたばかりの、氣を負ふた、眞理に捧げやうとしてゐる、若々しい青年にとつてその戀愛は常に自己の信念の說敎と結びついて離れないものである。「人間は眞理に忠實でなくてはなりません」と戀する青年が、戀人に肩を聳やかして、涙ぐんで語る時には「私はあなたを愛します」

氣と衒氣とを意識的に與へた。しかしそれは決して成吉をして愛し難き青年たらしめるが如くには書かなかつた。さう云ふ點では微妙な用意がしてあつて、自分の最も自信を持つてゐるところである。素より作者が意圖して到る處のト書きに現はれてゐるやうに、成吉の態度には或る誇張がある。しかしそれも充分な神經を以て愛す可き者との感じを裏切る如き風には書かない用意を充分に施してある。あれが堪へ難き壓迫に感じられるのは讀者の性格のインテンシチーが弱いからである。自分の趣味では決してあの成吉を評者の云ふ如き青年と感ずることが出來ないのみならず、實に愛すべき好青年と感ずる。この點は自分

と云ふのと同じ心持を表現してゐるのである。かゝる青年にとつては、議論も亦戀の言葉である。自分が一番戀に熱してゐた時、自分が戀人に書き送つた長い〲手紙は殆んど議論ばかりであつた。そこの微妙な心持が、解らない人の心事が自分にはむしろ理解出來ない。あの心持の理解出來ないやうな人が、然かも、まだ學生であるといふ青年が、如何なる戀をするのであらうか、自分には思ひやられる氣がする。あの生命感と、嚴肅さと、青春の誇と、議論と、涙と、こんがらがつてゐる、一つの愛すべき寧ろ可憐な戀愛がどうして自分の「名聲に對して恥ぢたい」などと思へやう。自分は成吉の如き青年が、愛すべき好青年であることを幾度辯護しても足りない氣がする。次に技巧上の個々の點に於ても、自分は田中氏の判斷に服することが出來ない。氏は自分の戲曲の會話が、眞實性がないと云つてゐるが、これも氏のリアリズムの狹くして、固定せる視點からの獨斷に過ぎない。自分の會話がリアリスチツクでないといふことは素より首肯する。それは前述の如き作者の要求より起るスタイルである。自分はこの現代の日常生活に於て、使用されてゐる會話

をそのまゝ、自分の戲曲の中に用ひるのではない。自分の藝術的作意に適ふやうな會話のスタイルを戲曲の中で創造したいと思つてゐる。教養のある、品のいゝ、一つの典型としての會話のスタイルを出したいと思つてゐる。その會話が現實的でないといふことは、自分の素より期する處である。實際に行はれてゐる日常生活の會話の中から、平板にして粗野なるものを、自分の言語に對する一つの趣味を持つて濾過してゐる。リアリズムのみの立場からは、このことは首肯出來ないであらう。併し「父の心配」はリアリズムの作ではない。自分の作意は現實の社會の再現でも描寫でもない。作者の靈魂の中にある一つのアイデアリズムを通して、あるがまゝの現實にある觀念化が施してある。この意味に於て自分の作は觀念的な作である。イデーの藝術である。この點に首肯出來ないならば、それは藝術的立場の相違である。自分の如き立場が、藝術上一つの立場として存在の理由がないと云ふならば、論點は別に移る。それが立場の相違である以上、會話のスタイルが違つて來るのは當然である。例へば獨白の如きものもリアリズムの立場より、それが排斥される

のは、然である。獨白が不自然であつて、獨白を用ふれば會話がリアリスチックでなくなり勝ちなのは勿論である。併しこのことを戯曲に捧げてゐる自分が知らないなどと思ふのは何といふ淺はかさであらう。現代劇に獨白を使はないといふ現代劇のドラマツルギーの常識を以て、自分の作を——自分に云はして貰へば、惠まれた藝術家の創造的特權を持つて、その常識を超越してゐる自分の作に對して、さかしらに（氏の言說ここ典型的に術學的で、傲慢で、私的である。）獨斷的な批評をするのは片腹痛い氣がする。自分が獨白を用ひるのは決して田中氏の云ふ如き「窮策」ではない。自ら選んで用ひるのである。獨白に特在してゐる微妙なアイゲントリツヒな味に惹かれるからである。獨白はリアリズムの立場からは田中氏の云ふ如く「現實幻覺を失はしめる最悪の手法」であるかも知れない。然しアイデアリズムの立場からは觀念的な云ひやうのない味を持つてゐる効果ある手法である。素より現代劇に獨白を用ひるといふことは自分にとつては、まだ試みである。將來これを如何に處置すべきかといふことは自分の前に置かれた課題であつて、自分の親近の藝術家の間

では、常に研究の題目となつてゐる。自分の親近のものゝ間でも、現代劇には獨白を用ひない方に賛成する人は多い。然かも自分が尚、且つ獨白を用ひるのは、自分がよく〳〵この獨白の持つ固有の味に惹かれるからである。そこに如何に自分がクラシカルな作者であるかと云ふことが現はれてゐる。そこに自分の特色がある。自分が獨白を用ひるのは窮策でもなく、現代劇の常識的なドラマツルギーを知らないからでは勿論なく、自分の觀念主義から起る試みであることをはつきりさせておく。自分にとつては、自分の作が、リアリスチツクになりさへすればいゝのではない。自分の内にある最も深き作意を生かすために最も適したスタイルが必要なのである。凡そ三點を過ぎつて圓を描かんと苦心してゐるものに、二點を過ぎつて圓を描く作圖法を說くことは無意味である。氏は自分の作の會話の「一つ一つの言葉の拙さは言語道斷である」と云つて、次の三つの例を引いてゐる。念の爲にも一度こゝに上げて置く。

○民子。　ほんとに松子さんは蕾のやうだ。見るものゝ心に樂しい春を約束する——

○氏子、　哲學の書物だね。哲學と云ふものは神樣の御計畫と、その榮えとに就いて研究する學問ださいゝ。

○氏子。　この帯を結んで春の庭に立つたら、松子さんはお前の好きな女王のやうに見えるだらうと私は思ふのだよ。

然るに、不思議にもこの三つの白は自分が最も愛を感じてゐる――そこを讀む時には會心の思ひのする白である。現に「思想」の創刊號の第三版に、丁度この白の一部分が間の落ちてゐたので自分はどんなに殘念に思つたか知れない程である。他の部分ならまだいゝのにと自分は心から思つた。自分はこの三つの白とも教養的な、品のいゝ、すつきりした、洗練された白だと今でも思つてゐる。自分はかういふ風のスタイルの會話が日常生活に於て用ひられるやうになることを望みたい。自分と田中氏とは此くの如き著るしき趣味の相違があるとすれば、かくの如き趣味を有する氏の一々の批評が自分にとつて服し難いのは、思ひ半ばに過ぎるであらう。果して總ての讀者が田中氏の如く感ずるのであらうか。若しさ

うとすれば自分は孤獨を感ずる。併し自分の趣味が心からこの白を善しと見る以上、自分の孤獨を守つても、此くの如き會話のスタイルを變へやうとは斷じて思はない。次にレーゼドラマとビユーネンドラマとの問題に關しても氏は淺薄な早合點を持つて自分を罵つてゐる。(氏の批評の態度は殆んご嘲罵である。)自分がレーゼドラマとビユーネンドラマとを區別するのは自分の深き藝術的良心の爲である。決して自分の戯曲的才能の未熟を掩ふ爲にレーゼドラマの論を立てゝるのではない。自分の深き創作的心理に立脚して、この二つのドラマの藝術的處緣の異なることを認め、この二つを書き分けんと志してゐるのである。自分の藝術的良心の嚴密にして纖細な爲である。自分がレーゼドラマとしての立場を一方に保存せずにゐられないのは、自分の作の内容が舞臺に堪へない爲ではなく舞臺が自分の作の内容に堪へない爲である。氏や、水木氏等の推測とはむしろ反對の要求からである。自分は全ての作をレーゼドラマとして書くとは一度も云つてゐない。只「布施太子の入山」にレーゼドラマであることを附記したまでゞある。現に「水邊」はビユーネンドラ

マとして書いたことを附記してある。自分は藝術家としての良心から未熟なドラマツルギーを發表することを好まない爲に、もつと精練して後にしたいと思つて、まだ自分のドラマツルギーを發表してゐないが、あまりに淺薄な誤解を逞ましくされるのも堪へられないし、又同行者と共に研究するための貧しき資料として近き將來に於て發表しやうと思つてゐる。自分の淺學及思索の未熟は兎も角も、自分の藝術的良心はそれによつて明らかとなるであらう。氏は又自分が「出家と其の弟子」と「俊寛」との上演を見て始めて技巧に意を用ふるやうになつたものと推測して居るがこれも甚だしき見當違ひである。自分は無論今日と雖、特に技巧の方面に意を用ひ、又特に恃みを感ずる作家ではない。然し自分の作意を藝術的に生かす爲に必要なだけの技巧を用ひんとする意志は、處女作以來一貫してゐる。「歌はぬ人」を心を公けにして讀んで見れば解る。「出家と其の弟子」に於ては無論である。あの作の中にはどれだけ技巧が用ひてあるだらう。田中氏が倒證した黑谷墓地の場面に於ても、自分は必要と信ずるだけの技巧は施してある。今日と雖特に必要以上に技巧的

になつては決してゐない。抑も自分を技巧を重じない作者であると考へるのが間違ひである。世間には自分の作の内容を賞める爲に特に技巧が拙いと云ひたがる批評家が多いが、それは自分の心に適はない。藝術家として作品を發表する以上、自分は無論自分の作品が、藝術的に成功してゐるか、失敗してゐるかに依つて、自分の期圖の成敗を決する。又さうされることを讀者に望む者である。一つの「完成されたる」ものたることを約束とせねばならない藝術品に於て、技巧と內容とは不可分である。若し技巧に於て失敗してゐるならば、自分の作は失敗である。內容としては成功してゐるが技巧として失敗してゐると云ふが如きことは、藝術品としては有り得ないことである。自分はかゝる批評に甘んじるには、もつともつと藝術に賭けてゐる。もつともつと藝術に捧げてゐる。自分の技巧に對する態度は斯くの如くである事をこゝにはつきりさせて置く。自分の技巧が未熟であると評されるならば自分は沈默する。たゞ自分としては自分の作意と作風とを最もよく生かす自分一家の技巧を産み出さんことを懸命に努力してゐる過程にあるものである。只自分は今の日

本の戯曲家で技巧が優れてゐると一般に評されて居る人々の作を讀んで、特に優れた技巧であると感心することは滅多に無いものであることをはつきりさせて置く。自分は一般に人道主義の作家とされてゐるやうであるが、自分が人間として人道主義者であることは首肯する。併し藝術家としては藝術自體主義者である。この二つの態度は決して矛盾するものではない。むしろ當然なことである。自分は人道の爲に製作するのではない。藝術の爲に製作する。たゞ自分が人間として人道主義者であるが爲に自分が一つの作の作意を決定する場合人道的性格の支配を受ける迄である。藝術家としては自分はどこまでも藝術自體主義者であることをはつきりさせて置く。氏はまた自分の「布施太子の入山」を「安價なシアトリカルなものであつた。」と云ひ、「低級な戯作者流の手法を極度に應用した」ものであると云つてゐるが、これに就いても自分は無論服することが出來ないが、これに就いては別に自分が發表しやうと思つてゐる。「『布施太子の入山』の作意及びスタイルに就いて」と云ふ論文の中で他の批評家の批評と一所に一まとめに自分の意見を詳しく書きたいと思

つてゐる。只自分としてはあの作は自分の藝術的成長の或る時期をはつきりと記念する、又自分の古典的戯曲の作風を示す代表的な作として、自分の全仕事目錄の中に於て、特殊な動かすべからざる地位を占めるものであると信じてゐることをはつきりさせて置く。次に田中氏も久保田萬太郎氏も「父の心配」を謙虛でないと云つて非難してゐるが、これは抑も何を意味するのであらうか。自分には理解出來ない。言ふまでもなく批評家は一つの作品を批評するには第一に其作の作意を洞察し、其作意に添うてなさなければならない。「父の心配」は題も示して居るが如く、順作の心境を主とした作である。自分の作意の目的と同情とは謙虛其ものとも云ふ可き父順作に集注してゐる。善良ではあるが、さかしらな、稍ソシアルな妻と、眞面目ではあるが、若さの爲に傲慢と誇張とに陷つてゐる息子と、內氣な傷つき易い且つ自分の傷つけた人の思ひ出である養女と、及び或る社會的な意味を持つた友人の娘との間に起つて居る葛藤を背景にして、順作と云ふ一個の善良な、謙遜な、靜かな智慧のある父を書くのが自分の作意である。順作と云ふ名さへも作者は其性格にし

つくりする樣な名を選んで居る程である。これは見識ある批評家でなくても、公けな讀者でさへあれば何人も見誤る筈のない作意である。然るに久保田萬太郎氏は成吉を主人公の如く考へ若しくは謂ひ、作者が自ら圖意して隨處のト書に於て示してさへゐる成吉の性格の取扱ひ方に對して（然かも、それさへ前述の如く決して愛すべき青年でないやうには書いてないにも拘らず）謙虛でないと云ふ批評を下す事を以て此の作を覆はうとするのは何と云ふ不親切な不見識な批評であらう。久保田氏の如く人間のカルチユアから起る、思想的な心境や、教養的な味の解らない人にあの作の深いところが理解出來ないのは是非もないが、斯くの如き批評の不親切さは人間としての良心の問題である。又久保田氏も田中氏も此作の題材を今樣野崎村であると云つてゐるが、あれだけの葛藤は人事現象として殊に家庭の父の前に置かれた出來事として簡單なものではない。むしろ複雜過ぎる位である。善良な、謙遜な、自責の念の強い、デリケートないくらか弱氣なあの家の父（ハウスフアーター）にとつて、あれだけの葛藤は夜も眠れぬ程の心配の充分な種である。人間の當に感ずべきものに感ずる

順常な心（必ずしもデリケートでなくてもいゝ位である。）にとつてあれだけの葛藤はどれだけ恐ろしい重荷であらう。人間の當に感ずべきものに感ずることの出來ない、刺激の爲に痲痺して鈍くなつてゐる心には、異常な皮肉なインテレクチュアルに複雜な興味を刺激する材料でなくては平凡に見えるのであらう、然し心の靜かな者、尋常な者只一個の「人間」である者にとつては必ずしも材料の他異なるを要しない。エキセントリックなるを要しない。近代の心に多くの缺點があるとすれば、此の刺激に痲痺し、感覺的にも、智的にも、複雜なものでなくては興味を感ずることが出來なくなり、人間の當に感ず可きものに感ずる心の鈍くなつた事を其の最も深きものゝ一つとなさなくてはならないであらう。久保田氏は「内にふゝくのがない」と云ひ、田中氏は「觀賞と批判に發達した近代人にとつては堪らない」と云つて居るが、自分はあれだけの葛藤を以て「父の心配」を描くのに充分に複雜であり、且つ事件の取扱ひ方には自分「獨特なるもの」從つて「新らしきもの」が在ると信じてゐる。普通的な如く見ゆる中に、自分特在の微妙な味が含まれてゐるのである。

思想的教養のある心情の素直にしてデリケートな讀者にはあの作の味は理解し難きものではあるまい。あの順作の心境は平凡に見えて、實は中々深いものである。簡單に見えて實は種々な複雑な動亂を經過してからでなくては達することの出來ない從順な境涯である。もとより成吉の如きは順作が遙かに見殘して來た、若き、過ちの多い世界である。一つの、教會と云ふものに對する考へ方等も順作の考へ方は成吉より數轉して後初めて得られた新しき見方である。凡て心境の深さは二轉したものを一轉したものが評する事は出來ない。今の川中氏の如きが順作の心境に達する迄には少くとも三轉も四轉も經た後でなくてはならない。宛も淺瀬の波が淵の靜けさを理解することが出來ない如きものである。

以上に於て自分は「父の心配」に關する川中氏の批評に對して凡そ自分の意見を述べ得たと思ふが、終りに望んで一言云つて置きたいことは其の批評の態度の粗野にして傲慢であり、さかしらであつて獨斷的であり、一言にして盡せば私的であることである。氏の言說の言葉使ひの端々に表はれてゐる皮肉は實に卑しい。何か成心のある批評としか受取れ

ない。自分は田中氏の責任を明らかにする爲にも一度氏の文章中次の一節をこゝに引用して置く。

眞實性のないことを云つたら、道子と松子の會話に依つて語られる成吉の高等學校生活も可成り噴飯である。明治時代の前期ならばいざ知らず、高等學校の生活を味つた人間ならば野球の應援に行くのに白い旗を持つて女子大學の寄宿舍迄道寄り出來るかどうか。その返事を考へる暇はない。誰でも冗談ぢやないと一言のもとに茶化してしまふ、これも作者の「誇張」である。「芝居」である。「笑ひたくなる」玄人じみた（素人じみたの間違いであらう。）書き方である。

これだけの文章の中には、他人に對する如何程の非禮と傲慢と皮肉と嘲笑とを含んでゐるであらう。然も、これらの惡德は全然評者の誤謬の上に立つて犯されてゐるのである。自分はあの作に附與してある年代すなはち明治四十年頃、高等學校の學生であつた時、早稲田と一高との野球の試合の時白い旗を持つて、當時女子大學に居た妹の所に途寄りして校庭で語つたのは確かな事實である。氏がこの事實を間違へたと云ふ事は別に責めるに當ら

ない。只此くの如き自己の過失の上に立つて、他人に對して上記の如き不德を敢てなし得たと云う事實は何と云ふ呪う可きであらう。自分がかく執拗に追究するのは、一般の批評家の態度が、近來著るしく、傲慢で、粗野で、公の態度を缺いてゐるのに對する公憤の爲である。川中氏と云ひ、岡榮一郎氏と云ひ、何と云ふ粗野な批評家であらう。批評家が他人の作に對して自分の意見を發表すると云ふことは素より自由である。然し公衆の前でその人の名を擧げて、その人の作に對する是非の判斷を發表する場合、その作者に對して評者の負ふ倫理的な一つの義務があることを忘れてはならない。それは藝道に立つて公であることである。作者に對する個人的の愛憎によつて、自分の意見を意識的に加減しないことである。公である限りは、批評は辛い程いゝ。併し初めより成心のある、私的な態度より生ずる意識的な辛さは、意識的な甘さと同樣に排斥しなければならない。批評家の態度が私的である限りに於て、その辛さは、作者の人格に對する對人關係の道德の規定を受けなければならない。その限りに於て批評家の批評は自由であることは出來ない。一般に批評家の

見識の下落したことは近來著しいものであるが、それは態度が公である以上は批評家の力量の問題に過ぎないが、その態度が公でないことは道德の問題である。公な、力量ある批評家が出てくれることが今の文壇にどんなに必要なことだらう。その幸の前に喜んで頭を下げることは自分が作家としての希望であり、むしろ幸福である。自分は未熟な作を曲げて辯護することはしないだけの自信は持つてゐる。得心のゆかないことはあつても故意に耳を閉ぢはしない。自分にはむしろ頭を下げたい本能がある。併し、岡氏や田中氏の如き批評家に對しては、その意見に服し難いのは勿論のこと、その態度には道德的に憎惡を抱かずにはゐられない。自分はこの機會に「人間社」同人に對する自分の不滿足をも明らかにして置きたい。その合評に現はれるふやけた人を馬鹿にした、揶揄半分の態度は不眞面である。(恐らく自分がこんなにムキになつて物を云ふのも彼の人々には滑稽に見えるであらう。)そのゴシツプは實にだらしがない。自分は決して四角四面の眞面目さを求めるものでもなく、ユーモアといふものを理解しないのでもない。その點では「潮音」に連載され

てゐる芭蕉俳句研究の合評は立派だと思ふ。眞面目さと、冗談とが實によく調和してゐる。併し「人間社」同人の合評に出る冗談はだらしがないのみならず、又本當の意味でユーモアとも云へない。何となればユーモアの特色はその目的のない、無關心さにあるが「人間社」同人の冗談はある卑怯な目的を持つてゐるからである。殊に「俊寛」と自分の病氣とを結びつけてなされたゴシップ中の數語は人間として實に惡質なものである。せめてその冗談が垢抜けがして居ればいゝのであるが（彼の人々の恃むべきはその點にあるらしく見えるが）あの位の程度の洗練さでは自分の如き田舍者を以てしても、感心するわけには行かない。だらしのないゴシップや、顏見世旅行や、通俗小說や、總て文壇の引き締つた空氣をだらしなくさすやうなことはもつと愼しむべきである。「遊ん」だりすることは遊び方によつては、藝術家としても、人間としてもさまで質の惡いことではないかも知れない。只大切なところで引き締まる神經の利かないのは藝術家として、人間として實に賴りない。遊蕩もするもいゝ。博奕も打つもいゝ（これは「人間社」同人がしたとは云はない）その

他どんなことでもするがいゝ。併し一番大切な或る一つの神經、その大切な神經が鈍い時、それは實に致命傷である。これが自分が今の如き「人間社」同人に一流の作を期待することの出來ないたゞ一つの理由である。自分の云ひたいことはまだ〳〵盡きないが、寸陰を惜しんで仕事をしたいからこれで筆を擱く。最後に只一事だけ云つて置きたい。自分は素より未熟な、才能乏しき藝術家である。人間としても缺點に富み、煩惱も强い。併し自分が藝術に捧げてゐる心、仕事に賭けてゐる犧牲及び人間としてのある一つの一の神經に關してだけは、これだけの言說を敢へてすることが許されるだけの恃みを内に持つてゐる者である。

一九二一、一二、六

父の心配に就いて

「生長する星の群」の正月號に出た武者小路兄の「父の心配」に就いての批評を讀んだ。自分は兄がこの未熟な作をかへり見て呉れ、親切に批評してくれた事を深く感謝する。自分は兄が自分の作を批評してくれた事をそれ自身に名譽に思ふ。他人の作を批評すると云ふ事は兄が興味を持ちさうにない事である。殊にあの忙がしい兄が、兄としては珍らしく細々と批評してくれたのは餘程の好意である。あの作の眞價を明らかにし、いゝ點を見出さうと努めてくれ、しかも缺點は缺點として、はつきりと指摘してくれた事を有難く思ふ。あつさりと、齒に衣を着せず、いくらかユーモアさへ含んで遠慮なく書いてくれたことを氣持よく思ふ。其のこだはらない無邪氣さは、兄の尊い德である。兄の批評から參考になつた点の多い事を感謝する。此れ等は自分の作を將來よりよくするのに役立つであらう。よき友を持つ事は幸福である。自分は得心の行かない点はあつても、かう云ふ批評に對しては心から感謝を捧げる。あの批評にはうなづける点が多いが、併し又兄と自分とでは色々考へ方の違ふ点もある。此の作に就いては「或るプロテスト」の中に種々な點に亘つて、

可成り詳しく書いたから重複する點は成る可く省畧して、主として兄の考へ方や、見方と、自分のそれらと、相違してゐる點のみに就いて、作者としての感想を、一つの制作餘談として書いて見度く思ふ。それによつて作者と讀者との視角の相違や、物の考へ方の種々相違が現はれて、興味があるかと思ふ。

第一に父の性格の解釋である。兄が若しあの題材を取り扱つたなら、父に附與する性格は恐らくもつと積極的で、强く、大膽で且つ將來の運命に對しては樂天的であつたであらうと想像される。自分が附與した性格は、どちらかと云へば消極的な、弱氣な、謙遜な、且つ將來の運命に對しては心配性の性格であつた。こゝらにも兄と自分との性格、趣味、考へ方等の相違が現はれてゐる。例へば第四幕に於いて父は成吉が「肉慾を眞理と取つたり、大事件と取つたりするのを茶かす方が至當である。」と兄は云つてゐる。が自分が考へてゐる父の性格にはさう云ふ態度はふさはしくない。幾らかお人好し過ぎてもやはりあゝ云ふ態度を取らせたい。又成吉が松子と肉の交りをしやうとして出掛ける時に、兄は

「大丈夫だ。やらせてをけ。松子さんを信じろ。」位で澤山であると云つてゐる。然し自分が與へてゐる父の性格からは、さう云ふ言葉はとても出ない。兄の解釋では父は成吉と松子との將來の運命を見拔いてゐる。結婚する事が出來る二人だからどうせ大した事にはならないと高をくゝつてゐる。これは父の現實に對する實際的の智慧である。あの場合事實としてはそれで澤山であつたかも知れない。ほつて置いたにしても、あの通りの結果になつたのである。何となれば、その後の松子と成吉との關係は、父の其の點に關しての注意と、心配とには何の關係もなく、別な出來事で決定されたからである。然し自分が附與した父の性格としては、第一に將來結婚出來るものと決めてかゝる事が出來ない。たとへ結婚出來ても、肉交そのものがよくないと云ふ考へ、其の肉交が二人の愛に及ぼす結果に就いての配慮から放たれる事が出來ない。先きの事はどうなるかわからない。父は母に「事件がどうなるか誰れが知らう」と云つてゐる。此の考へは一方は將來に對する心配でもあり、攝理を頼む安心でもある。自分が事件の結末を外面的な出來事で決定させたのは、（此

の點も兄には不滿足の一つであつたのであるが、此の攝理と云ふ考へからであつたのである。父の心配や、成吉の意志には關係なく、別な力で事件が支配されたのである。此れは考へ方によつては偶然である。然し自分はさう云ふ力を認めるものである。只その力を生かしたのは、人々の道德觀念や、父と道子の信仰の爲であつた。だから父は、結果から云へば無駄な心配をしてゐた事になるが、未來の事に關しては、ひたすら畏れる心に滿ちた考へ方をする性格と運命とを持つてゐる父には、作者としてはあゝさせねばならなかつたのである。兄は又、「父がもつと大きければよかつた」と云つてゐる。兄の心持は解る。自分は一つは歷史物を書くのと違つて、成る可く寫實味を失はないやうに書かうと努めたので、典型的に偉大になる事は避けはしたが、自分等に親しみのある、實際にありさうな父としての、或る「大きさ」は充分に出さうと努めた。その大きさがなくてはあの父は失敗である。がその大きさは兄の考へ方とは可成り違つてゐる種類のものである。こゝは可成り大切な違い目と思ふ。自分の大きさは一口に云へば消極的な大きさである。ものを包容

に堪える大きさである。例へば一つの問に對して「斯く〳〵である」と斷言するのと、「かうではないかしら」と答へるのと何づれが大きいであらうか。前者が大なる場合もあるが後者が大なる場合もある。そして自分が父に與へたのは後者の場合の大きさである。無論斷言できる事は、斷言出來ない事よりよりそれ自身に置いて大すい。然し或る特定の場合に於いては必らずしもさうでない。あかだも凡醫は豫後を的確に斷言するが、名醫は曖昧に云う如き類である。順作が多くの場合自信と權威とを持つてゐないのは、かゝる大きさの爲である。その點でさかしらな母と對立させて父の深さを出さうと努めた。父が母から突つ込まれて、しかもテキパキと權威ある言葉を發し得ない、そしてその原因が母には理解されない處に父の人物の大きさから來る十字架がある。それ以上の大きさを與へる事は、彼に豫言者風の未來を見拔く智慧を與へる事なしには自分には出來なかつた。そしてさうしては自分の作意に適合しないものとなるであらう。然し自分は隨處に順作をして一種の

權威ある言葉を發せしめてゐるつもりである。（只その權威が總て消極的なものに屬してゐる。）凡庸な父では云へない言葉が、實感を持つて云はせてあるつもりである。父は「きまりきつた事しか云はない」のでなく、自分でなくては出ない自分の實感と體驗に根を置いた深い言葉を云はしてあるつもりである。只その深さが一周りして、外面的には元の立場、尋常な、從順な一見ありふれた境地に立ち返つてゐるのである。例へば教會に對する順作の考へ方は教會を離れたものが、再び教會を認めた別の考へ方である。自分はかゝる考へ方の深さに達してゐる人は少ないと今でも思つてゐる。順作のオルソドクシカルな信仰も、勿論普通の正統派とは違つた、カソリックや普通の新教や、又新人の異教徒主義とも違つた、それらより一層深いものである。それが外見的には、普通の教會的牧師の如く見えるのである。此れ等の意味で自分は兄があの作の深さに關して持つてゐられる値踏みには或る不滿を感じるものである。一體にあの作の持つ深さ及び大きさは兄には同感し難き種類に屬する事を感ずる。然しそれは、兄と自分との性格の差違である。又自分が狙つ

た點はそこにあつても、自分の獨合點で、讀者にわかるやうに書けてゐなければ、讀者に呑み込めないのは當然である。其の點では自分の未熟と、力の不足を感じないわけにゆかない。只自分の狙つた深さと、大きさは何處にあるかと云ふ事をはつきりさせてだけ置きたい。

次ぎに兄は第四幕の成吉が肉體の交りをしやうとして出て行くのは「不自然」であると云ひ、「あゝ眞劍になり過ぎた時肉慾は起り得ない。」と云つてゐる。が、あれは性慾を感じた爲に、肉體の交りをしやうと思つてゐるのではないのである。肉交をしなければならないと信じて、戀愛の一つのゾルレンとして肉交をしやうと思つてゐるのである。あの場合その機會がたとへ與へられても、肉交は生理的に出來なかつたであらう。實は此れは自分の昔の經驗である。そこに成吉の純潔さが現はれてゐる。その純潔さの爲に、成吉は内に恐れを感じないので、却つて誇張に陷つてゐる形である。だから成吉の力んでゐるのは或る意味で馬鹿氣てゐる事も作者は知つてゐるのである。

(性慾の問題に就いての成吉の思想は自分が高等學校時代にあの成吉に劣らぬ情熱を持つて、眞理であると信じてゐた思想である。故に自分は自分の心を昔に返す事によつて、可成り自然に成吉の氣持ちになる事が出來た。然し思索と體驗との違ふ武者小路兄が成吉の思想に同化出來ない爲に、時々皮肉な感じがしたと云ふのは無理はない。あれは自分の「異性の内に自己を見出さんとする心」を讀んでくれた人には成吉の誇張であつて、作者の誇張でない事が解るであらう。又順作の性慾に關する思想は「地上の男女」を書いた頃の自分の思想であつて、今の自分の考へとは可成り違つてゐる、今の思想に就いては、別に近き將來に詳しく感想を書きたいと思つてゐる。此の點も兄が順作の思想に物足りなさを感じたのは無理はない。)此れらは作者の實感が、あまり特殊的で生々してゐる爲に讀者には解つてゐて貰へるやうな氣がしてあまり暗示を省き過ぎた勢と思ふ。その爲に讀者には解らないのであらうと思ふ。此れは自分の一つの手落かも知れない。此れと同じ事は第二幕の汽車である。此れは可成り興味のある作者心理と、讀者心理との差違であると思ふ

から少し詳しく書いて見やう。自分は廿二、三の時學校を欠席して、岡山の六高にゐる友人の下宿で一年暮した。その時はまだ健康で青春の惱みと、喜びの最中、恰も成吉の如き氣持の頃であつた。岡山ステーションの直ぐ傍の「みよしの」と云ふカフェに友と二人で出掛けては、青春らしい空氣に浸つてゐた。ビールを飮んでは、哲學や、文學を談じた。そのカフェに美しい二人の娘があつて夜の更ける迄よく話した。その時窓の外を汽笛の音が聞えて、時々汽車の通る音がするのが實に早春らしい、そのくせ寂しみのある、人生味を感じさせるのであつた。藤村の「春」の中にある、旅に倦んだ旅客の眠つてゐる汽車の中の光景や、窓ガラスに顏を當てゝ、上野から旅に出る青年が、凝つと考へてゐる所などが、その音を聞いたゞけで、生々と思ひ浮べられて、ある人生の永い氣持が起るのであつた。自分は此れだけの背景を心の中に持つてあの場に汽車の音をさせたのである。だから自分には生々と美しい感じが起るのであるが、或る程讀者には同感出來ないのは無理はない。自分の通りに感ぜよと要求するのは、むしろ無理かも知れない。自分は何の暗示も書き添

へてゐないのだから。作者の心理と、讀者の心理とはそれ程違ふのである事を今更乍ら感じないわけに行かない。あれは恐らく自分の手落であらう。只かう云ふ事だけは云つて置きたい。自分は筋だけでなくシーンに心を惹かれる。筋に關係なくとも、アトモスフエアを書く爲には色々なものを使用する。それが失敗すれば嫌味になるが、成功すれば空氣が浮き上る。武者小路兄と自分ではその點が少し違ふのではないかと思ふ。その爲に餘計に、無意味に感じられたのではないかと思ふ。然しそれにしてもあの汽車は恐らく成功してゐないであらう。あの汽車に就いての兄の想像は違つてゐるが、成る程讀者としてはあの汽車は不思議に思へるであらう。自分は兄の批評を讀んで始めてその點に氣がついた。此れは今後自分の創作する時のよい參考になつた事を感謝する。

松子は自分もよく書けてゐないと思ふ。素直な、普通の女で特色がないため書きにくかつた。

民子は作者としては愛を持つて書かうと意識的に隨分努力し、其の努力の痕は隨處に出

てゐるとは思ふが、矢張り愛が足りなかつたのであらう。少し世俗的に書き過ぎたかも知れない。そして繼母らしさが典型的になり過ぎた所も確かにある。殊に第四幕で小山の家族が來てから後の民子が一番書けてゐない。此れはあの場で父を生かす爲に母が犧牲にされたのであるが、自分の力の不足である事は免れない。あの自動車もたしかに早く來過ぎたであらう。

成吉と父との議論が力が弱いと兄は云つてゐる。父の議論の弱い原因は前に述べた通りであるが、成吉の議論が父に對して弱いのは、母に對してあれだけ反抗的に書いたので、一方從順な、尊敬すべきものにはハンブルな性質を出したいと思つた爲である。父の內氣な性質に對する或る遠慮も書きたかつた。若し父に對して强い議論をさせると、成吉の性格が誇張と、生意氣一方になる事を虞れたのである。

父の心配と云ふ題目に就いての解釋は、兄と自分とは違ふらしい。兄は「見透しを付けて心配してゐる」ものと解釋してゐるが、自分のは見透しを付けることの出來ない父の心

配である。先の事はどうなるか人間には解らないと考へ、ひたすら恐れる境涯にゐる父の心配を書くのが作意である。だから民子も成吉も「父の力の及ばない所に乗り出し」てゐるのである。未來の運命に關しては民子と同じレヴェルに立つて心配してゐるのである。只第四幕の初めに父が民子に云つてゐるやうに深い所では安心してゐられる、乃はち事件がどんなに成るにしても神の計劃以外には出ない。從つてどんなになつても、（道子は失戀し、成吉と松子は肉体の交りをしても）、それを生かす道はある。そして どんな攝理が現はれて、事件が解決されるかも知れない、と云ふ信仰と、依頼を持つてゐる點に於て、父は民子や成吉と違つてゐる。從つて自分の作意ではあゝ書いた方が脚本の題にふさはしいのである。心配と云ふ字は自分は（Care と云ふつもりであつた。一体に父に現實問題を取扱う實際的の智略がないのは作者自身の人格の特色でもあり、缺点でもあるのであるが、兄にはさぞ不満足であつたらうと想像出來る。實際兄には現實の問題にぶつかつて、此れを生かし、解決する優れた智慧がある。此れは自分の及び難い點である。實際問題を取扱

ふにはゾルレンだけでは不充分である。對手を見拔き、成り行きを洞察し、臨機應變の處置を取らなければならない。此れは自分の最も不得意な點である。キリストや、一休や、禪宗の傑僧達にはその智略がある。殊にキリストはかゝる智慧で光つてゐる。兄が一方村の如き仕事が出來るのはその尊い智慧の爲である。「布施太子の入山」の布施太子に就いても同じことが云へると思ふ。兄があの布施太子にあき足りない氣持も察することが出來る。此れは兄の尊い天分であつて、益々磨いて貰いたいが、一方その智慧は現實に、泥み、ゾルレンを不純にし、最深、最高の絕對境、或は最後の理想世界、極樂淨土と云ふが如きものに對する理念を卑近にする危險を伴つてゐることは免れない。此の危險は無論兄は氣が付いてゐるに相違ない。兄は現實と理想との融合點を巧みに、捕へることの出來る珍らしい智慧者であると思ふ。人にはそれぞれ天分と特色とがある。又置かれた境遇と、課せられた運命の差違がある。そこから使命の差違が自ら生じて來るのであらう。自分達は各々與へられた特色を生かして、自分の使命を成就して行かねばならぬと思ふ。

第四幕で小山夫人が、道子をマリヤのやうだと云つて褒める所は、自分の趣味では、あれでいゝと思つてゐる。人を目の前で褒めるのは多くの場合いゝものではないが、年長けたものが幼いものに對して褒めてやる言葉をかけてやるのは人間らしい優しい愛が出て、美くしく生きる場合もある。子供に「よく書けましたね」と云つて清書を褒めてやるやうな氣持である。小山夫人は道子を前から特別に愛して居り、(第三幕で松子との對話にそのことを暗示して置いた。)年もまるで違つて「愛すべき、小さきもの」と云ふ氣持である。それにあの場合にはその褒める言葉を出す事を小山夫人は出來るだけ抑制し、感情的になるまいとして努力してゐることを充分に暗示した後で「一口だけ褒めた」のである。彼處は優しい、いゝ感じが出てゐると自分の趣味では今でも思つてゐる。然し一体に沈默を生かすことが充分でないと兄が云つてくれたのは私は首肯する。此れは確かに今後の自分が心掛けねばならない大事な点と思ふ。自分は兄の如き對手と對談する時は沈默を生かせるが、一般の讀者に對しては解つてくれるか、どうか不安なので老婆親切になり過ぎる。併

しこれは讀者を自分と同等以上のレヴエルに置いて書くべきであると今更に新しく感じる。此の事を心掛ける事によつて、今後の自分の作は屹度もつと、澁味と辛味とを增すことが出來るであらうと信じてゐる。尤も言葉が出すぎると云ふ点に就いては、兄と自分との性格の差違もあるであらう。感情に就いては、兄は淡白で、きつぱりした關東風であるが、自分は少し纒綿とした關西風である。兄の趣味はで自分の感情は少し女性的に見えるかも知れない。自分は兄に少しワイブリッヒのゲミユートの不足を感じる。これは日蓮と、法然との文章のスタイルが違ふやうに止むを得ないことであるかも知れない。然しそれにしても自分のものには尙沈默を生かす餘地があることは自分も首肯する。心掛けて行きたいと心から願つてゐる。又「クライマツクスが男性的になりにくゝ、調和の仕方がまだ不安定な所がある」と兄が云ふのも自分は肯く。此の点は自分も氣が付いてゐるので、今や自分の生活に一轉期を劃してもつと積極的に、生き〳〵と、男性的に生きて行く生活法を立てんとしてゐる。そして出來得る限り肯定的な、積極的な、生かし得るものは悉く生かし

た所で調和を求めるやうにしたいと發願してゐる。此の点に就いては、別に「積極の道」と云ふ論文で自分の思索の過程を詳しく書いた。自分は兄に感謝の意を表する爲に序に此處に書いておくが、自分がその新しい積極的な生活法に轉じる直接な機緣となつたものは自分が「新しき村」の批評を書いた事と、兄が「篝火」に書いた短い詩を讀んだ事であつた。その詩は「三つの愛一つに燃え上がれ、神への愛、隣人への愛、生命への愛」と云ふのであつた。自分はこれまで、神への愛、隣人への愛を主張する餘り、生命への愛を等閑に附してゐた。兄が云ふやうに、この三つの愛が一つに燃え上る所に本當の積極的な調和が見出されねばならない。これ迄の自分の生活從つて、創作に或る力弱さと、消極的な所があつたとすれば、自分の生活法の此の缺陷の爲であつた。今後はもつと強い、積極的な生活法に入り、もつと積極的な作を書いて行きたく思ふ。そしてさう云ふ意味での氣に入つた作が出來た時に、兄に捧げたいと思ふ。兄もそれを喜んで受けてくれるであらうと信じてゐる。

「自分は此の作は現代物なので、寫實的に書かうとした爲に、歴史物の場合のやうに、自分の力を充分に出し切れなかつた氣もする。自分の内にある最深、最強のリズムを生かし切る手法を現代物ではまだ充分に會得してゐない。若し同じ手法を用ふれば、恐らく誇張された不自然なものとなるであらう　自分は現代物で寫實的に書き乍ら、然かも自分の内の一番大切なエレメントを生かし切れる手法を今一生懸命に研究してゐる所である。

兄は自分の作が廣く讀まれるのは「缺點の勢ばかりでは決してない。」と云つて、それを自分の藝術的天分と、本氣さと、聰明さとに歸してゐてくれる。が、缺點の勢で廣く讀まれる點もあるとすれば、それはどう云ふ點であらうか。これは自分として、眞面目に考へて見なければならない事である。自分は反省の後、自分の作のロマンティックな點と、感情的な點と、及び思想的な點とに想到した。その外には、自分には缺點が廣く讀ませる原因となりさうな點は思ひ當らない。ロマンティックで、感情的であれば、青年や婦人の心を惹き易く、又思想的であれば藝術的鑑賞からでなく、智識階級の讀者に迎へられるかも

知れない。

がこれらはその素質自身が惡いのでなく、それは寧ろ藝術家に取つて、大切な素質であつて、それが正しく生かされた時には、自分の作家としての優れた特色となるものであらう。然しそれが正しく生かされなかつた時には作を甘くし、涙もろくし、且つ概念的にするであらう。成る程自分にはさういふ危險があるかも知れない。此等の點に就ては、是迄もかなり鋭い神經をはたらかせて來たつもりではあるが、今後は一層警戒を嚴にせねばならないと思ふ。自分が藝術家としてこれらの素質を如何に生かすかと云ふことは、自分の將來にかゝる大切な問題である。武者小路兄はさういふ危險から珍らしく自由な作家である。兄には甘くなつたり、嫌味に陷つたり、實感でない感想をくごく書いたりする危險は絕對にないと云つてもいゝ。そこに兄の尊い特色がある。その代り自分の趣味では、もつと敍情詩的な空氣と、潤ひとが欲しく思ふ。然し、藝術家は自分の特色を生かすのが賢い道である。そしてそこに個性の變化と、面白味とがあるのであらう。自分としては、自

分の素質を正しく生かすこと、もつと澁さと、辛さと、簡素さとを修業して、自分の素質が缺點とならないやうに努力して行きたいと思つてゐる。その點に就いても、いつか兄に感心し切つて貰へるやうな傑作を書いて捧げたく思つてゐる。自分は兄が新しき村の事業を完成すると共に、藝術家としても益々自分の特色を生かし切つて、立派な作を書いてくれる事を心から祈る。そして自分の生活に於ても、仕事に於いても、永久によき友であつてくれ、又、自分をその一人として認めてくれることを祈るものである。

（一九二二・三・五）

積極道

私は一昨年秋新しき村に就いての批評を「合掌」と云ふ雑誌に書いた。が、其の直ぐ後に、一つはその批評を書いた事が機縁となつて、一つの新しい考へ方が自分に啓けて來た。此の考へ方は多くの人々に取つては、別に珍らしいものではなく、又私自身に取つても全然新しいものではないが、それが強い力を持つて、フレッシュな生々しさで、且つ意識的に自分に感じられるやうになつたのである。總て考へ方と云ふものは、一度意識的になり、特に其の點に關して潑溂とした感じをもつて肯定する心的經驗の生じた時に、初めてその考へ方を把握したと云ふことが出來る。即ち禪宗などの所謂悟つたと云ふ氣持、キリスト教の眼から鱗が落ちたと云ふ意識である。その時初めて、概念でなく、眞實に自分の會得として、その考へ方が自分の所有となるのである。人間の智慧はさう云ふ仕方に於てのみ進み、新しい視野が展けるのである。玆に書く私の考へ方も、概念的には少しも新しいものではないが、その時の私に取つては、一つの大きな悟得で有つた。それは私の人生觀に一つの轉機を與へ、物の見方に新しい光を投げる程のものであつた。私のやうに善惡共に、

自分の體驗から得た眞理によつて、忠實に生きやうと心掛けてゐる者にとつては、自分の生活のあらゆるもの、日常生活のごんな小さい端々に至る迄も、その一つの悟得から影響を受けるのである。自分はその眼で新しき村を見直した時に、それ迄理解出來なかつた點が理解出來るやうになつた。あの批評にはその重要な視點が缺けてゐた。自分はこゝでその點を補ひ、その考へ方から自分の生活法に及んで來た變化に就いてこゝに書いて見度いと思ふ。一見珍らしくないやうであつても、それがほんたうの實感から出たものである以上殊に私のやうに日常生活迄直ちにそれによつて變化を生じてくるやうな生き方をする者の生き行く道の歩みとして、或る生きた力と意味とを持つてゐるだらうと自分には思はれるからである。

其の自分にとつて新らしき見方と云ふのは一言にして盡せば積極の道である。積極的な眼をもつて、此の世界を觀じ、物を考へ、生活法を立てる事である。私があの批評で用ひた原理は、新しき村を一つの天國と見て今の新しき村が其の天國の理想に適つてゐるかど

うかと云ふ點を吟味したのであつた。天國と云ふ概念は、私に取つては「罪なき國」であつた。即ち私に取つて新しき村は各人が罪を造らないで暮す爲の團體であつた。故に私の批評は只新しき村の生き方には罪は含まれてゐないか、若し含まれてゐるとすればどの程度迄他の社會と比べて罪を含む事が少ないか、そしてそれは罪なき國、天國と比べてどれ程の高さにあるかと云ふ事の吟味であつた。併し武者小路兄の根本の考へ方は、私の考へ方とは違つてゐる事に初めて氣がついた。それによれば、新しき村は各人が與へられた生命即ち天命を出來得る限り全くする爲の團體であつた。「罪を造らぬ爲」と云ふ事と「天命を全うする爲」と云ふ事とは、多くの相違する點を持つてゐる。假令事實として一致してゐる點も、その事實を生んだ考へ方は違つてゐる。即ち私の考へ方では新しき村は出來得る限り罪から逃れる事を努むべきであるが、武者小路兄に取つては出來得る限り自分を生かす事を努む可きである。後者にあつては罪を造りさへせねばいゝのではない。其の他に與へられたものを生かさなくてはならない。否、與へられたものを生かすのが目的である

が、只それを罪を造らずに生かしたいと願ふのである。罪を犯さない爲には、吾々は消極的な道を選ぶだけ安全である。即ち密室に閉ぢ籠つて祈禱ばかりして惡魔の入り込む隙のない生活法を選ぶのが最も賢い。此の目的のみより云へば、隱者の生活やトラピストの如き修道院や、又一燈園の如く出來得る限り自分の慾望を抑制して、只神と他人への奉仕のみに生きる生活法が安全なのは云ふ迄もない。併し後者にあつては、與へられた慾望を生かさなくてはならない。罪を造らなくても與へられた天命の或る部分を殺しては其の目的に適はない。事實に於て、殺さなくても、自分の慾望を殺して他人に仕へると云ふ考へ方其のものが既に其の目的と反してゐる。自分を捨てる十字架道或は捨身道が、事實として自己を生かす道であつても、斯く考へる考へ方そのものが既にその理想と背反してゐる。精神生活に於ては此の事は決して小さい事ではない。自分は新しき村を批評した時前者の原理を適用した。これは不充分であつたと云はなければならない。改めて後者の考へ方に立つ時、種々な點が自分にははつきりして來る氣がする。自分はこゝに新しき見方から村

を批評した結果を書くのが目的ではない。其れは他の機會に讓つて、こゝでは其の後者の考へ方の眞理と、其の根據とをはつきりさせたいと思ふのである。私の生活法はこれ迄前者に屬するものであつたが、その不充分である事を感じないわけには行かない。卽ち生を享けた者の生き行く道として、後者の道の方がふさはしきものであり、捨身道からははみ出る內容がある事を明らかにしたいのである。私の生活が一昨年の末以來變化を生じて來たとすれば、自分の生活に或る出來事が起つたと云ふ外面的な原因の他に、此の新しき悟得と云ふ思索的の原因の爲である。

我々は生きて居る。此の事實は何と云つても我々に一番直接な、一番はつきりした、且つ他のものによつて證明される必要を感じない事實である。そして此の事實はそれ自身已に積極的サムシングである。此の積極的と私が云ふ感じは實はいたつて大切なものである。そして後の者が、より內面的であり、根本的である。凡ての人生觀、凡ての物の見方、考へ方は積極的でなくてはならない。「或一つの人生觀が厭世觀であることは、それが厭世觀である故に間違ひである。」と云ふ如き考へ方は深い

眞理を含んで居る。此の氣持が體感出來る人は私がこゝに云ふ積極的と云ふ氣持が理解できる人である。私はこゝにさう云ふ氣持の根據の上に立つて考へる時、我々の生きて行くべき道、生活法は如何なるものとならなければならないかを考察して見たいと思ふ。その新しき生活法に從つて、私は、今後、一層の勇氣と決心とを以て生きて行きたいからである。

凡てのものはなるべく肯定するのが本道である。否定する時にでも、何ものかを肯定する爲の否定でなくてはならない。否定せんがための否定は外道である。一つの自殺である。空虛である。此の事は自明の事で且些末事の如くに見えるが、實は深い、大きな、公なものにつながつてゐる眞理である。（本道と外道參照）云ふまでもなく、安價な肯定がいゝと云ふのではない。其の意味でなら、根本的な考へ方をする人、頭腦の鋭い人、妥協を許さない純粹な人ほど一方多くのものを否定する。釋迦、キリスト、トルストイ、ショウペンハウエル等皆さうである。併し彼等が勇猛に否定したのは、或る一つの無くてならぬも

のを肯定したい一つの積極的の念願のためであつた。ショウペンハウエルの如き厭世的と云はれてゐる哲學者も、實は一つの樂天觀に終つてゐる。即ち愛と認識とに依つて、意志から解脱した自由の世界を立てゝ居る。彼が聖フランシスをあれほど讃めて居るのを見ても解る。凡て此世に存在して居るものは何ものかから、存在を許されて居ればこそ存在して居るのである、聖書的に云はゞ造り主がよしと見て造つたから、存在してゐるのである、と我々は考へたい。これは實にハンブルな、深い、公けな考へ方であつて、被造物が造物主に對して起す感情の中で、一番忠實なものと云つていゝ。此の氣持は藝術には無論のこと、宗敎にも、道德にも、缺くべからざる重要な氣持である。其の意味に於ては、此の世に一つとして絕對的に否定すべきもの、即ちそれを否定しなければ此の世界が調和したものであり得ないと云ふが如きものは存在しない筈である。そこに深い安心立命が得られはしないであらうか。殺生や、姦淫や、弱肉强食の現象や、善が滅び、惡が榮えるやうに見える世相や、自然對生命の冷淡な機械的な出來事や、又樣々な經濟的な束縛(二物同時に同

所を占むることが出來ない、と云ふ約束から生ずる凡ての數量的なる限界の意識）等もそれが既に存在してゐる限りは、それだけの意味があり、それらのものを持ちながらも、尚世界は調和したものであるのを妨げないと云ふ信仰に立ちたい。恐らく此の信仰に立ち得るまでは、本當の安心立命は得られないであらう。併しながら云ふまでもなく、かゝる禍惡がそれ自身によいものであると云ふのではない。それ自身に肯定さる可きものと云ふのではない。それ自身には、依然として禍惡であつて、飽く迄も嚴しく否定されねばならない。蛇が蛙を食ふのはどうしても、一つの禍ひなる現象としか思へない。其の現象を直ちによしと見ることは出來ない。かゝる現象のないことを願はずには居られない。併しそれだからと云つて、此の現象にはそれが已に存在してゐる以上は、何等かの存在の權利、即ち其の現象が存在したことを造り主が許した、——從つて其の現象には何等かの宇宙的意義がある——のであつて、かゝる現象はあつても、依然として此の世界は調和したものである、從つて蛇に食はれた蛙も、どこかで浮ぶ瀬はあるのである、と云ふが如き意味での肯定

の氣持を保ちたい。私はどこまでも否定すべきものは一點、一劃の微に至るまで否定したい。併しそれはどこまでも肯定のためでありたい。かういふ氣持は、上述の如き根本的な問題に就いてのみならず、日常生活の些々たる出來事に就いての考へ方、一寸した議論、會話の末に到る迄にじみ出て、我々の日常生活を或は明るくし、或は暗くする。その意味に於ては、自分は明るさのあるのが本道と思ふ。深いところから出た明るさ、天から照らされて生じた明るさは、陰鬱と云ふ感じよりも一層高いものである。併しながら、云ふまでもなく、それは輕薄、呑氣、すほらと云ふ如き感じとは違ふ。かゝる感じは陰鬱よりも尚惡い。それはこの人生の禍ひが日に見えない程愛が乏しいか、頭が鈍いかより生じるものだからである。愛が深く、頭の鋭い人が、此の世の不調和を見て、暗くなるのは本當に無理がないからである。併し一番惡いのは、暗さの爲に暗さを好むことである。これは實に地獄の感じである。明るくなりたく一生懸命願ひながら、然かも明るくなれないで、暗い顏をしてる人には、同情を感じる。が趣味として暗さを好むものに同情することは出來な

い。それは外道である。一番尊いのは天來の明るさである。レッシングの如きはかゝる人である。私がレッシングに一番感心するのは其の點である。その明るさから、色々の尊い徳が生れ出てゐる。我々は明るくなりたいと願ひながら、暗くなり勝な人間である。然し明るさを愛する氣持を失つてはならない。ショーペンハウエルがフランシスを賞めてゐる氣持は實に尊い。その點では私はフランシスの方が、トルストイよりも惠まれた、ブレッスされた人の氣がする。矢張り光は暗よりも尊く、積極は消極よりも自然であり、肯定は否定よりも公けである。哲學や、宗教で、絶對を云ひ現はすのに否定の言葉を用ひたのは、云ふ迄もなく、此の個々の有限なるものをもつて、云ひ現はす事が出來ない爲めに、その無限なる感じを暗示的に云ひ表はさうとした爲めであつて、それ自身否定のためではない。

そもそも生を享けた者の一番本當の生き方は、この世界を觀じて、その意志を洞察し、その意志に從順に生きることである。何人も——聖人も、英雄も、天才もこの世界の運行、造化の意志に背反して生きることは出來ない。かゝる生活法は必ず報ひを受けるであらう。

そして世界の運行乃至造化の意志はそれ自身積極的なものでなくてはならない。このことは説明を要しない。この世界が現出してゐるといふ事實が既にその根據である。我々は最初の出發點を此處に置かなくてはならない。故に我々にとつて生活の內容となるものは與へられたるものである。それこそ生活の材料（シュトッフ）である。我々は先つこの材料を肯定することから初めなくてはならない。然しながらこの素材は可能性の形に於いて、造化から與へられてゐる。即ち始めよりその完全なる全體を現はさずして、次第にその內存的（インマネント）なる含蓄を分化發展して行く可きものとして與へられてゐる。即ち生命の內容を成すものは方向を附せられたる可能性の形に於ける與材である。この與材が、附せられたる方向に次第にそれ自らを分化發展して行くのが生命の根本方式であつて、世界の運行である。造化の意志である。そこに最も徹底せる、進化論、或は文化論の最後の根據がある。人類の文化の歷史はその過程である。かゝる考へ方に立つ時、我々は罪を造らぬやうに生きるといふよりも、天命を全ふするやうに生きるといふ心持の方が、一層この世界の運行に副ひ、造化の意志

に適ふ生活法であると考へないわけには行かない。只罪を避けんが爲に與へられたるものを發展せしめないならば、造化の意志に適はないものと云はなくてはならない。然しながら與へられたるものを生かす事と、罪を造らぬ事とは果して兩立し得るであらうか。こゝに我々の前に困難な問題が課せられるのである。ギリシャ主義とキリスト教主義との背反が生じて來る。現實の問題に當つては殆んど事々にこの二つは衝突するやうに見える。我々はあのギリシャの文化を讃美しないわけには行かないにもかゝはらず、その文化を生むに缺ぐことの出來なかつた奴隷制度を非難しないわけには行かないのである。例へば今こゝに一つの劇を上演しやうとするとする。その場合には、その演劇を出來得る限り藝術的に完全なものにしたいと云ふ願望は、それ自身には正しいものと考へないわけにはゆかない。然し其の爲の只一つの條件、例へば舞臺裝置を出來得る限り完全なものにしたいと云ふ願望は、我々の隣人に飢ゑたる者がある事を傍觀することなしには成就出來ないのである。しかも飢ゑたる者の一人でも存在してゐる限りは演劇は中止す可きであらうか。或は

舞臺裝置を不完全なるまゝにて滿足す可きであらうか。これは只一つの例に過ぎないが、日常生活の總ての點に行き亘つて生ずる困難な問題である。私が一燈園の生活に堪へる事の出來なかつたのもこの問題の爲であつた。私はその頃或る日都踊を見てそれを美しいと思はないわけにはゆかなかつた。都踊をこの世界に存在した方がいゝものと思はないわけにゆかなかつた。然し西田氏は その都踊といふ現象が生じ得る爲に必要なる多くの罪惡を擧げて、それらのものが無くならない限りは、都踊の存在を祝福することが出來ないといふ意見であつた。氏はその例として、例へば火事が起つてゐる間は先づ火を消すことを初めにし、花見は後廻しにしなければならないと云つた。併し、火を消す事が出來ない間は美を樂しむ事が出來ないとすれば、若し生きてゐる間に火を消すことが出來ないならばごうであるか。西田氏はそこが殉教者の十字架道であると云はれた。私はその問題でかなり深く苦しんだ。併し遂にその說に滿足することが出來なかつたのである。私は結局火を消し乍ら、花見をする二元の道をとらなければならなかつた。 それを人間の取るべき自然の道と思は

ないわけに行かなかつたのである。私はこの二つの願ひをそれ自身に矛盾す可き筈のものでない正しき願ひとして肯定する。故に此の二つの願望は同時に滿たさる可き筈のものである。滿たされる世界(時代)がなくてはならない。かゝる世界(時代)の實現の可能を信じないではゐられない。併しそれは如何なる方法に依つて、何時實現せられるであらうか。そこに人々の世界觀乃至人生觀の相違が起る。私一個はかゝる世界(時代)は個人にとつては死後の世界あの世に於いて、人類にとつては、永遠の未來に於いてのみ實現されるものと觀じる。故に私にとつては、火を消して後に花を見る生活法は、花見を斷念することを意味する。そしてこの事は自分には斷念出來ないのみならず、斷念すべきものと思へないのである。この世界の運行は、火事と花見とを同時に含み乍ら、而かも次第に火事を鎭めて、花見のみを存在せしめる世界に向つて近づきつゝある過程と觀じる。我等この世界に生を享けたる人間(モータル)はこの矛盾と戰ひ乍ら生き行く可き、限られたるものと觀ずる。併しいつかは無限なる者となる可能性を與へられ、火宅を去つて永遠の樂土に達し得べきものと觀ずる。これ

は素よりたゞ自分がかく觀ずるのであつて證據はない。かく觀ずる時、この世界が私にとつては最も合理的に感じられるといふに過ぎない。(併しそれ以上の根據が何人の人生觀に於てあるであらう。)併し兎も角も私がかく觀ずる以上、私はそのアンシャウウングに適合した生活法を立てなければならない。故に私は火を消しつゝ、花を見る生活法を選んで一燈園を去つたのである。その後に至つて私は益々一燈園の如く、自分の慾望を捨てゝ神と他人とに奉仕する犧牲道乃至十字架道の生活法が人間の當にとる可き生活法として不充分であり、無理を含んでゐることを感じるやうになつて來た。無理とは何であるか。世界の運行、造化の意志に對する人爲的なる不適合である。計らひである。その無理がある限り、我々は復酬を受け、生活の安定を得る事が出來ない。人間の、一般に被造物の最も從順な生き方は與へられたる生命を感謝して享け、その可能性を出來得る限り發展せしめることである。その一部分をも殺すことは無理である。その可能性が完全に實現される迄は矛盾と衝突のあることは免れない。與へられたるものを當に到る可きものに發展せしむる

道、即ち最も深き文化主義こそ被造物の本道であつて、與へられたるものゝ一部をも殺す事は本道でない。かゝる積極的本道はこの宇宙の意志に最も適合せるものであつて、又この世界をして其の當に達すべき世界に達せしむる最も近き道である。我々の當に達すべき世界は、この世界の中に含まるゝよきものを悉く具有し乍ら、其の最後の段階に迄到達したるものでなくてはならない。人間が當に追ひ求む可きものゝ一つをも逸してはならない。罪なき世界と云ふのみにては理想世界として不充分である。各員が爭はざる世界と云ふのみにても不充分である。疾病や、饑餓の無き世界と云ふのみにても不充分である。我等の追ふ可きもの、眞、善、美の總ての要素が具有された世界でなければならない。生命が其の内に有する總ての可能性を最大限度迄、分化發展せしめたる世界でなければならない。我々は創造主の偉大なる構圖、造化の最後の意匠を想像して見なければならない。貧弱にして、消極的なる平和世界は、豐富にして積極的なる爭闘の世界より果して造化の意志に適ふであらうか。私はさう思へない。より大なるもの、より強きもの、より美しきものを造

り出さんとする意志は確かに此の世界の一つの意志である。若しその爲に或ろ爭鬪が止むを得ないならば、假令その爭鬪を認めても、尙その意志を全然拒斥するよりは造化の心に適ひはしないであらうか。素よりその爭鬪は克服せらる可きものであつて、理想世界に於いては存在を許されざるものであり、その爭鬪を消滅せしめんとするも亦世界の一つの意志である。我々の取るべき道は不調和を含み乍ら、次第に調和に達す可き道である。火事を消しつゝ花見をする道である。從つて火事を傍觀して、花に見惚れる瞬間も當然含まるゝが如き道である。私は嚴密に考へる時、かゝる瞬間を許さずしては、私の生活法を立てることが出來ない。立てるに堪へないのみならず、立つべからざるものと思ふのである。無論私は火事を消さないと云ふのではない。一生懸命火事も消したい。併し見惚れて花も賞でないではゐられない。例へば畫家が美しき繪を描かんとして努力してゐる時に、病める乞食が施しを求めに來たとする。畫家はその乞食を憐まないわけに行かないであらう。併し又繪も描かないではゐられないであらう。此の時畫家は如何にすべきであらうか。若

し繪筆を投じて、乞食に奉仕せんとするならば、その奉仕の道に徹せんとするならば、彼は繪を描く事を斷念さねばならないであらう。何となればその一人の病める乞食を幸福ならしむる爲のみに一生を捧げても尚及ばないのに、かゝる種類のあらゆる問題を際限なく作ない來るからである。併し此の世に一人でも病める乞食のある間は、繪を描く可きでないのであらうか。此の場合美を求める人間の心をよいものでないとは考へられないであらう。その畫家が本當の畫家であればあるだけ、繪を描く事を一つの奉仕として考へる根據をも心の内に感ずるであらう。私は結局其の畫家が、心からその乞食を憐みながらも、或る程度の奉仕を（例へば金を惠み、宿を與へる等）なすに止め、再び繪筆を取るに到る心理を認めないわけに行かない。畫家はそれに依つて心を惱まされるであらう。かゝる乞食を救濟する機關の設立、かゝる乞食を生まない社會制度の改造、或はかゝる乞食をも攝取する宗教等に就いて心から考へるであらう。併し再び繪筆を取つて製作に沒頭する瞬間に吸收されるであらう。こゝに問題が横たはる。私は此の問題に不斷に惱まされてゐる。私

ば此の問題を今だに確信を持つて解決し得てはゐない。併しその畫家の取りたる如き道を已むを得ないものとして、是認しないわけに行かないものである。此れに類する問題は日常生活の事々に當つて逢着する。その度毎に私は煩悶と、晦澁とを感ずる。窮屈と、不自由とに縛られて身動きの出來ない氣がする。それが私の生活から生々しさをごの位削ぐか知れない。私は此　窮屈な天地に跼蹐して魘されるやうな氣持で長い間暮して來た。が、今や私はもつと生々した、自由の世界に出たい。潑剌とした天地に呼吸したい。もつと積極的な視野を開拓したい。新しい勇氣を奮つて積極道に蹈み出したいのである。此の積極道を蹈み出すには、強き意志と、決心とが要る。性格の強さに於いて未だ充分の自信を持たない私にはかなりの精進と、鞭撻とが要る。此の道は涙脆き善人の蹈む道でなくして、實に強固なる超人の蹈む道である。好々爺の同情ではなく、或る時は冷酷に見ゆるツァラツストラの愛を持たなければならない。私は或る批評家から「弱き善人」であると銘打たれた。此れは或る點に於いて當つてゐるかも知れない。併し私はその弱さの中に人情の或

る自然さを感ずる。自分の性格の或るよさを感ずる。他人の不幸を憐む心、他人に悲しみを負はせるに忍びない心、人生の運命的な不調和を嘆く心、それらから生ずる弱さは人情の自然である。かくの如き弱さは何等かの超人的意志によつて克服せられざる限り、即ち精神生活の意識的なる決心によつて、超越せられざる限りは、常人の生活に於いては寧ろ美しいと云つていゝ。只超人の生活に於いてのみ、その弱さは缺點となるのである。併し乍ら不斷に精進すべき精神生活に於いて、人間性はニイチエの云ふ如く「克服せらる可き或るもの」である。我々は精神生活に志した以上、人間性を超越して、非人情の世界、超人の世界、覺者の世界に達しなければならない。咏嘆と、同情の世界から超脱して、智慧と意志の世界に出でなければならない。然らざれば此の宇宙の意志に合致した生活、享受と創造の生活に入る事が出來ないのである。眞の生活者となることが出來ないのである。被造物が自己の與へられたる生命を愛し、環境を享受（ゲニーセン）する道、即ち最も深き享樂主義及び被造物がより大なるもの、より美しきもの、より強きものを産み出さんとする、最も深き

製作主義は動かす可からざる根據を有する根本動向であつて、宇宙の意志に合致せるものである。生命に從順なる道である。我々は此のいはゆるギリシャ主義の道を肯定しなければならない。此の道を肯定せずして立てられたるあらゆる生活法は生物の本性に逆行した、一つの外道である。併し乍ら人間が自己の周圍に在在する他の人間を愛し、その幸福を願ひ、此れに奉仕せんとする慈愛も亦人間の本性であつて、其處より生ずる捨身主義も亦動かす可からざる一つの道である。此の世界には確かにかゝる意志が存在してゐるが如く見ゆる。あらゆる被造物を化育し、如何なる小さきもの、醜きもの、弱きものをも、その存在を許して攝取する宏大なるこゝろが存在する。併しながら此の後のものゝみを以て生活法を立てんとするは誤謬であり、不充分である。若し强ひて其の道のみを固執せんとすれば必らず無理に陷ち入るであらう。事實に於いては、如何なる捨身主義の生活と雖も、嚴密には前述の如きギリシャ主義的要素を含まないものはない。然らざるが如く云ふものは、意識的か、無意識的か、自ら欺いてゐるのである。我々の生活を若し此の捨身主義の範疇の

みに當て嵌て考へんとするならば、必らず矛盾に陥ち入るであらう。我々の生活には確かに捨身主義よりはみ出る或る内容がある。私は此れを意識して、これを自分の愛の不足に歸し、長い間煩悶して來た。併し乍ら今は必らずしもその爲ではなく、寧ろ捨身主義のみを持つて律せんとする事の無理なりしことを次第に感ずるに到つた。我々が捨身して他人に奉仕せんとすると云ふのは、他人の何に對してゞあるか。結局は他人の生命に對してゞある。而して其の生命の内容を構成せるものは依然として、他人の享樂主義及び、製作主義である。他人がその生命の願望を成就するやうに奉仕するのである。それを離れて奉仕する道はない。我々はこの生命の積極的内容を第一に肯定して尊重しなければならない。最も優れたるものを肯定せんとする心は、最も劣りたるものをも、肯定せんとする心と、それ自身に於いて矛盾するものではない。自己を生かさんとする願ひは、他人を生かさんとする願ひと、それ自身に於いて矛盾するものではない。只我々の現在の力量が不足し、現在の世界が不調和である爲の經濟的關係より矛盾するのである。あるがまゝの我々が、

願ふ所の我々でない爲に生ずる矛盾である。願ひそのものゝ内に於いて矛盾してゐるのではない。我々が願ふ所は、我れも生き、他人も生きん事であるが、力の缺乏の爲、やむを得ずして、他人の死を傍觀して、自ら生きるのである。我々が若し佛身であるならば、そして此の世界が淨土であるならば、我々は矛盾なく自他共に生かす事が出來るであらう。地上が天國となるならば、優れたるものを求むる爲に、劣りたるものを斥けなくても濟むであらう。我々はかゝる土を憧れ、かゝる國を建設せんと努力しなければならない。しかしながら現在その過程にある此の世界に、人間として生きて行かねばならない我々は、此の二つの間に絕えず矛盾を感じないわけに行かない。旣にその矛盾を感ずる時、我々は如何に處置す可きであらうか。私は、我々が選ぶ可き道は、この二元を同時に含む道より外にはない氣がする。その一つをも缺ぐ事は、此の人生の一つの重要なる要素を捨て、宇宙の意志に悖り、世界の運行に反するものであつて、强いてその一つに固執せんとする時は必らず無理となつて生活の破產を來たすものと考へざるを得ない。若し我々が捨身主義のみ

によつて生きるならば、此の世界の文化は停止するであらう。ギリシャ主義のみにて生きるならば、世界の運行は自らその無數の劣弱者の死骸の堆積に躓くであらう。我々は捨身主義と、ギリシャ主義とを同時に兼ね行ふ外に選ぶ道がないのである。花見を斷念する事の出來ない以上、又斷念すべからざるものと信じる以上、それは鎭火の後に於いてゞなく、消防に努め乍ら、なされなければならないのである。我々は火災なゝ、朗らかに、花を眺め得る時の到達せん事を心より願ふものである。併しその日はいつ來るであらうか。萬人が花見を斷念し、消防に努めれば明日その時は來るであらうか。或はその時は死後に於いて、若くは永遠の未來に於いて與へらるゝであらうか。こゝに我々の世界觀、乃至人生觀の相違が生じて來る。又假令前者の場合に於いても、事實として萬人が花見を斷念せざる場合、自分が花見を斷念する事は、自分一個にとつては、絶對的の斷念である。現實の問題として、萬人をして花見を斷念せしむる力が自分に無い以上、我々は只消し乍ら、眺める外に撰ぶ道がないのである。從つて火災を放任して、花見に沒頭する瞬間を肯定しなけ

ればならない。我々は眞に生々した生活體として存在し、與へられたるもの、天命を全うして生きる爲には、此の瞬間に堪へ得なければならない。併し乍ら、此の瞬間に堪へ得る事は手易き事ではない。强き意志を必要とする。我々が善良にして、慈愛深ければ、深いだけ、其の瞬間に堪へ得るには決心と努力とが必要となる。或る意味に於いて、非人情なる超人的意志を以てのみ、初めてよくし得るのである。私はその點に就いて、此れまで長く煩悶して來た。今も猶日常生活の百般の事に當つて、常に此の煩悶を繰り返してゐる。そして晦澁と、窮屈と、不自由との中に自分の生活が窒息し、行き詰つてゐるのを感ずる。併し私はいつ迄も此の境地に逡巡してゐる可きではない。勇氣を奮つて、道を切り開き、新しき步を蹈み出す可きである。上述の如き思索の過程は、私に、その苦しき瞬間に堪へて、躍進する事を促さずにはをかない。此の時私に痛切に感ぜられる事は、私の性格の弱さである。あまりに人情的な、淚もろき、甘き性格である。私はかゝる性格を善良なるものとして、自ら許す事を誘惑と考へなければならない。今も猶私の趣味は、かゝる性格の

人を好み、親しむ傾向を感じる。私はかゝる雰圍氣に馴れすぎた氣がする。私は是れ迄人間性の感情の如何なる微細な閃めきをも注意して、攝り容れ、これを尊重することに出來得る限りの思索を重ねて來た。最も傷き易き者の、最もデリケートな感傷をも、勞はらんことを努めて來た。この心使ひは私の性格を濃やかに、やさしく、リファインするために必要であつた。當初に於ては、是は私にとつて精進であつたが、次第に習性となり、今日に於いては、私をあまりに纎細、脆弱なる世界に導いた。センチメンタルな、人の思はくを憚る、情實に捕はれ易き、「弱さ」に誘うた。私はその「弱さ」を克服せねばならない。私は眞に溌溂として、積極的に生きる爲には、もつと強く、辛く、冷くならなければならない。或る意味に於いて、非人情の境地に出でなければならない。私が人間として此の上の成長を遂げる爲には、一度かゝる世界を通過せねばならない事を痛感する。今私にとつて必要なのは、人間性の温き同情ではなく、超人の冷たき意志である。私は好々爺の情愛を捨てゝ、超人の愛に達しなければならない。覺者の慈悲に到らなければならない。捨つ

べきは捨て、斷つ可きは斷ち、追ふ可きものは追ひ、樂むべきものは樂しみ、自由な、積極な世界に出でなければならない。然らざれば私の生活は此れ以上進轉せず、私の世界の視的野は、此れ以上展開せず、私の人格は此れ以上成長する事が出來ないであらう。私は今新しき生活法に出でんとする轉機に立つてゐる事を感ずる。此の時に當つて、私にひたすら欲しられるのは二つの德である。一つは優者の德であつて、一つは劣者の德である。此の宇宙の意志と合致せる、一つの動かす可からざる生活法たる、ギリシャ主義に於いて、優勝劣敗は避く可からざる法則である。是世界運行の一つの意志であつて何人もこれに逆らうことは出來ない。又逆らう可からざるものである。我々は此の法則を肯定し、承認し、隨順する外はない。即ち聖人は凡夫より、賢者は愚者より、天才は俗人より、美人は醜女より尊重せられるのは、前者が後者より宇宙の意志に適ひ、造化がこれをよしと見るからであつて何人もこの法則に悖ることは出來ない。我々は他人に對して、優者としての立場に立つ時と、劣者としての立場に立つ時とがある。此の何れの場合に立つ時も、我々は人

ンシスの手を取つて、自ら上座に着かせる光景を、獨り樂しく想像して涙ぐむ事がある。又法華經の中にある大衆が釋迦に瓔珞を捧げた時に、一度は辭退するが、勸めに從つて、これを受ける光景を讀んで、美と嚴肅とを感じないではゐられない。私はいつ迄も、躊躇と、拘泥と、顧眄との小天地に跼蹐して、弱き同情と、姑息な遠慮とに天分を浪費することなく、壁を破つて、自由と、公明と無邪氣との新天地に躍り出で、其處に展ける光景を眺めたい。生々とした世界に積極的に生きたい。「弱き善人」の殼を破つつて、「强き超人」とならんことを欲する。併し乍ら我々は若し此の二元を肯定して生くべきものとせば、如何にして現實生活に於いて、この二元の調和を求むべきであらうか。その調和を體得する迄は我々は安定した日常生活を營むことは出來ないであらう。私は今其の調和を體得して居ない。只かゝる調和は、この二元を適當な鹽梅に配合する事に依つては得られない事だけは感じて居る。例へば收入の内幾割は自ら費し、幾割は貧者に頒つといふが如き方法や、一日の内幾時間は義務勞働に當て、幾時間は自分の自由に費すといふが如き方法によつて、

外的にその調和に達することは出來ない。無論社會制度として、或は自分の日常生活の方針として、便宜上規則を立てることは必要であり、實際的効果を擧げ得るであらうが、それは如何に結果が大であつても機械的であつて調和ではない。眞の調和は此の二元が人格の内に於て、包攝、統合されて、一つの統覺となり、一つの行爲が動機の分裂を意識さるゝことなくして發現し、そのまゝ此の二元を含んで居るのでなくてはならない。「心の欲する所に從つて矩を踰へず」といふが如き境に達せる覺者、或は融通自在なる佛者の境涯は即ち是れであらう。故に外より、客觀すれば如何なる無礙人の生活と雖も、此の二元を含んで居るに相違ない。併しその性格の内に於いては此の二元は既に矛盾なく調和されて居るのである。私はかゝる覺者の境涯に達することに依つて、此の二元を調和せんことを最後の念願とする。併し私が此の最後の念願を成就して覺者となるためには、猶一度通過せざる可からざる一つの世界の存在することを痛感する。私は今直接には其の世界を求める。即ち基督教主義と同じ權利に於て、ギリシヤ主義を肯定する事から初める。此の二元を共

「父の心配」が三月廿三日から舞臺協會の人々に依つて、帝國劇場で上演される事になつた。此の作に就いては「或るプロテスト」の中で及び武者小路兄の批評に答へた「父の心配に就いて」と云ふ感想の中で委しく書いて置いたから、此處にまた繰り返す事を避けたい。此の作は自分が初めて試みた長篇の現代物で自分は特別に愛を感じて居る作である。いろいろ惡評をうけた作であるが、自分は多くの點でそれに服する事が出來ないで、今でも可成の自信を持つて居る。自分はこれまでのどの作よりもこまかい藝術的注意を以て此の作を書いた。假令成績が惡るかつたとしても、それは自分の力量の不足であつて、自分の努力の不足ではない。此の作の善良な、靜かな、深い部分は可成りな程度迄惠まれた種類のものに屬してゐる。この作はキリスト教主義の父と、ギリシャ主義の息と、家族主義の母親と、二人の處女との間に生じた家庭の内での一つの葛藤を取扱つたものである。成吉を主人公の如く考へてゐる人が多いやうであるが、自分の作意ではむしろ題の示す如く父が主人公である。才氣はあるが稍淺薄な妻と、眞面目ではあるがまだ若くて生意氣な息と、

内氣な傷つき易い、且つ亡き愛人の記念である養女と、及び社會的な性質を帶びた友人の娘なる初心の處女との間に起つてゐる戀愛問題の糾紛を背景にして、一個の謙遜な、善良な物靜かな父親のケアーを書くのが作意である。自分は此の作に教養的なアトモスフエアを出さうと努め、人間のカルチユアと云ふものを人物の行爲のはしばしに出さうと努めた。それは今の日本の現代劇に一番缺けてゐる要素と思つてゐる。例へば第四幕の終り頃に一寸出る小出夫人は端役ではあるが、夫人があの場合道子に對してとつた態度の中にはその感謝と賞讃の現はし方や、まごゝろから出る申し出を、不躾にさせまいとする心使ひや、しかもその申出を敢へてなす素直さや、くどくならないで切り上げるその場にふさはしい智慧や、さう云ふカルチユアの點に自分は注意して、あの場合、自分の趣味に適ふ、一人の教養ある、四拾歳前後の婦人を書いたのである。又道子に「姉さまに成つて下さい。」と云はれて只「さう成れますやうに。」とのみ答へる松子の氣持ちや、成吉が父の昔の過失に觸れて、自ら赤くなつて「御免なさい。」と云ふ氣持ちや、其他總ての人物の心と心との觸れ

合ふ時の、さう云ふカルチユアに目を注けてもらい度い。傲慢な心持ちや、パツシヨンやライデンシヤフトや、嫉妬の場合でも自分はさう云ふ用意を忘れなかつた心算である。さう云ふ點に目を注けてもらはなくては、此の作のいゝ處は解らないであらう。此の作も亦觀客を面白がらせる、目立つところのない作だから、觀客には靜かな心を保ち、教養的な頭を働かせる事に依つて、退屈からまぬかれるやうにして戴き度いものである。人物の出し入れ等に就いては「出家とその弟子。」などより、遙かに注意を働かせてある心算であるが、此の作が舞臺の上でどれ丈けの効果を持ち得るかと云ふ事は自分には非常に興味が多い。第三幕の庭の場が警視廳の檢閲を無事に通過するやうに呉々も希望してをく。これは當然通過しなければならない筈のものであると信じる。檢閲官の見識は無論今は其處まで進んで居るであらう。舞臺協會の諸君が此の作を最もよく生かして呉れる事を切望する。

（一九二二・三・一一）

懺悔に就いて

――或る人の問ひに答へて――

の滿足する希望を安定せしめて、その精進の歩みを確實にするのである。このことの體感できる人は、その人の精神の世界が廣がりと、深さと、圓かさとに於いて、かなりの程度迄でき上つてゐると云つていゝ。

さて人間が斯くの如きものであると觀じて生きる時に、吾々の精神生活には懺悔と云ふ意識がなくてはならないものとなる。吾々は已に罪を犯さずして生きる事はできない。併も罪の價は精神的の死であつて、吾々の良心は罪に堪える事が出來ないやうに作られてゐるのである。この時もし、罪の赦される道がないならば、吾々は生きて行く事は出來ない。そこに懺悔の意識があつて吾々を救つてくれるのである。吾々は罪を犯す、併しそれを懺悔することが出來る。そして良心を安らかにすることが出來るのみならず、その罪によつて、却つて自分を富ますことが出來る。清める事が出來る。愛と、感謝の心を知ることが出來る。罪を犯さなかつたよりもなほ一層法の愛を感じ、調和、攝理を感ずることが出來るやうになる。これはほんたうに有難い事實であると思ふ。人間の世界にこれ程不思議な、

貴いものはないと云つてもいゝ。吾々は懺悔した時に、自分の心が不思議に淨まり、感謝の情に潤うてゐるのを感ずる。また他人が懺悔した時に、不思議に感動し易い、赦し易い心を與へられてゐる。さう云ふやうに作られてゐる。誰れでも赦したことのある人は、赦した時の自分の心の祝福を知つてゐるであらう。また懺悔した事のある人は、その時の心の不思議な安らかさを知つてゐるであらう。罪と、懺悔と、赦し、この三つを貫く方向には、天國があり、神がある。これが宗教的意識であつて、この意識の強い人程、佛縁の深い人である。その意味に於いては、常識的に、道德的であり、習慣的に世間の約束を踏み外さず、概念的に人倫を辨へてゐる所謂「かたい人、眞面目な人」であつて、罪を造る事少なく、從つて懺悔や、赦しの意識に乏しい人は、佛縁が淺いと云つていゝ。

　惡にも強く、善にも強き人間性のインテンシティの大きな人は、宗教心にも入り易い。併し、自分がかう云ふのは決して罪を作ることが作らないことよりいゝと云ふのではない。罪は少ないだけいゝ。罪は恐ろしく、その價は高く、その後悔は永い。且つ一度犯された

罪は、たとへ赦されても、その記錄は法界に殘存する。（拙文「本道と外道」參照）併し、罪を造るまいとできるだけ精進しても、吾々は罪を造り易いものである。その時、一旦已に罪を造つた以上は、その罪から起き上がらねばならない。その罪を出來得る限り生かさねばならない。その時懺悔する事のできないものは、自暴自棄に陷り、罪は罪を生み、ますノヽ暗黑に沈み、地獄に近づく。素直に懺悔し得るものは、その罪から却つて、愛と感謝を知り、信心の芽を伸ばし、天國に近づく。自分はこゝでも素直さと云ふものゝ、人間にとつて實に大事な德であることを思ふ。吾々は、懺悔することに素直でなくてはならない。意地を張つてはいけない。自分の罪惡を意識した以上、素直に懺悔すれば道が開けるが、ひねくれて強情になり、無理にそれを肯定しやうとすれば、益々罪惡を重ね、闇や、暗黑は增し、道は行き詰る。

また吾々は、他人が懺悔した時に、心よくこれを宥さなければならない。他人の罪惡を裁くのに酷であつてはならない。自分を反省してみれば、他人の罪惡を裁く資格のあるこ

とは殆んごないと云つてゐる。併も吾々は、自分の眼の梁を取らないで、他人の眼の塵を取らうとし易いものである。そして他人の暗黒を益々黒く塗りたてやうとする。甚だしきは他人の懺悔に依つて、その罪惡を知つた時、それを利用しやうとする者もある。斯くの如きは、卑劣な行爲の中でも最も卑劣なものである。斯くの如き人が居る爲に、罪を犯した者は、性悔し難くなり、これを隱蔽しやうとするやうになるのである。自分は罪を犯した者と、これを苛酷に裁く者とを對立して見る時、寧ろ、前者に同情を感じ、後者を淺ましく思ふ場合が多い。自分が一度罪を犯し、他人に裁かれて苦しむ時、初めて自分が他人を裁く事がごんなに嚴し過ぎたかと云ふことがしみじみと感じられるのである。あのグレーチヘンが、ファウストと罪を犯して友人から責められ、後でマリヤの像の前で祈る時の白の中に、「自分はこれまで、人の罪を裁くことがごんなに嚴しかつたらう」といつて泣くところがあるが、自分はあのシーンが目の前に殘つてゐる。キリストが「たび七を七十倍するまで宥せ」といつたやうに、吾々は他人の罪惡には寛大でありたい。併し乍ら、これは宥

すものゝ德であつて、懺悔する者はごこ迄も嚴しき自責の念を持ち、苟且にも宥されるのが當然であると思つてはならない。また懺悔は、償ひの氣持と伴はなければならない。即ち再び罪を犯さない決心と共に、今後の善行によつて せめて犯した罪惡の十分の一でも償ひたいと思はなければならない。併しその償ひは、實は不可能であつて、百の善行も、一の善行と一つの罪惡を償ふことは出來ず、罪はたゞ性悔のみによつて宥されるのであるが、宥すものが償ひを條件とせずして宥さねばならぬと同時に、宥さるゝ者はせめて、今後の善行によつて償ひたいとの殊勝な心掛を起すのは當然である。自分はよく教會などで、實に安價な懺悔、甚だしきは罪を犯した事を喜こんで告白するが如き厚顏な懺悔を聞いたことがあるが、實に忌はしい感じである。罪を公衆の前で懺悔すると云ふ事は實に恥づかしい、堪え難い事であるべきであるのに、自分は監獄に行つて來たとか、姦淫をしたとか云ふ如き告白を何等の痛恨の表情もなく、今後の償ひの決心もなくなされるのを聞くのは實に淺ましい。吾々は一週間の罪惡を、日曜日の悔によつて安價に洗ひ落すことはでき

ない。一方斯くの如き厚顔な懺悔者があるために、一方では宥すことが困難になつて來る。併し乍ら、吾々が懺悔する時に、罪悪を繰り返さないと眞心から決心をしても、果して罪悪を再びしない事が可能であるか、否かは請合ふことは出來ない。恐らく罪悪を重ねる場合が多いであらう。併し幾度躓づいても、自棄してはならない。餘り厚顔であると、自ら愧ぢて宥しを乞はないのも同情には値ひするが、素直でない。「出家と其の弟子」の善鸞の如きがこれである。如何にしばしば罪悪を重ねても、一度眞心から懺悔すれば、その瞬間に宥されるのである。否已に宥されてゐるのであるが、そのことを懺悔した時に知るのであると云ふ方が當つてゐる。もとより幾度躓づいても、また懺悔すれば宥されると意識して懺悔するのがいけないのは云ふまでもない。吾々は出來るだけ罪を恐れねばならない。併し一度罪を犯せば素直に懺悔し、罪を繰り返さない決心を堅くし、罪の償ひを用意し、しかもなほ躓づくならば、百度でも、千度でも懲りずに素直に懺悔しなければならない。自分の貧しい生活に就いて

語るのは氣がひけるが、自分は常々毎朝佛像を禮拜することにしてゐるが、その時、自分が好んで口誦(こうじゆ)する經文の文句が三つある。これは一燈園で編纂した、日々行事諸經要集と云ふ、小册子に載つてゐる、誰れでも知つてゐる文句であるが、自分は有難いと思ふから念の爲にこゝに書いて置く。

○懺悔文

我昔(がしやく)所造諸惡業　皆由無始貪瞋癡
從身口意之所生　一切我今皆懺悔

○香偈

願我身淨如香爐　願我心如智慧火
念念焚燒戒定香　供養十方三世佛

○正信偈

極重惡人唯稱佛　我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見　大悲無倦常照我

自分は毎朝この三つを口誦する時に、心の安らかさを保つことが出來る氣がする。その心の過程を書いて見やう。

自分はともかくも、その時その儘の心で佛像の前に坐る。自分の心は亂れてゐる。前夜の醜い記憶も心を汚してゐる。その時先づ安んじて佛像の顔を拜し得る爲には、第一の文句を自分は口誦する。そして兎も角も一切の犯した罪惡を今この瞬間に懺悔する。その時自分は已に宥された者であつて、昨夜迄如何なる汚れた行爲をなしてゐるにしても、今宥されてゐると感ずることができる。ついで自分は第二の文句を口誦する。即ち今後直接には今日一日香爐の如く清く、暮して行かうと決心する。それで自分の心は引き緊ることを感ずる。併しその時なほ自分には不安が殘つてゐる。自分はかく決心したけれども、果して

香爐の如く清く身を保ち得やうかと云ふ不安である。そこで自分は第二の文句を口誦する。自分はたとひまた罪を犯しても、たゞ佛を稱へれば罪は宥して戴けるのであると念ずる。そこで自分の心からすべての不安がなくなり、良心は落ちつくことができる。そして一日の業に就く事が出來る。かくて一日を暮し、翌朝はまた同じ心で佛像の前に坐り、同じ經文を繰り返すのである。自分は斯くの如くして、百、千度でも懺悔して行きたいと思つてゐる。人は或は斯くの如き氣持ちを生溫いと思ふかも知れない。併し自分は決してさう思はない。寧ろ自分が人性の眞と、人間の限界とを深く知る事ができるやうになつたところから生じた素直さであると信じてゐる。懺悔する時に、再び罪を犯すことを意識するのではない。再び犯すまいと心から決心するのである。併も再び犯さない事を、誰が誓ふことができやう。その不安から免れることは、人間にはできない。故に犯したら犯してもまた宥されると大安心して、併も眞心から懺悔するのである。これが本當の安心立命の境地である。水を泳ぐ者が向ふ岸まで泳げない時には、いつでも乘れる船がついて來てゐてくれ

ると信じて泳ぐのと、向ふ岸へ着けなかつたら溺れるかも知れないと思つて泳ぐのとの相違である。船がついてゐないと思ふ方が、決心が堅く、よく泳げると思ふ人があるかも知れないが、自分の經驗では船がついてゐると思つて泳ぐ時に却つて遠方迄泳げるのを知つてゐる。煩悶も、苦痛も、宥されてゐると云ふ大安心の中でするのと、その安心がなくしてするのとの相違である。安心立命しても、煩悶や、苦痛がなくなるのではない。パラドックスのやうであるが、安心して苦悶するのである。救ひなき煩悶、苦痛に堪へ得ると思へる者はそれでいゝ。泳ぎ切れなかつたら溺死するまでだと思へる者はそれでいゝ。自分一個は、その恐ろしさに堪え得ないものである。眞にその恐ろしさから免れたい。地獄の火に堪え得ると自負するものは、自分には增上慢としか思へない。(一九二二・五・二六)

女性崇拜について

——或る人の問ひに答へて——

造化が女をこの地上に造つたといふことは、意味の深いことであり、神秘を含んだ匠であると思ふ。私は男性の立場から考へるのであるが、若し女性といふものがこの地上になかつたら、この地上はどんなに淋しく、男性は生き甲斐がないであらう。男性のこの地上に於ける生活は、殊に精神生活は女性に對する生活といつてもいゝ。全然女性を離れた生活法を立てた人でも、つまり女性を對照とした生活である。かゝる孤獨の生活も亦女性を内容とした生活といはなければならない。男性の精神生活は或意味に於て女性の内に含まれる謎を解いて行く生活である。

藝術や哲學もこの謎の解き方と密接な關係があつて、種々の色合を呈して來る。宗教も亦その深い氣持の中には、この謎の解き方が種々な色合で織り交つてゐる。この謎の解き方には色々あるが、之によつてその人の、人間としての尊さ、靈魂の深さを測ることが出來ると云へる。

ある人は女性をたゞ肉慾の對照として取扱ふ。或人は育兒や家事のよき働き手として取

扱ふ。或人はこの世を樂しく飾り、美しい氣分をたゞよはせる愛すべき寵愛物、或は玩具として取扱ふ。その最も著るしき對立は、女性を憎むべきものとして嫌忌する所謂女性嫌忌者と、女性を最も尊敬すべきものとして憬慕する所謂女性崇拜家とである。

ストリンドベルヒの如きは前者であつて、ゲーテの如きは後者の部に屬する人であらう。この二つの見方には、夫々深い根據があると思ふが、私は結局後者の方により深い根據があるものと考へてゐる。然しながらその後者になり得る爲には、人間の靈魂は種々の體驗と、思索とを經て後に餘程高められなければならない。

私は女性嫌忌者には、實感的な同情をもつものである。かつて自分は烈しく女性嫌忌者であつた。今でも個々の現實の女に對しては、女性嫌忌者であり、女性憎惡者である場合が多いことも事實である。然しそれにも拘らず「女性そのもの」「女性的なるもの」、造化が女性の中に匠んで居つたと思はれる價値に對しては、どこまでも憬慕と崇拜の心を捧げてゐるものである。そしてさうすることを、男性として最も賢きことであり、一番深い、ま

た高く擧げられた見方であると思ふものである。私は經歴からいつて、寧ろウマンヘーターであるべき運命を持つて來たのであるが、心靈上に一つの高尙な烈しい戰を經た後で、女性崇拜者となることが出來たのである。そして人間の最も靈的に卓越した、品位ある敎養を受けた、種々の深い思索と體驗を經て高きに擧げられた男性が、最後に到着すべき一番公けな立場は、これから私が言はうとする意味の女性崇拜であると私は信ずる。

私がいふ意味の女性崇拜は、現實の個々の女に對してゞはなく、「女性なるもの(ダスワイブリッヘ)」に對する崇拜である。ゲーテがいつた「永遠の女性」に對する憬慕である。女性がかくあるべき筈の本質、理念(イデー)に對する愛である。優美(グレースフル)なるもの、やさしきもの(ツァールト)、品よきもの、調和あるもの、忍耐深きもの、纎細なるもの、觀念の結び出す一つの像(ビルド)に對するあこがれである。

女は現實の個々の場合に於ては、男よりも多くの缺點を備へ、低き地位に置かれ、人間として劣等なるものとの一般の觀察が當つてゐる場合が多い。女子は小人と共に養ひ難きものと賤められ、道場より禁制され、嫉妬深く慾深く、さかしらにして姦しきものとし

て、昔から馳せられて來たのには、その然るべき理由があることも私は認めないわけには行かない。

一見貞淑に見える夫人が、娼婦の如き本性を示し、何ものをも捧げてゐる如く見える處女が、一大事に際して愛人を何の苦もなく振り棄て、慈悲深く見ゆる貴夫人が、慘酷にして虚榮的な眞相を暴露するのを見る時に、男子は幻滅を感じないわけに行かないのである。脆くして信じがたく、誠少なきもの、替へ易き、あさはかなるもの等の缺點は、果けるにいとまないであらう。然しながら其等の事實を以て、直ちに女性そのものを嫌惡し排斥しきるのは早計であり、淺慮である。且つあまりに人生の醜きものに對して思ひ切りがよすぎると言はなければならない。これ等は否みがたき事實ではあるが、女性の當にあるべき筈の姿ではない。造化が女性を造つた時の意匠が、完全に實現された姿ではない。女性の内に含まるゝ可能性が、結ぶべき實を未だ結ばざる段階に於ける姿である。造化は女性の内に、男性の追ひ求むべき理想の鏡、優美と調和のイデアを置いたのである。男子はその

造化の心を洞察しなければならない。そしてあるべき筈の女性に對して、思慕と尊敬とを保たなければならない。

女性に對する極端なる嫌惡の情より反つて私はかゝる崇拜の心に飛躍することが出來た。棄てさるにはあまりに惜しき對象である。あまりに吾等を惹きつける力である。男性は女性を離れては、生活の悦びを感ずることが出來ないやうに造られてゐる。この内容を、二つとなき生活特特を、出來得る限り生かすことを努めるのが最も賢き道である。吾々は天才の詩の中に、繪の中に、かゝる女性の高貴なる姿を彷彿することが出來る。ダンテの神曲のベアトリチェや、フラ・アンゼリコの繪の中の天使や詩神(ムーゼ)の如きはこれである。

吾々はかゝる姿に接する時、吾々の靈魂を高められ、淨められ、調和されることを感じるのである。その時吾々の靈魂は、最も優美なるものとなるのである。普通の狀態に於ては、男性は女性よりも優つてゐる。然しその當にあるべき姿に於ては、女性は男性よりも優れてゐる。觀世音菩薩の如き佛像が、女性の相を帶びてゐることを思はなければならな

い。吾々は最も調和したるものゝ姿を想像するとき、之れを女性的に描き出すのである。かの聖母の像の如きはこれである。中世紀に於て勇敢なる騎士が、貴夫人に對して謙遜であり、忠實であり、膝まづく程の敬慕の情を捧げたのは、人生の深い根據がある。強きものは優美なるものゝ下に屬する。凡て力強さの感じを持つものは、英雄やまたキリストの如き聖人に於いても表はるゝものさへも、未だ最高のものではない。最高のものは調和の感じである。優美の姿である。キリストよりもマリヤを崇拜の像として要求してくるのはこのためである。そして勝れたる男性にとつて、かゝる女性の前に膝まづくことは、何といふ幸福であらう。その時男性の威厳は傷つけられずして反つて優しき美を添へるのである。男性としての誇りが反つて滿足するのである。かゝる深き氣持を「おめでたき」「甘き」若くは「鼻の下の長き」思想として斥くるものは、反つてその人の靈魂の下賤、淺薄、粗野なることを示すものである。最も勝れたる靈魂を有する男子は、女性崇拜となるものである。

もとより私は、婦人に對して社交的なる愛嬌よき、所謂程のよき紳士を好むものではな

い。その意味に於いては、むしろ孤獨なる寂しき寡默の人に、人間して好ましき人を發見すことゝが多い。然し最も公けな尊き態度は、依然として女性に對する禮讓と、尊重と、むしろ崇拜とであることを私は信じるものである。貴夫人こいふ如きものも、現實の虛飾多き、階級的意味の貴夫人は、嫌ふべきものであるかも知れないが、貴夫人の觀念は私は美しい意味を持つゐると思ふ。眞實の淑女、貴夫人といふ精神的の觀念は、どこまでも保存したい氣がする。ゲーテやシルレルの如き高貴な靈魂を有する詩人が、絕えずその周圍に美くしき貴夫人たちを持つてゐたのは意味がある。それに依つて彼等の靈魂は和げられ、溫められ、優美にされたのである。これらの公けな、勝れた天才達は、婦人たちの間に缺點を見ながらも、之を排斥しきらずして、女性のあり得べき美と價値とをそこに發見し、自分の敎養と詩作とのよき養分となしたのである。あり得べき筈の女性の姿を崇拜し、その美を求め、あるがまゝの女性たちをかゝる高さにまで引上げんために導くことは、勝れたる男子の最も大事な務であり、また樂しき企でなければならない。なほ意は盡せないが、

自分は五年前「地上の男女」と云ふ論文の中で、自分の戀愛と、性慾に關する感想を書いた。が、その後五年の間に自分の思索と、體驗の推移は自分の思想を可成り變化させて來た。自分はあの「地上の男女」に就いて多くの人から種々の點に於いて反對を受けた。併し此の問題に關する自分の思想が、もつと充分に圓熟する迄發表する事を避けたかつたので、今日迄それに答へる事も、又、自分の思想のその後の變化を發表する事も控へてゐた。自分は總て思想に就いての表現は、表現の動機が充分に熟する迄は、成る可く差控へたいと思つてゐるが、殊に性の問題に就いては、一層控へ目を護りたい。自分は性の問題を、此の人生の最も重大な問題の一つとして自分の一生の思索と體驗とを、此の問題に捧げたく思つてゐる。自然が男女を此の地上に造つたと云ふ事は深い匠みである。人間の精神生活の成長の歷史は此の匠みの謎を解いて行く過程と云つてもよい。ある人間の靈魂が、如何なる高さにあるかと云ふ事は、その人の戀愛觀によつて測る事が出來ると云つてもよい。故に戀愛觀は、その人の靈魂が成長して行くに從つて成長する。自分は、自分の一生

をもつてこの深き匠みを解いて行きたく思つてゐる。自分はこの問題に對する興味と關心が、歳と共に深まるのを感ずる。自分は少なくとも、今數ヶ年此の問題のみに就いて研究して後、「地上の男女」の後に於ける自分の戀愛觀を發表したく思ふのであるが、そして出來得べくば、此の問題に關するあらゆる文獻を渉獵して後にしたいのであるが、自分は精力乏しく、制作に忙がしく、自分の健康を持つてしては、それが不可能な企てである事を感ずるのと、自分が讀んだ限りに於いては、少なくとも科學者の性に關する文獻が自分の戀愛觀の本質に對して如何に能ふる所少なきかを知つたので、一と先づ自分の考へをこゝにまとめて置きたく思ふのである。

あの「地上の男女」に就いて、多くの人々から質問を受け、反對もされたが、またそれらの中にはあの感想を絶對の眞理として自分の一生の運命を決定せんとするが如き若き人々をも可成り見出すので（例へばあの論文によつて處女が結婚を斷念せんとするが如き）自分は恐ろしさを感ずる。そして自分の思想が變化してゐる限りに於いて、尚未熟の儘作

自分の戀愛觀は恐らく自分の靈魂の成長と共に此の後も變化して行くであらう。故に自分がこゝに書く感想を絶對の眞理として、それによつて自分の問題を解決せんとする事は讀者に止めて貰ひたい。それは自分にとつて恐ろし過ぎる。自分の問題はどこ迄も、自分の思索によつて決定しなければならない。只自分の小論文がその參考の一つとしてのみ取扱はれる事を希望する。

戀愛が、人間の靈魂にとつて、最も重大な問題であり、精神生活の二つとなき材料であり、それが宗教意識と密接に連つてゐる事に就いての自分の考へは、「地上の男女」に書いた當時と同じである。否、むしろ益々確かに、強くその事を感じてゐる。人間の靈魂があげられるのは信仰と、戀愛とによつてゞある。殊に人間の靈魂が優美(グレース)に崇高められるのは、主として戀愛によつてゞある。最も優美な戀愛觀に達し得た人は、最も優美な靈魂にあげられた人である。その意味に於いて戀愛觀は又、一つの理想、構圖、像(イメーヂ)である。自分は性に關する科學者の著書を讀んで科學者の戀愛觀が、如何に貧弱にして卑近であるかに驚か

された。そして泌々と戀愛觀も亦藝術家によつて殊にその胸に、瞑想と、夢と、無限の世界、構圖の宿る詩人によつて建てられなければならない事を感じた。素より自分は現實の事實を無視していゝと云ふのではない。現實の事實は、あくまでも精確に此れを認識しなければならない。むしろそれを認識するが故に、我々の理想、構圖、夢は益々高く、自由に飛翔せん事を欲するのである。凡そ認識とは現實の事實を觀察して、その事實を自己の胸に宿るあらゆる理念（イデー）に適合するやうに說明する事である。科學者の認識と雖も此れ以上に出る事は出來ない。故に高き理念を有する主觀が認識するにあらざれば、現實の事實の認識と雖も、深き眞相に達する事、即ち眞の意味にて、事實に中る事は出來ない。

自分は第一に性慾と戀愛との關係に就いて「地上の男女」の中の思想を補正したく思ふ。戀愛は生物が、性を通して天的なるものに達せんとする生命の營みである。自分は「地上の男女」に於いて、性慾と戀愛とは全然質を異にせるものであると書いた。が、今の自分の思想はこれと違つてゐる。自分の今の考へでは戀愛は性慾から分化したものである。性

慾の中に可能性の形に於いて、始より含蓄されてゐたものである。積極道の中に書いた如く生命の内容は方向を附せられたる可能性の形に於ける與材である。その可能性が分化發展してゆく過程が、生命の成長の根本方式であり、文化の歴史である。造化が生命に性慾を與へた時、その性慾の中に既に我々が戀愛と名附くるもの丶要素が可能性の形に於いて含蓄されてゐた。然し動物の狀態に於いては、又、人間の原始時代に於いては、只性慾(狹義の)と云ふ形に於いてのみその慾望が現はれる。然し生命が成長して行くに從つて次第にその可能性が分化發展して文化が進むにつれて戀愛と云ふ形に於いて現はれてくる。その戀愛も又文化の進むに從ひ、人間の靈魂の高まるに從つて、より高き形に於いて現れる。而して遂に天的なる形に迄達す可きものとしての方向を附せられて、當初より、造化より與へられたるものである。故に戀愛は性慾と質を異にせるものでなく、より高き形に於ける性慾である。その意味に於いては、如何なる天的なる戀愛も、性慾を除拒したものでなく、精煉されたる、高められたる性慾である。どぶろくの如き酒より、最も芳醇なる清酒

が精煉される如くに性慾の衝動の中より純化されたるものであつて、始より異質のものではない。故に戀愛が肯定さる可きものであるならば性慾はそれ自身に於いては肯定さるべきものである。然らば自分は何故にあの論文に於いて戀愛を肯定して、性慾を否定する事かくの如く峻しくなければならなかつたのであらうか。それは次の如き事情によつてゞある。即ち性慾はそれ自身に於ては惡ではなく、從つて純粹に性慾のみの衝動より起る合意の肉交は(自分はそれを無邪氣(インノーセント)な肉交と名付ける。)其れ自身には他の人格に對する呪ひを含むではゐないのであるが、意識的なる人間にはかゝる無邪氣なる肉交をなす事が實に容易でないのである。即ち意識的なる人間には肉交の際性慾の衝動以外の他の動機がこれに混淆するのである。肉交を不純にし、汚濁し、呪ふべきものとなすものは實はこの性慾以外の他の動機である。その動機は種々あるがそれ等の主なるものとして次の五種をあげる事が出來る。第一は征服慾である。男子は肉交する際に女子に對して征服慾を感ずる。即ち男子は肉交する事によつて相手を征服したりとの意識を持つ。この意識は明らかに相手の

人格に對する冒瀆である。即ち肉交以外の場合に於てかゝる意識を他人に對して持つ事は明かに冒瀆であり、相手は侮辱を感ずるが如き種類の意識である。强者が弱者に對して、暴君が奴隷に對して、勝利者が敗北者に對して持つ征服の意識を肉交に際して男子は女子に對して持つのである。ホロフエルネスがユーディットに對して持つた意識である。自分が「地上の男女。」の中に書いた蛇が蛙を喰つて居る、或は日本が支那を威嚇して居る相が肉交のかゝる相に酷似して居ると云ふのは此の點である。肉交には征服慾が伴ひ、征服慾は性慾を挑發する。その極端なるものは强姦であつて是は相手の合意に依らない强制的の肉交であるが故に、その罪惡である事は無論であるが、合意の肉交に於てもかゝる征服慾が伴うのである。第二に飜弄の意識である。肉交の際男子は女子を樣々な仕方に於て弄び物とする。他の場合に於てかゝる意識を他人に對して起す事は冒瀆であり、相手は侮辱を感ずるが如き意識が合意の肉交の際に巧妙に隱蔽されて感じられる。これも亦性慾を增進させ、挑發する。自分が「地上の男女」に於て、猫が鼠を弄ぶ相に譬へたのはこれである。

第三に相手を手段とする意識である。相手を人格(ペルゾーン)とせずして、物(ザッヘ)として取扱ふ意識である。肉交の際男子は女子を己れの性慾を遂げる爲の手段とする。此の場合に於ては嚴密には相手に對して起つて居る性慾でなく、漫然と對象なくして起つてゐる性慾を相手を手段として滿さうとするのである。極言すれば人工の器具に依つて代用出來るが如きものとして相手を取り扱つて居るのである。最惡の場合は他の女に對して生じて居る性慾を、その相手に依つて滿さんとするのである。第四に肉交そのものをそれ自身の爲でなく他の目的の手段となす事である。生活其他の利害の爲に性慾を賣り、或は自分は性慾を感じないにも關はらず、相手の慾望を滿足せしめんが爲に爲すが如き肉交である。賣淫の罪惡である事は勿論であるが、夫婦の間に於て奉仕の氣持を以てかゝる肉交をなす場合も自分は厭ふべきものであると信じる。第五に豫め快樂を豫想して肉交を爲す事である。肉交の結果として快樂が生ずるのでなく、快樂なるが故に快樂を得んとしてなす肉交である。抑も快樂は慾望を豫想する。性慾そのもの〻中には元來快樂は含まれてゐない。兩性が接觸し、互に性慾

の衝動を發し、肉交し、その結果として快樂が生ずるのである。假令前記の四種の不純なる動機を含まざるも、快樂の爲に肉交するならばなほ無邪氣なる肉交とは言へない。即ち淫を樂しむのである。形式より云へば、男女二人にて佳肴を樂しみ喰ふが如きものであつて、第四の場合と同じく何等他人に對する呪ひを含むではゐないけれども、自己の尊嚴(ヴュルデ)を傷つけて居るのである。上述の如き五種の動機を混淆せざる肉交を自分は無邪氣なる肉交と名付ける。かゝる肉交は其れ自身に於て罪惡ではない。即ち二つの性を異にする生命が接觸し、互に性慾の衝動を感じ、征服或は飜弄の意識を作はず、相手を手段として取り扱はず、肉交を以て他の手段となさず、且つ豫め快樂を豫想する事なくあだかも電氣の兩極の相牽引し、中和するが如く、螢と螢とのつるむが如くになさるゝ肉交は純粹なる無邪氣なるものであつて、相手及自己に對して何等の呪ひをも含まざるが故に罪惡ではない。肉交が罪惡となるのは前述の五種の動機の全部若しくは一部を含むからである。その一つをも含むならば正しき肉交とは云へない。

自分が「地上の男女。」に於いて肉交を罪惡として否定したのはこの五つの動機に就いて考へたからであつた。これ等の動機の厭ふべきものである事を痛感するあまり、性慾そのものを否定するに到つたのであるが、其後の思索と反省は上述の如き思想の變化を自分に與へた。自分は性慾その者は肯定する。從つて純粹に性慾のみより生ずる無邪氣なる肉交は肯定する。しかし上記の動機の一つをも混淆せる肉交は否定する。この點に於て此處に「地上の男女。」の内なる思想を補正して置く。

併し乍ら此處に注意して置き度い事は自分は此處では何處までも肉交其のものに就いて考察するのである。其の惹起す結果に就いては考察しない。上述の如き考察に據れば正しき肉交は當然衝動的な肉交でなければならない。精神的な戀愛に於て互に相手の運命を尊重する愛人の間に於て行はるゝ肉交に於ても肉交そのものは衝動的でなければならない。此の事は相手の運命を關心する愛とは別事である。互の運命に對して責任を持つ夫婦が必ずしも正しき肉交をなすものではない。又無邪氣なる、衝動的なる即ち正しき肉交をなす

者が必ずしも相手の運命に關心する者でもない。むしろ衝動的なる肉交は其の結果として相手の運命を傷つける事が多い事を注意しなければならない。故に我々が肉交するに際して肉交そのものが正しきか否かの動機のみより其の行爲を決定する事は出來ない。それはそれ以外の倫理的法則の支配をも受けなければならない。併し乍ら肉交そのものゝ正邪は何處迄も上述の如き原理に據つて決せられなければならない。故に一般に最も望ましき肉交は精神的に戀愛する、互の運命に責任を持つ事深き愛人の間に於て、或る瞬間に衝動的に行はるゝ肉交である。併し乍ら此の場合に於ても、戀愛の精神的要素や、運命に對する關心が肉交をジヤスティファイする根據にはならない事を特に注意して置き度い。

併し乍らこれはかゝる無邪氣なる肉交があり得るものと假定してかゝる肉交を肯定さるべき筈のものであると主張するのである。かゝる肉交が事實としてあり得るや否やの問題は別である。自分一個の經驗に於ては自分の經驗したみごの肉交も一つとして嚴密に無邪氣なるものはなかつた。故に自分は「地上の男女。」に於て一般に肉交はかゝる動機を含む

事を肉交の本來の眞相と考へてかの如き主張を立てたのであつた。現在に於ても自分は事實としては未だ無邪氣なる肉交の體驗を持たないのである。併しこれを以て他人も盡く自分の如くであると斷定する事は出來ない。又自分も將來永久にかくの如くであつて、無邪氣なる肉交を爲し得ないとは斷定する事能はず、又斷定する事を欲しない。殊に動物や原始人の肉交を思ひ又、古事記時代の肉交を思ひ、現代に於ても極めて僅かなイン／セントなる人々の肉交を思ひ、又教養に依つて無邪氣となれる或る禪僧の肉交を思ふ時に肉交が本來無邪氣であり得る事及び修養に依つて無邪氣となり得るものである事を否定する事が出來ない。又若し無邪氣なる肉交を爲し得ざるものとすれば、性慾を與へられたる事は如何に禍であるかを思ふ時に、かゝる無邪氣なる肉交を爲し得るのみならず、又本來肉交は無邪氣なるべき筈のものであり、無邪氣なる事を常態とし、不純なる事を變態とする事が合理的であると考へられ、又考へん事を欲する。此の意味に於て自分は性慾及び肉交を肯定せんと欲するものである。併し乍ら一度意識的となれる人間に於て、殊に現代の人間に

於て、かゝる無邪氣なる肉交を爲す事は果して容易であらうか。自分はあの論文に對して種々なる反對を唱へる人々に對して質したいのは此の點である。自分一個はその至難なる事を感じないわけにゆかない。從つて他人に對しても、それが至難である如くに推測しないわけにゆかない。彼等が肉交は正しくある筈のものであると主張するならば自分はこれをうなづく事は出來るが、自分等が現在なす肉交が正しいとの主張に對しては自分は疑ひを持たざるを得ない。彼等は果して自分を正確に反省してゐるのであらうか。彼等が自ら欺いて居ないとすれば、その反省が嚴密を缺いて居るのではないであらうか。自分のたくましき疑ひは執拗に頭を擡げるのである。かく疑ふのは自分があまりにも無邪氣でない爲であらうか。確かに自分は他人と比較してイン丿センスの德に乏しいかも知れない。或は自分は所謂變態性慾の持主なのであらうか。自分は性慾に關する科學書を讀んで、自分が特に變態性慾であるからではなく、一般に男子はかくの如き傾向を持つ者と考へる事の事實に近いのを感ずる。故に自分としては自分のみでなく、恐らく何人も一般に無邪氣なる

肉交をなす事が困難なるものであらうと推測せざるを得ない。只その困難の程度は人々の肉体習慣境遇教養等の相違に依つて異なるのであらうと推測せられる。思ふにかゝる無邪氣なる肉交の困難となれる原因は人間が意識的生活を營むに到り、動物のインノセンスを失ひ、しかも文化の進むに從つて社會生活が複雜となり、意識作用が益々分化して、想像力が纖鋭となつて來た爲であらうと思ふ。故に人間の肉交は近代人にあつては無邪氣ならざる事を常態となすに到つて居る。そして智識の發達した、想像力に富んだ文明人程、かゝる不純なる動機を混淆し易く、且つその有邪氣さは複雜にして巧妙となり、即ち惡質となつてゐる如く見ゆる。故に近代人が正しき肉交をなさんと欲するならば、修養によつて無邪氣の德を獲得する事によつて、再びインノセンスの狀態を回復する他に道はないのではあるまいか。我等の求む可きものはかゝる意味の德による無邪氣さである。智慧の果を喰ひし罪によつて、一度び失ひたる樂園は、我々の德によつて贖はれなければならない。動物の無邪氣さは、もはや人間より永久に失はれた。人間の無邪氣さは動物の狀態に立ち

返へる事によつては得られない。只修徳によつてのみ得られる希望を持ち得るのである。我々が若し眞に無邪氣さに達し得るならば、我々は肉交する事によつて、他人をも自己をも傷つける事なく、從つて罪を意識する事なく、朗らかに、自然に、自由に肉交する事が出來るであらう。然し此の無邪氣さに達しない限り嚴密の意味に於ては多少とも肉交する事によつて他人と自己とを瀆し、從つて罪を意識し、後めたき思ひを感じないわけにゆかないであらう。故にもし罪を避けん事を欲するならば、無邪氣となり得る迄は、我々は肉交を斷たなければならない。それに就いて自分は西田氏から聞いた極めて深い暗示に富んだ一つの話を思ひ出す。

昔、支那に或る高僧があつた。此の僧は絶對に女色を斷ち、衆人の歸依が厚かつた。が、此の僧が最も尊敬してゐる一人の師があつた。その師僧が地を轉ずるごとに、弟子の高僧も亦衆人の懇請にもかゝはらず、その地を離れて、師僧の後を追うて地を轉じてゐた。それ程その弟子の師に對する尊敬は深かつた。然るにその師僧は自分と結緣する婦女て多く

の女人と肉交してゐた。そして自らそれを恥じる氣色も無かつた。然かも、その師僧も久、衆人から尊敬せられ、歸依が厚かつたと云ふ事である。此の一見不思議なる話の暗示する深き意味を考へて見たい。西田氏の解釋は次の如くであつた。師僧は性慾に關しても亦、他の總ての事に關してと同じく、稚氣を極めてゐた。即ち德によつて眞の無邪氣さに達してゐた。故に師僧は肉交によつて罪を感ずる事なく、從つて羞恥を感ずる必要がなかつたのであらう。水の流れる如く、陰陽の兩極が相牽引するが如く、女人と交る事が出來たのであらう。然るに弟子の高僧は、未だかゝる無邪氣さの境に達する事が出來なかつた。故に此の僧が女人と[illegible]はれば、自他を瀆し、罪を感じざるを得ない。故に女色を斷たざるを得なかつたのであらう。然しその弟子の僧も亦、師僧の如き無邪氣なる境地を理想として此れに到達せんとして精進してゐたのであらう。故に自分の及び難きを感じ、師僧を尊敬する事益々深かつたのであらう。その點に於いて、師僧は弟子の僧よりも一層恵まれてゐたのであらうと。自分は此の話の暗示する意味に深き興味を感ずる事を禁じ得ない。我々

は若し正しく肉交せんと欲するならば修德によつて師僧の如き無邪氣さに達しなければならない。そしてかゝる無邪氣さに達し得る迄は、若し罪を避けたいならば、弟子の僧の如く肉交を斷たなければならないのではあるまいか。

然し乍ら、かゝる無邪氣さは思ふに肉交のみに就いて達する事は出來ないであらう。我々の人格が、無邪氣さの德を得て、その人格の產む行爲は他の百般の事に亘つても又、無邪氣なるに到つて始めて性慾に關しても、無邪氣なる事を得るのであらう。故に我々の求む可きは一般に無邪氣さの德である。自分は此の無邪氣さと云ふものを實に尊い、天的の德である事を、此の頃泌々と感じるものである。何ものも無邪氣さ程美しいものはない。努力も美しく、反省も美しい。然し無邪氣さは尙美しい。そこには天衣無縫の美がある。自由がある。自分は省みて、自分に無邪氣さの足りない事を感じないわけにゆかない。總て意識的なる事は最後の境地ではない。又、種々の深き罪惡の源である。特に對人關係に於いて無邪氣さは如何に尊い德であらう。無邪氣さが支配しない限り、如何なるカルチユア

も、心使ひも愼み深さも、眞に幸福なる交りを産む事は出ない。對人關係の一種である肉交に於いても、無邪氣なる人程、自分が前に上げた如き五種の動機を混淆する事少なく、從つて罪を造る事が少ないであらう。無邪氣なる人程肉交を肯定し易いのはその爲である。

然し乍ら此の無邪氣さに二種ある事を知らなければならない。一つは生得の無邪氣さであつて、一つは修德によつて贏ち得たる無邪氣さである。前者は動物の持つ無邪氣さに近く、極めて尊いものであり、普通の場合に於いては修德による無邪氣さよりも美しいものであるが、然し、我々の眞に求むべき無邪氣さは後者であつて、それが最も高き狀態に達したる時は前者よりも更に美しいものである。而して生得の無邪氣さを惠まれたるものは、却つて此の最も高き無邪氣さに達し難き危險を持つものであつて、我等の求む可きは、意識的なるものが、意識的に修養して、意識より離れたる境地である。自分はかゝる意味に於いて無意識的となり、無邪氣とならん事を念願する。かゝる境涯に達したる時、我々は肉交を罪惡と感ずる必要を感じなくなるであらう。

然し乍らこゝに尚一つの重大なる問題が殘つてゐる。無邪氣さは人間の最も尊い德の一つではあるが、人間の求むべきものは此れのみではない。無邪氣なる肉交は罪惡を含んではゐないが、我々は罪惡でないと云ふだけで滿足すべきでなく、我々の趣味、理想によつて許されたる行爲の中から撰擇しなければならない。戀愛に就いての我々の理想、構圖によつて肉交を適當に處理する事は我々の自由である。そこに人々の戀愛觀の相違が生ずる。人々は自分の最も美しいと信ずる戀愛觀に從つて戀愛し、肉交の問題を取扱ふ可きである。自分一個は、たとへ無邪氣な肉交であつても、自分の描く戀愛の最も美しき構圖からはこれを拒斥したく思つてゐる。性慾は前にも述べし如く、造化が生命に附與したる根本要求であるが、それは方向を附けられたる可能性の形に於いて與へられてゐる。生命が進化するに從ひ次第にその可能性を分化發展して、その最後の階段に达達す可きものである。動物の狀態に於いては、性欲(廣義の)は極めて肉體的であるが、人間に於いては次第に精神的要素を增し。我々が戀愛と呼ぶが如き形式となつて現はれ、その戀愛も又、人間の文化

の度に從つて精神的となつてゆくものであらう。その意味に於いて我々は許されたるものゝ內にも、高低の差別を附する事が出來る。即ち造化が附したる方向にむかつて、より多く可能性を分化發展したる性慾は然らざるものより、より高いと云ふ事が出來る。而して我々はより高きものを追ふ可きである。故に我々が性慾に就いて努む可きは、性慾に就いての此の方向を直感して、それに隨順する事である。素より性慾の中に含まるゝ可能性の如何なる分部をも否定するのではないのである。その意味に於いては如何に天的なる戀愛と雖も、造化が始め附與したる性慾に他ならない。只その性慾がそれ自身を最高の階段迄分化發展したるものである。換言すれば性慾に關する造化の意匠が成就したるものが天的なる戀である。かゝる戀愛の構圖は德高きものゝ直感によつて想像されなければならない。その構圖の淨さ、美しさ、豐かさによつてその人の靈魂の價を計る事が出來る。天與のよきものゝ一つをも逸せずして最高の構圖を描かなければならない。我々はその構圖を實現せんとして努力すべきである。無邪氣なる肉交は罪惡ではないが、

低きものである。天的なる戀愛は肉交なくして性慾が飽和するものでなければならない。此れ性慾を淡くせしめたる結果でなく、淨めたる結果である。その人は最早肉交せずして、低きものが肉交によつて感ずるよりもより大なる滿足を感じ得るのである。例へばフラ・アンゼリコの描く天の使を見よ。我々はそれに對して性的なる悅樂を感ずる事が出來る。然もその悅樂は性慾を除去する事によつては決して得られない種類のものであり、只、性慾を高め、淨める事によつてのみ達せられる悅樂である。その優美なる姿に接する時、我々は男性としての女性に對する特殊の悅樂を感じ得る。その美しき首筋や、肩や、又、衣裳を見る時、我々の心は溫められ、慰められ、性慾的に滿足させられ乍ら、然も肉交の衝動に誘う如きものを感ぜず、美と淨さとに支配されるのである。肉交の衝動のみならず、激情(パッシヨン)や、苦惱(ライデンシヤフト)の如きものも恐らく戀愛の低き階段に屬するものと云つていゝであらう。又、戀人の愛を獨專せんとする所有慾や、その慾望が滿されざる時に生ずる嫉妬の如きも又、戀愛の低き階段に屬するものであらう。天的なる戀愛は肉交の衝動なく、苦惱や激情なく、

靜かなる愛をもつて戀人に對し、且つ愛を相手に強要する事なく、例へば一つの美しき繪姿に對して起る如き戀慕の感情でなければならない。その靜けさの中に、燃ゆるが如き熱情が高められ、浄められて深く籠つてゐるのである。かゝる戀は理想崇拜のこゝろと密に相通つてゐる。そこにはもはや肉慾なく、苦惱なく、嫉妬や、鬪爭なく、又激情さへもなく、只靜かなる美のみが支配するのである。然し乍らかゝる戀と雖も造化が始め生物に附與したる性慾を排除して得られたのではない。それが純化されて、その內の精のみとなつたのである。若しそれが排除されてゐるならば、その美は或る一種の美ではあつても、我々を性的に喜こばせる事は出來ない。その靜かなる美の中に、我々を性的に樂しませる微妙な密があつて、それが我々の性に對する慾望を飽和せしめるのである。かゝる戀の中に含まるゝ忘我的なる「樂」は戀愛の低き階段に於いて男女が肉交の絕頂に於いて感ずる蠱惑的快樂に比して決して劣れるものではなく、むしろ遙かに恍惚たる甘美である。

我々は何らの先入主なき心にて觀照する時と雖も、肉交する時の激情、盲目的狀態、肉

交の形及び肉交の與へる快樂そのものゝ質に對して天的なる感じを持つ事が出來ない。そこには低き粗野なる、地的なる感じの伴なう事を免れない。そのもの肉交のを文學や、美術の對境となし得ないのもその爲である。春畫の感じは、或る實感的快感を與へ得るが、美觀を與へる事が出來ない。ロダンの「接吻」の彫刻の如きでさへも生命の或る段階の美を充分に與へ得るが、それは遂に地的なる美であつて、天的なる美ではない。地的とはその中に罪惡を含んでゐるか、或は、理想的境地に對して低きものを含んでゐるかによつて生ずる感じである。肉交の與へる快感は如何に忘我的であつても、地的なる感じを含んでゐる。總て人間の官能的快感は造化がそれを通して天的なる感じに達せしめんとする手段である。例へば、味覺に於て天甦羅の如き味は玉露の味より低いと云はなければならない。佛教にその宗教的快感を「甘露法の食」と云ふが如きは、味覺を通して天的なる快感を表現せんとしたるものであり、又、佛身は毛穴より栴檀香を發すると云ふが如きも、嗅覺を通して天的なる感じを表現せんとしたるものであつて、この間の消息を傳へてゐる。我々は

て、より高きものである。而してかゝる戀愛に於いては、恐らく或る個人を個人が所有し、束縛するが如き限られたる關係でなく、男性としての全体が、女性としての全体と相牽引し、調和する事、譬へば二つの花の輪が相交る如き自由にして、豐富なるものであらう。そこに自由戀愛の最も美しきイデアが存在する。かゝる最も淨く、美しく、且つ自由なる天上の戀愛の構圖こそ恐らく造化が生物の性慾の中に豫め意匠して與へた可能性の最後の開展であつて、實に性的の壯觀である。我々の戀愛の理想として追ふべきものはかゝる構圖でなければならない。然し乍ら此の最高の段階に達する迄には無限の段階がある。戀愛はそれぞれの段階に於いてその程度の美を持つてゐる事を、自分は否定しやうとしてゐるものではない。戀愛の情熱や、苦惱や、激情は人間性の或る段階に於ける美と、價とを持ち、我々を感動せしめ涙

ぐませるに足る。又種々の人間的なる美しき感情に伴なはれる。嫉妬さへもその現はれ方によつては、人間的な美を現はし得るのである。我々はかの若きウェルテルの苦惱や、お七の如き情熱や、近松が好んでその藝術の題材となした多くの情死の如きに於いて、充分に人間的なる美と涙とを感じ得る。又、戀人同志や、夫婦の間に於いて現はるゝ愛護や、奉仕や、犠牲や、貞操の如き、人間的なる德の美しさを感じ得るのである。又、肉慾的なる性慾（廣義の）と雖も、天的なる美感に高めらるべき材料としての價値は充分に持つてゐるのであつて、それは種々の間接的なる表現に於いて、ベールをつけて現はれる時には或る特殊な美をも持つ事が出來る。かの浮世繪の如きは、最もよくその美を生かしたものであらう。自分はアンゼリコの描く如き天使や、詩神（ムーゼ）、藥師寺の吉詳天の如き天女、或はダンテの描く如き淑女を女性の理想的なるものとして求めるが、それは始めより全然肉體的の感じなきところより生ずる事は出來ないであらう。その意味に於いては、自分はかの浮世繪の示すが如き閨怨と云ふが如き味に美を感じ、これに惹かれるものであり、かゝる

感じの全然缺けたる女を女として愛する事には困難を感ずる。自分はむしろかゝる感じを材料として出發し、これを高め、浄める事によつてアンゼリコの描く如き天使の美に迄達したい。その時始めて我々の性慾を飽和せしめる天的なる美感に達し得るであらう。併し乍らそれにもかゝはらずこれらの肉慾、激情、苦惱、嫉妬等は畢竟「人間的なるもの」であつて、ニイチエの云ふが如く「超越せらるべきあるもの」である。我々の理想とすべきものは飽く迄も最高の段階に於ける戀愛でなければならない。我々がこれに達し得ると否とにかゝはらず、かゝる理念を精進の標的としなければならない。かゝる夢の如き構圖も、理念としては動かすべからざる確なる現實である。我々は所謂「空想」の價値を充分に認識しなければならない。而して所謂「現實」の價値をその當然要求し得る權利の範圍に制限しなければならない。我々は現實の觀念を哲學的に反省する時西田氏の云ふが如く夢の如き空想も亦、理念としての現實性を要求し得ることを知るであらう。我々の日常生活に直ちに當てはまる法則や、實際的効果を生じ得る便宜上の制度や、又、或る目的に奉仕す

る道德や、此れらは無論價値あるものであるが、我々の最高の理想を設定する時、此れらの多少とも功利的なる尺度を持つて計つてはならない。理想と現實との一致と云ふ事を卑近な意味で要求してはならない。素より理想と現實とは一致すべき筈のものである。併しそれは理想が高遠なればなるだけ、直ぐには一致しない。我々の最上の理想は此の地上に於いては、むしろ實現されざるものであつて、それは天上に於いて、あの世に於いて、或は無限の未來に於いて、始めて實現される可きものである。此の意味に於いては、理想と現實とは、現實の生活に於いては一致しないのを常態とする。併しそれだからと云つて理想の價値がないのではない。理想は實現されると否とにかゝはらず、それ自身に價値である。その意味に於いて理想は神聖である。獨立である。それは元來詩的なる可きものである。詩人の頭腦にその最も惠まれたる瞬間に宿る可きものであつて、散文的なる、現實家の實際的なる工風より生じ能はざるものである。或る人類の一人が、或る惠まれたる瞬間に、或る非常に高い理念に達し得たと云ふ事は、人類の文化の記錄として、人間の價値を

決定するものであり、人類は此れを最も祝福しなければならない。我々が人間を如何なるものかと省みる時に、その内なる、只一人の人間の、或る瞬間の心にかゝる美しき構圖が宿つたと云ふ事は、人間をかくの如きものとして値踏みする事を得る點に於いて、人類の希望であり、力である。例へばフラ・アンゼリコ一人が或る心靈の惠まれた狀態に於いて、聖衆俱會の美しき繪を描き得たならば、人間の多數が僕の如く相爭つてゐても、人間はかゝる美を描き得るものとして、即ち理念としてかゝる美を所有してゐるものとして、如何に心强く感ずる事が出來るであらう。この事は決して小さな事ではない。萬人の希望である。人類の力である。理想は如何に空想的に見えてもそれが當にあるべき世界として、最も眞理を含んでゐるならば、これを尊重しなければならない。此の意味に於いては人類の理想を設定する人は、如何なる實際家よりも人類の恩人である。

併し乍ら、自分は當にあるべき戀愛の理想として我々の追ふ可きものが前述の如きものであつても、我々がこれに到達するには種々の困難が横たはつてゐる事を無視しやうとす

るのではない。そこには人間として打ち勝ち難き多くの人間性が超越されなければならない。即ち第一に性慾が肉體的なる衝動より超越されなければならない。第二に戀慕の感情がパッションとライデンシャフトより超越されなければならない。第三に嫉妬が超越されなければならない。此れらの人間性を超越する事は、超人的努力を要する困難なる精進であるのみならず、かゝる理想を、理想として承認し得る事が、既に精神生活のある體驗によつて、種々の時代を通過する事を必要とする。戀愛觀は個人の思想の成長するに從つて成長する。始めて戀愛に目覺めたる青春時代にあつては、その最も眞面目なるものと雖も、恐らく肉交の衝動や、パッションや、ライデンシャフトや、獨占の要求に伴はれる事を避けられないであらう。否、むしろ眞劍であればあるだけ、此れ等の要求が力強く伴なうであらう。例へば自分の一異性の内に自己を見出さんとする心に現はれたる如き戀愛はその最も典型的なる例であらう。併し乍ら、青春期の動亂を通過し、我々の精神生活が次第に圓熟し、靈魂が靜平となるに從つて我々の戀愛觀も又、青春時代のそれとは相違してく

る、蓋し青春時代にあつては、我々は急激に發育しつゝある、肉體及び精神の動搖の中より眺める。併し壯年期にあつては發育すべきものは發育し、人性のあらゆるものが、一つの均衡を保ち、靜平に反省し得る時期に達するのである。前述の如き戀愛の理想の構圖は、かゝる時期に達したる自分が、性慾（廣義の）に關する自分のあらゆる直觀、戀愛の種々なる事相を資料とし、未だ開發せざる戀愛の可能性に就きて洞察し、又、優れたる先人の暗示を鍵鑰とし、自分の藝術的直觀によつて造つたものであつて、現在の自分は、自分の戀愛を此の理想に到達せしめんとして精進してゐるものである。併し乍ら、今後自分の靈魂の一層成長して行くにつれて、此の構圖も又、多少變化して行くであらう。併し大體に於いて、現在の理想が動かざる基礎となるであらうと推測せられる。青春時代と、現在との如き著しき相違は恐らく今後生じないであらう。壯年期に於いて戀愛と性慾に關する殆んど總ての考察の資料、及び、考へ方が準備されるからである。老年期に於いては、恐らく壯年期に建てられたる戀愛の理想がその生理的なる障害を減ずるに從つて完成されて行

くのであらう。此の意味に於いて、生理學者等が戀愛の衰退期となす老年期は、靈魂的なる戀愛の完成する時期であると考へ得る根據がある。此れは決して空想として斥けられる可きでない。自分はホウガッァロの聖者の中にある老牧師の戀を思ふ。又、ケーベル氏が生理的に性的生活を卒へた四拾歳以上の婦人が、地上に於いて最も美しいと云つてゐる言葉から、或る暗示を受ける。戀愛に於いて生物學的根據は、その低き階段に於いてのみ主として力を持ち得るのである。人間の性慾（廣義の）は戀愛として現はれ、人間が高尚となるに從つて精神的要素を增し、最も高められたる人間に於いては、むしろ靈魂が生物學的根據を超越せんとする淨めの過程が戀愛の動機である。生物學者が戀愛の唯一つの目的の如く考へる生殖も、戀愛のある階段に屬するものであつて、造化がかゝる實際的目的を戀愛の或る階段に於いて果しつゝ、しかもその目的にも奉仕しない一層高き階段に迄、分化發展せしめやうと企てゝゐる所に微妙な匠みと、深長な意味がある。かゝる意味は詩人や哲學者の直觀によつてのみ洞察する事が出來る。かの花の美は實を結ぶと云ふ目的の手段

に過ぎないとなすが如きも淺薄なる觀察である。自然は花の美を、實を結ぶ手段として用ひ乍ら、しかもその目的より離れて、此の世界を飾るのである。戀愛生活の或る階段に於いて、生殖と云ふ實利は果され、而して此の實利は超越されて、最後に一つの何等の目的なき「遊行」の世界「極樂」の境に達するのである。かゝる思想の根據は直感なきものに說明する事は不可能である。

併し乍ら、前述の如き戀愛の理想に照らす時、我々の婚姻の觀念は如何なるものとなるであらうか、自分は理想的意味に於いては婚姻は「男性なるもの（ダスメンリツヘ）」と「女性なるもの（ダスワイブリツヘ）」との諧和であると思ふ。或る個人の女と、個人の男との結合ではないと思ふ。理想的なる婚姻は、全体と全体との、群と群との、輪と輪との結合である。地上の所謂婚姻は此の天上の婚姻の面影を寫す型であつて、不完全な、限られた、テンポラルなものである。一個の男子は、一個の女子に對つて「女性なるもの」を求める。併しその願望は、現實の個々の女によつては滿たされない。個々の女は「女性なるもの」ゝ屬性を分有する限りに於いて

男子の戀愛の對照となる。女子が男子に對しても恐らく同樣であらう。故に或る一個の男子と、一個の女子との婚姻は、嚴密なる意味に於いては理想的でないと云はなければならない。一個の男子が、一個の女子の中に「永遠の女性」を見出し得ざる限り、その結合には無理を含んでゐる。此の意味に於いて、「一夫一婦」は嚴密なる意味に於いて、且つそれ自身の意味に於いては固執する事は出來ない。理想的には戀愛は絶對的に自由でなければならない。戀愛はそれ自身に於いては、何ものゝ束縛をも受く可きではない。併し人間が限られたるものであり、戀愛のみが人性の唯一つの願望でない爲に、他の種々の願望との關係に於いて戀愛が制限を受けなければならないのである。此の意味に於いて制度としての一夫一婦には倫理的根據を生じて來る。併し戀愛に關する制度は戀愛の理想に合致するだけよりよき制度である。戀愛の理想のみの合目的性（ツウエツクメシツヒカイト）によつて、制度を立てる事は出來ないが、出來得る限り戀愛の理想に合致せる制度を立てる可きである。此の意味に於いて制度は改造されて行かなければならない。戀愛のみより云へば、夫婦を認めざる多夫多

婦の自由戀愛の制度が最も合理的である。併し他の願望――例へば、人と人との間を平和ならしめ、嫉妬の苦痛を減少せしめ、子供に對して責任を持ち、結合を緊密ならしめる等――との關係に於いて一夫一婦の制度には人性の要求に適合する點も多い。又愛護や、犠牲や、奉仕等の美しき德が、特にこの制度から養はれる事も事實である。併し乍ら一夫一婦の制度には、他に多くの不合理や、不正なる動機をも含んでゐる事も免れない。此れらの點に關しては、別に一論文を書いて詳しく考察したいと思つてゐるからこゝには省畧するが、自分は一夫一婦の制度を否定せんとするものではない。只戀愛の理想のみに就いて考へる時には、戀愛は本來絶對に自由である可き筈のものである事を主張する。我々は理想は理想として認め、併も現實の問題は現實の問題として考察しなければならない。此の兩者を混同する事は、思索を不純にし、理想を卑近にするか、或は現實に迂濶になるかの結果になる。理想は飽迄も理想として立て、現實はあく迄も現實として認識し、しかもその間に無數の階段を認めて、それぞれの階段に於いて價値を認め、最高可能の段階に

於いて現實の問題を解決しなければならない。例へば自分は戀愛の理想としては肉交を排斥するが、無邪氣なる肉交は否定しない。又、假令絶對に無邪氣ならざるも、人間性の或る段階に於いて、例へば夫婦や、戀人同志の間に於いて行はるゝ肉交を嚴しく非難しやうと欲するものではない。肉交ある夫婦を、只その故に醜き夫婦となすものではない。素より夫婦間の肉交も、肉交の醜きものは醜さを認め、たとひ無邪氣なるも理想としては避くべきであるとは思ふが、好んでその醜さを穿鑿するが如きは心なき業である。又、青年や、處女に獨身を勸めるが如き事も自分は決してなさない。自分はかのファン・エックの描いたヨセフとマリアとの繪の如きから夫婦の調和した美しさを充分に感じ得るものである。耶蘇は自分は獨身であつたが、そして「天國に於いては娶らず、嫁がず」と云つたが、花嫁と花婿との婚姻は地上の最も美しきものゝ一つとして祝福した。西田氏が純粹經驗にも程度の差があると云ふ如く美にも善にも無數の段階がある。理想を追ふのあまり、段階を認めざるものは禍ひである。最上の理想を立てながら、しかも無數の段階にそれぞれの美

と善とを發見し得るものは幸ひである。そこに視野の廣さがあり、光景の展望がある。自分は種々なる段階の戀愛を体驗し乍ら、遂に最上の段階に於ける戀愛を喜こんで享け樂しむ境に達せん事を念願する。

一九二二・四・一一

附記。戀愛と結婚制度に就いては近き將來に於いて自分の意見を發表したいと思つてゐる。

藝術家としての願訴

自分は此處に一人の藝術家として、特に病める藝術家として自分に好意を持つて下さる讀者に願訴したいのである。此の事は或は自分が當然の權利として要求していゝ事なのかも知れない。或る時期に達すれば自分もそれを敢へて爲し得るに到るかも知れない。かく爲し得る根據を今の自分と雖も可成りな程度まで感じる事が出來ないでもない。併し今の自分は自分がそれを敢へてする事には或る無理と拘泥とを感じないわけにゆかない。故に自分は權利として要求するのでなく、願訴として申し出でたいのである。

一般に一人の人間が同胞に奉仕せんとするに當つて、必ず逢着する困難な問題は人類に對する奉仕と、個々の隣人に對する奉仕との間に生ずる經濟的――時間的空間的――矛盾である。此の事は「千手觀音の畫像を視て。」の中に於いて書いた如く、我々が佛でなく、天人でなく、人間である限り、避ける事の出來ない困難である。殊に一つの公けな仕事――使命を持つ者に於いて此の困難は切實である。我々の精力には限りがある。萬人の個々のものに盡く奉仕する事は不可能である。故に我々の撰ぶべき道は一つの仕事をもつて文化に貢獻する事に依つて間接に人類に奉仕する道と、及び緣あつて

若し或る畫家があつて、氏に道を求めれば、氏は先づその畫家に畫家たる使命を斷念せしめ、繪筆を投ぜしめて、托鉢を勸める。そして甲の家に病人があれば看護に赴き、乙の家に炊事人が要れば、炊事を手傳に行くと云ふが如く、因緣によつて個々の人に奉仕せしめる。文學者たらんと志して道を求めた自分も亦、斯くの如く勸められた一人であつた。氏は自分への書信で、「一つの事業を成して、自己の痕跡を此の地上に印せんとするが如き小さな考へは捨てられたい」と勸めた事もある。氏は進化と云ふ事を認めない。世界は昨日よりも今日が進步したと云う如きものでなく、不增、不減、不垢、不淨と云うが如き一定した世界であつて、人がその煩惱の雲霧を掃ひ、本然の道に立ち返へれば、本來の光明世界が現出すると云ふ思想である。斯くの如き氏の思想からは、或る藝術をもつて文化に貢獻する事によつて、人類に奉仕すると云ふ道が尊重されずして、自己の希望を捨てゝ隣人への直接の愛の奉仕に專らならんとする道が撰はれるのは當然であらう。併し、自分は氏と同じ世界觀、乃至人生觀に立ち能はざるものである。自分は「積極道」にも書いた如く、宇宙の進化を認めるものである。從つて人類の文化に貢獻ある仕事を成就する事によつて、一時に萬人に奉仕する道の存在する事を肯

定するものである。否、むしろ個人が此の世界に於ける存在の意義は、此の世界の進歩、人類の文化に少しでも貢獻する事業を成すところに、その最も公なものを存してゐると考へられる。我々は與へられたる生命を感謝して受け、個人の慾望として享樂し、創造し、又徳を積んで、個人として立派な人格となると云ふ純粹に個人的な生活の外に（かゝる生活も正しきものとして許さる可きものであるが）人類全體の享樂と、創造と、成長とを自己の慾望として感ずる生活に於いて、其の最も公な意義を認めるものである。即ち我々は自己の周圍を享樂し、小兒の如く遊戯し、花鳥風月を眺め、異性を戀愛し、小兒を愛してもそれは被造物として正しき生活として肯定されればならないのであるが、又その外に人類全體の進歩に貢獻せんとする慾望に於いて、超個人的な公な意義を認めなければならない。宇宙が自分と云ふ一個の存在を許したのは、自己と云ふ生命そのものを愛したからではあるが、又宇宙と人類に何事かを貢獻せしめんとする爲であつたと考へる深い根據がある。そこに個人の使命の觀念が生ずる。この世界の進化を認める人生觀と、使命の觀念とは分つべからざるものである。宇宙の進歩と、人類の成長とを認める武者小路氏が強き使命の觀念を持つてゐるのは當然である。そこに西

田氏と武者小路氏との人生觀の相違があり、從つてその撰ぶ奉仕の道が相違してくる理由がある。併し乍ら自分の考へでは、人間は使命の爲のみに存在の意義を持つてゐるものではなく、又奉仕の爲のみに存在の意義を持つてゐるものでもなく、人格の成長の爲のみに存在の意義を持つてゐるものでもなく、其の外に純粹な、個人的な享樂の爲にも存在の意義がある事をはつきりと肯定して置かなければならない。生を與へられたるものが、その生を受け樂しむと云ふ事は實に從順な、自然な慾望であつて、屹度神が許してゐると自分は確信するものである。自分は此れを肯定しない努力主義、修養主義、奉仕主義には反對する。これを肯定しない時に、人間の生活は乾いた、餘裕のなさ、四角四面な興味少なきものとなるであらう。自分はかの蟻の如く營々たる生活や、又山伏の如く血眼になつて息き込む行者的禁慾的修業を、人間の當にあるべき生活の姿として、自然な、適當なものであると思へないものである。其の點レッシングの作品の如きは、最も自分の心に適ふ氣がする。武者小路氏はかゝる種類の享樂を認めてゐるが、西田氏はその點不滿を感じないわけにゆかない。我々は自分の使命の爲に働らく時でなくても、個人的の接觸を自分の樂しみとして營んでいゝ。必らずしもそれを個人に

對する奉仕としてのみしなければならない事もない。人間の生活として使命の爲のみに生きて、個人に對する接觸を缺ぐ事は面白くないが、それも奉仕としてのみするのでは面白くない。自分は今便利の爲に問題を局限して手紙の事のみに假定する。自分は他人に手紙を書く事は或る使命を持つものにとつても必要な奉仕であると思ふが、又それを奉仕の爲でなく、人と人との愛の交りとして樂しみたい。自分は藝術家としての使命を感ずるものであるが、又個人への直接の奉仕として手紙を書き、且つ樂しみとしても手紙を書きたい。泌々と個人に手紙の書けない如き生活は人間の生活として好ましくないものではないかと思ふ。自分はよき作品を産む事によつて間接に人類に奉仕する事が出來るが、その作品の材料となるものは自分のプライヴヱートな生活である。自分の少數の友人〃・家族や、愛人やとの生活である。故に自分が依つて以て人類に一時に奉仕せんとする仕事は、個々の隣人への奉仕の道を豫想してゐる。「愛を個人に切り賣りする事は出來ない。」と云ふ武者小路氏の考へ方には、深い眞理がある事を自分は充分に認め、自分が此の願訴を成すのもその自覺ある爲であるが、併し猶或る疑問と拘泥とが自分には殘る事を感ずる。我々は先づプライヴヱートな生活をし、隣人との個々の

交りた材料として出發しなければならない。愛を一時に萬人に與へんとのみするならば、その藝術の材料は涸渇する。淡々とした私的生活は藝術に缺ぐべからざる源泉である。自分はこゝに藝術家としての使命を有する病人として、且つ上述の如き私的生活の享樂と奉仕との願望を持つて、手紙の往復と云ふ一つの生活行爲に對してゐる。その時自分には如何なる事情が生ずるであらうか。第一に自分は病人であつて、自分が健康を保ちつゝものを書き得る時間は實に尠ない、(それさへも筆を取らないに越した事はなく、少しでもものを書くと云ふ事は自分にとつては已でに養生と矛盾してゐるのである。)自分が受取る手紙の數は實に夥しい。それに對して一々淡々とした返事を書く爲には自分に與へられた總ての精力を捧げても尙足りない。而かも自分の藝術家としての使命は出來得るだけ精力を仕事以外のものに割かない義務を命じてゐる。故に自分が忠實な藝術家である爲には、手紙の爲に捧げる時間を可成りの程度迄制限する事を餘儀なくされる。故に自分は一々の人に簡單な返事を書くか、或る手紙だけ撰んで返事を書くかしなければならない。そして自分の私的生活の樂しみとしての手紙を書く事を出來るだけ制限しなければならない。事實自分はこの種の手紙を書く事は殆んどないといつ

ていゝ。自分は愛人にすら殆んど手紙を書く事はない。この事は上述の如く私的生活を肯定し、且つ重んじる自分にとつては可成りの犠牲である。自分は少なくとも自分の愛人へは泌々とした手紙を書きたい人間である。併し自分の使命と、隣人への奉仕は自分にその幸福をさゝげものとさせてゐる。而かも隣人への奉仕の手紙も實に少しゝか書く事が出來ない。自分はこの事を自分の生活の内の最も苦しき事の一つに數へてゐる。自分に愛を持ち、溫かい心を寄せた人が返事を受取る事が出來なかつたらどんなに寂しいだらう。殊に自分の煩悶に就いて助力を求めに來た時に返事を貰へなかつたらその寂しさは怒にも變る程であらう。實際自分はさう云ふ人に出合ふ事が屢々ある。自分の本を讀んでは溫かい心を持つてゐてくれた人が、その心を寄せて來たことが原因となつて、心を閉じ、甚だしきは憎みを抱くと云ふ事は何と云ふ不合理であらう。本を讀めば愛の深さうな人が、觸れて見れば冷淡であると感じて、その事から人生に對する信仰を失なふならばどんなに恐ろしい事であらう。而かも自分には毎日さう云ふ事實を經驗してゐるのである。自分は、この不幸な事實は自分の事情の實際を讀者が理解してゐないところから生ずると思ふ故に、その詳しき心理的及實際的事情を述べて諒解と寛恕

とを求め、且つ自分の方から願訴したいのである。それらの手紙の中には實に困難な身の上相談が含まつてゐる事が多い。併しこの事は少し許りの手紙などでとても解決出來るものではない。自分が責任を重んずるだけ容易く解答し難い事が多い。これらは、その實際の事情を正確に知つた上でなくては、輕卒に助言を成し得るものではない。彼の新聞雜誌等の身の上相談などの答を見る時に自分は慄然とする。最近にも自分は或る人の事件に關係して、現實問題の適當な助言と云ふものが如何に困難であり、且つ効果に乏しいかを痛感した。（而かも當時者に屢々面會した上であつたのである。）殊に現實問題に關する智慧に就いて、不得意な自分は尙更である。自分の問題は結局自分で解決する外はない。それらの相談には獨立心の缺けた、自分勝手なものも少なくないが、眞面目なものであつてもこれに答へる事は實に困難である、それに答へる爲にはその一人だけに就いて、數十本の手紙を書かなければならない。（それでも手紙などでは到底答へられない事の方が多い。）この事は他の多くの人々への奉仕を怠る事なしには不可能である。又思想上の相談に就いても、本の讀み方が粗雜であるか、又熟讀しても理解できない人に對して、數回の手紙で理解せしめる事は到底出來ない。自分の思想を出

來得るだけ綿密に、委曲を盡し、且つ最も情熱を籠めて著書の中に書いてある。手紙に如何に詳しく書いてもそれ以上に出る事は出來ない。凡そ思想家（藝術家）に對してその思想を著作以外のものでより詳しく實さうさする事は間違ひである。この種の問ひに對しては自分はその人を滿足せしめる事は到底出來ない。その人は自分で考へるか、他の人の著作に就くか、又は自分の新らしい著作の出るのを待たなければならない。斯くの如くして自分は恐らく其の人を滿足せしめる事の出來ない、效果乏しき多數の手紙を書いてゐるのであるが、疲勞を感じ、心が乾き、精力の浪費を感ずる事が多い。人は同じやうな手紙を多數書けば事務的となつて、心が凋れるものである。この事は人間の私的生活に取つても、又藝術家としても實に惡い狀態である。殊に藝術家は何よりもなみ〳〵と湛えた、潤ひと、感興とに滿ちた心を保つてゐなければならない。自分は返事を出さないよりはいゝと思つて、多くの人に簡單な手紙を書いてゐたが、自分の心が凋れるのを感ずる。かくして自分と結緣深きものとの私的生活を粗略にして行く事は藝術の材料を枯渴せしめる結果とならないでは置かない。これは藝術家に取つては實に恐ろしい。自分はやはり緣深き少數の人々に人類の名に依つて泌々と接觸する事

によつて、隣人への奉仕を盡くす事のふさはしい事を感じざるを得ない。自分は藝術家に缺ぐべからざる讀書さへも殆んどなす事の出來ない狀態にゐる。かくして多數の人に粗略な効果乏しき奉仕をなす事によつて、藝術家としての義務も、人間としての私的生活の幸福も、讀書と瞑想との時間も犧牲にする事は、賢く、適當な事とは思はれない。そればかりではない、かくの如き心苦しさの爲に自分は手紙を受取つた時に喜びを感ずるよりも、不安を感ずるやうにならうとする傾向がある。此の事は實に恐ろしい事である。それは返事を書かないより遙に惡い。手紙を寄越した人がそれを知つたらどんなに傷付くであらう。自分はせめて返事は書かなくても、心から喜びと感謝とを持つてその手紙を讀みたい。これだけはどんな事があつてもしなければならない。それさへも出來ないならば、自分は人生に對する信仰を失なふであらう。かくの如き事情から自分は特殊な境遇にある藝術家として、止むを得ず、次の如き生活の方針を立　る事を許して戴く事を人々に願訴したいのである

手紙に就いて。

一、手紙の返事は撰擇する事。自分が一番感動したるもの、急を要するもの、成るべく効果あり、且

つ容易に出來るものを先にする事。

一、答へる力なきもの、或は効果なき身上相談には返事を出さない。

一、思想上の答は著作以上に出ることの出來ないものはお答へしない。

一、別に返事を要しない手紙に對する挨拶は許して戴く。この種の手紙は返事は書かなくても、自分が心から感謝して讀むことを信じて戴きたい。

一、一日三時間の仕事と、二時間の讀書とを濟ました上でなくては手紙を書かない。三時間の仕事と二時間の讀書と云ふのは藝術家として、實に貧弱である事を知つて戴きたい。)

一、自分から返事が行かなかつた時には、上記のどれかの事情によるものと思つて戴きたい。

一、一般に手紙の返事は當然の事として要求しないでゐて戴きたい。返事が來なければ立腹するやうならば、手紙を下さる事を豫め見合はして戴きたい。併し自分は此の事には疑問と拘泥とが殘る。手紙によつて憎みの種が作られる事は避くべきであるとも考へられるが、併しそれでも結緣しないのよりはいゝとも考へられる。たとひ憎んでも、その憎みから却つて愛を増す事も出來る事もある

からである。自分にはそのやうにして出來た友情もある。（併しその例は極めて稀である。）

一、自分に手紙を寄越す事を自分の事情に同情するの餘り止めては貰ひたくない。手紙の返事を當てにしないで遠慮なく手紙は寄越して貰ひたい。その人の愛と誠心は忙がしい自分をも動かさずには置かないであらう。かくして多くの人々の中から特に緣深き友情が撰ばれるのである。結緣の機會を少なくする事は自分は決して好まない。

面會に就いて。

一、特別にお招きした時の外は面會は水曜日の午後四時迄と假りに決めさせて戴きたい。面會に就いては「千手觀音の畫像を觀て」の中に詳しく書いたからこゝには繰り返さない。午後四時迄としたのは朝から絶え間なく話すと疲勞して身體に障り、咯血する危險がある爲である。

一、談話は一時間以內にお願ひしたい。これは多人數なので一人と許り話してゐられないのと、大勢一緒では話せない事柄もあるからである。誠心を持つて一時間對談すれば交りの幸福は充分に

得られると思ふ。引き締らない心でだら〳〵と時間を費す事は今の自分には到底出來ない。自分一個としては或る時期にはさう云ふ引きずられるやうな生活をせずにはゐられない事もある事は認めるが、それを他人の前でして、同じ氣持ちでゐない人の時間を浪費させるのは間違ひである。さう云ふ氣持ちにも心よくつき合つてくれる特別な人と一緒にするのは差支へない。人間はさう云ふ親友や、愛人を必要とする事もあり、それがなくては寂し過ぎる時もある。併し相手に依らず、それを要求する事は無理である。

一、要談は手紙でお願ひしたい。自分の歡迎するのは何等の實際的目的なく、心から自分に逢ひたいと思つて下さる人で、只顔と顔と見合はせて十分間でもしみ〳〵と語り合へば幸福を感じて滿足して下さる如き人である。自分が一番嫌ひなのは、愛を感じないで、何か實際的目的の爲に訪問する人である。無論何か他人の助けを要する事がある時、自分が愛と信頼とを感ずる人に求めに來るのは自然であつて、少しも惡い事ではない。併しその場合でも自分が病人である事を考へて下さつて、私でなくても出來る事は遠慮して貰ひたい。私でなくては出來ないことだけ頼んで貰

誰れにでも出來る雜用を賴みに來る事は許して戴きたい。私に向つて實に事務的な、一燈園の人々が好んでなすやうに、雜用の奉仕は却つて人間的な、ハンブルな眞心を表はすものである。併し自分の境遇上、能率的な條件から、此の事を願訴するのである。それから愛してくれるのも當然であると思つて、大きな要求を持つて訪ねて來て、自分にそれがして上げられない時に不平を感ずる人は自分は好まない。人はどんな事でも願ふ事は出來るが、許されたものしか受ける事は出來ない。この事をはつきりと知らねばならない。願ふのはどんな事でも願ふがいゝ。それが與へられない時にはその寂しさを忍受し、與へられたものだけを感謝して受けるのが本道である。人に何事でも要求するものは、この心得が實に大切と思ふ。不德なものが愛されるのが當然だと思ふのは虫がいゝ。愛する方の側からは不德なものでも愛さなければならないが、それは愛されるものから強いるべき事ではない。不德なものが虫のいゝ要求をもつて來て、それが滿されない時不平を感ずるのは無理である。さう云ふ人をも愛し得ない事は自分の德の不足ではあるが、そ

の事は求むるものゝ無理を決してジャスチフアイする理由にはならない。

一、私の部屋に入る方は、私の方のお願ひでは、見舞に來るつもりで來て戴きたい。少しでも私を慰めて、勞を少なくしてやらうと云ふ愛を持つて來て戴きたい。

一、併し特別な事情のある人には上に述べた規約は必らずしも守らない。自分は人と人との接觸の味を硬く、薄く機械的にする事は好まない。併し獨立心と、他人に對する心使ひと、適當な禮儀、作法とがあれば差支へなくて濟むことをそれがない爲に時間を浪費する事は防ぎたい。自分は實に時間に關して赤貧である。その日暮しの人が一錢でも節約するやうに、自分は十分間でも節約しなければならない。

原稿の世話に就いて。

一、師弟的關係あるものゝ外原稿を讀む事はお斷りさせて戴く。

一、師弟的關係あるものも一度發表したる後は原稿を讀む事をお斷りする。

一、發表する事を適當と思はない作品の發表の世話はお斷りする。

一、發表の世話は一度限りとする。

一度作品を發表したならば、一人前の藝術家として獨立したものと覺悟すべきである。その覺悟が出來ないならば發表しないのが當然である。發表する程の價値を認めない人に、發表の世話を頼み、一度發表なしても自力で立つ事が出來ないで、いつ迄も發表の世話を求めるのは厚顏しい。故に自分は藝術家として獨立し得るだけの價値を認めざるものゝ發表は、豫め止めさせるのである。しかも敢へて發表するものはその作によつて獨立する覺悟を定め、再び發表の世話を頼まないのが道である。

一、讀む興味を感ずる事の出來ない原稿を讀む事はお斷りする。

一、結緣深く、藝術的同質を感ずるものゝ外は師弟の關係に立つ事はお斷りする。

特別に敬愛を感じてもゐない人が、しかも非常に相違した素質を持つた人が、いきなり師弟的情誼を求めるのは無理である。かくの如き人は人を利用せんとするものである。又藝術を甘く見る

ものである。心より敬愛する同質のものゝ外藝術的には無緣である。我々は道の上に立つ時どこ迄も嚴肅でなければならない。その意味に於いては、かの禪門の如く、峻嚴な師弟關係でなければならない。その門に入らんとするに當つては殆んど奴隷的な謙遜と、忠順と、及び不屈の决心を示して漸く許され、一度入門するやあらゆる困難なる修業と、苛辣なる鞭撻によつて鍛煉せられ、始めて一個の禪僧が槌出されるのである。自分の如き甘き性格の人間は尙更この事を嚴重にする必要を感ずる。自分が心を籠めて書いた原稿を、自分が尊敬しているゐる先人に讀んで批評して貰ひたいと云ふ願ひは實に自然である。只その際その作品が充分の努力をもつて書かれたものである事は必要である。自分で全力を出した氣のしない原稿を他人に讀めと云ふのは厚顏しい。併し全力を出した作品でも發表するだけの價値があると認める事の出來ない人に發表の世話を賴むのは無理である。原稿を推薦するには公衆と出版社に對して責任がある。自分が價値を認めない作品を推薦する事はその人が喜こんでもしないのが正しい。而もそれだけの價値がないと、その人にはつきり云ふ事は氣拙い事を推察しなければならない。その氣拙さに堪へてはつきり云へば、

多くの場合その人の感情を害するのである。これは實に苦しい立場である。自信ある作品の發表を急ぐのは本人にとつて自然ではあるが、そして他人の批評に得心出來ないで、自作の價値を確信するのは一方賴母しくもあるが、自分の趣味では、既に見て貰つて批評を乞ふ以上は、その人が發表を勸めない時には控へ目な人の方を好む。自分はむしろ傍から勸められてやつと發表するやうな人の方を好む。若しその人の意見の如何にかゝはらず、自信を持ち、發表したいのならば、始めから原稿の世話を賴まないのが禮である。然らざれば他人を窮地に陷れるものである。自分はさう云ふ板挾みに出會つて苦しむ場合が多い。隱れたる天才の作が發表されないでゐるならば、どんな努力をしても發表を骨折らずにはゐられない。併し今の發表の困難な事情の下で、未熟の作品を少し許りの努力で書き、而かも不純な動機の發表慾を持つて推薦を求め、斷られた時不平を感ずるのは無理である。元來發表しない迄に他人に原稿を讀んで貰はうと云ふ事は既に藝術家たらんとするものに取つて自信のある事ではない。又、藝術家は自分が讀みたいと感ずる書物の外に、讀者の時間を割く事は本來適當な事ではない。自分の發表した作が自づと後進者を育てるの

は適當であるが、特に後進者を育てる爲に原稿を讀み、添削するが如きは寧ろ避く可きである。又今後の繁忙を極める社會に於いて、特別の分業の生じざる限り、恐らく此の事は一般に不可能となるであらう。かくの如きはむしろ今日の場合に於いては、批評家の仕事に屬すべきであらう。公衆が其の作品を持たない事が損失である程の作品を書いたならば、それが發表の機會を得ないと云ふ事は今日の場合でもないといつていゝ。作者は只それのみ心掛ければいゝ。それだけの作品を書きながら、隱されてゐるのであれば、不合理であつて、自分と雖も、どんなにでもして公衆に推薦せずには置かない。併しそれだけの價値のない作品が隱されるのはやむを得ない。作品を書かない前から、發表の事を氣にする如き人が、優れた作を書く事はないと云つていゝ。

斯くの如く煩瑣な規約を設ける事は實に好ましくない事である。自分は性格としても、趣味としても、さういふ窮屈さを最も嫌うものなのである。併し自分が忠實な藝術家である爲には、そして、眞面目な生活者である爲にはやむを得ないのである。自分は生來少しくどい、纒綿とした氣質であつて、自

分が健康であつた時には、徹夜して語り明かす事も度々あつた程である。一日に幾度も、同じ人に、長い手紙を書く事は珍らしくなかつた。自分は殊にさう云ふ事を喜こんだ。今の生活と比べれば、何と云ふ相違であらう。自分は愛人とさへも一週に一度、それも仕事を手傳はせ、一緒に勉強して、時間を節約し乍ら會ふやうな暮し方をしてゐる。手紙を書く事は殆んどない。併し今の自分にはやむを得ないのである。そこに避くべからざる人間の限界がある。自分はその限界を嘆く。併しそれを忍受する。そしてかゝる限界が適當でない程の惠まれた境涯に入りたいと心から願ふものである

（一九二二・六・一〇）

大正十一年六月二十日印刷　第一刷　自第一版至第十五版　一一一一五、〇〇〇册
大正十一年六月廿五日發行　（定價壹圓貳十錢）

曠野叢書
7
靜思

著作者　倉田百三
東京府北豊島郡長崎村一六二
發行兼印刷者　長島豐太郎
東京府北豊島郡長崎村一六二
印刷所　曠野社印刷所

東京府北豊島郡長崎村一六二
發行所　新しき村出版部　曠野社
（振替東京五二五四七）